

101 暖かい風の兄弟と冷たい風の兄弟の話

Native American Lore

これは、ずっと昔、最後の氷河期の頃に住んでいた二つのインディアンの部族に伝わる話なのです。一方の部族は、暖かい風の部族と呼ばれていました。そして、彼らは、**Dry Falls –Vantafe** といわれる地域に住んでいたのです。彼らが住んでいるところは、いつも暖かいところだったのです。その暖かい風の酋長には5人の息子たちがいました。

一方、二番目の部族の法は、冷たい風の部族と呼ばれていました。やはり、この部族の酋長のところにも5人の息子がいたのです。この冷たい風の部族のいるところと言えば、それはいつも決まって冷たい風が吹きすさんでいるような場所だったのです。そこにある湖も川もみんな凍っていたし、雪がいつも舞っているようなところでした。

冷たい風の部族が南に移動する時に、彼らは、暖かい風の部族に邪魔をされたのです。そこで冷たい風の部族は長老たちが集まり会議をし、もし、彼らが暖かい風の酋長の5人の兄弟を殺しさえすれば、彼らは、きっと自分たちが行きたい時に南に移動することができるだろうと決断をしたのです。

そこで、彼らは、コヨーテに暖かい風のところの5人の兄弟と、自分たち冷たい風の部族の5人の兄弟との間で果たし合いをしくんで欲しいと頼みました。この挑戦は直ぐ2受け入れられて、その戦いの日にちが決められました。すると、コヨーテはこの両方の部族の人たちにその果たし合いのことを言いふらしてまわったのです。

そして、その日になると、両方の部族の者たちがその果たし合いの行われる場所に集まって来たのです。2人の戦士が同時に戦うというわけです。暖かい風の部族の兄弟の1人が、冷たい風の兄弟の1人に挑戦するのです。冷たい風の部族の中の若い戦士は、彼らの敵と比較すると比べ物にならないくらい強かったのです。ですから、たちまちのうちに暖かい風の5人の兄弟は殺されてしまいました。

冷たい風の部族は、今、規律に対して強い力を持っており、彼らは強く規律を守り、また、規律に対してとても厳格だったのです。やがて、その地域に冷たい季節がやって来ました。川や湖は凍り付いて、コチコチになり、雪は、小屋が屋根まで埋まるまで降り続けました。Dry Falls のずっと南のほうでも、氷は、まるで山の高さまで積みあがっていました。

コヨーテはぞんざいに扱われ、彼の仕事は決して果たされなかったのです。暖かい風の部族の人たちは、無残でした。彼らは、冷たい風の部族の奴隷とされたのです。自分たちが見つけた食べ物はありとあらゆるものが、彼らから取り上げられてしまいました。彼らは、食べることでできるものといえば、それは冷たい風の部族の人たちが食べたくもないような食料の残りものだけでした。

それは、その戦いのずっと前というわけではないのですが、暖かい風の酋長の5人の息子のうちの一番下の兄弟がずっと南の方の部族の娘さんと結婚をしていたのです。彼女が、自分のもとの部族の所に戻ろうと決意をしたのです。そして、そこを離れる前に、彼女は彼女の夫の部族の人々に言いました。“私には子供が生まれます。どうか、その子が男の子であるように祈ってください。もし、私の子供が息子であったのなら、私は、彼をこの世界の中で誰にも負けないもっとも強い戦士になるよう鍛えるつもりです。そして、彼が成長した時には、彼をあなたの方の下につかわします。彼の面倒をどうか見てやってください。彼は、きっと自分のお父さんや叔父さんたちの敵を打ち、復讐をするでしょう。”

それから、二三ヶ月して、その女は1人の男の子を生みました。そのこが三ヶ月になると、彼は、強くなるために、冷たい水の風呂に入れられたのです。そして、若者に成長するやいなや、彼のお母さんや彼女の兄弟が、彼を強力な戦士に育てるよう懸命に鍛錬を続けました。

こうして、彼は数年の間、鍛錬をしました。そして、彼は、ずいぶんと強力な戦士に成り、木を根っこから引き抜き、それを遠くに頼り投げるができる程になりました。大きな石を持ち上げると、今度は、それを数 mile も遠くまで投げることもできるようになりました。こうして、もはや、彼は自分がこの世で一番強い戦士だと信じ込んだのです。

彼の母が、彼に、暖かい風の部族の兄弟と、冷たい風の部族の兄弟たちの間で行われた決闘のことを話して聞かせました。すると、その若い男は、彼は、自分のお父さんや叔父さんたちの復讐をしなくてはと思ったのです。そして、

自分の部族の人たちを解放しなくてはと感じたのです。しかし、彼のお母さんは、彼は、まだあと一年の間は訓練を続けなければと言いました。

その年の暮れまでに、彼は、小さな山なら動かすことができるようになりました。すると、今度は、母親は、彼に北にゆき、自分たちの仲間を助ける準備が整ったと言い聞かせました。彼女は、彼がなすべきことをしっかりと教え、お爺さん、お婆さんに自分を助けてくれるようお願いするんだよと言い聞かせました。

こうしてその若い男が北に向かって旅立ったのです。彼と一緒に南の暖かい風もついて行きました。彼が、お爺さんやお婆さんのいる家の近くまでくると、なんと、彼らが奴隷となって以来初めて、彼らの家の回りの氷が解け始めたのです。彼は、これにとっても喜んで、そして、御互いに聞きまわっていました。“ひょっとして、ワシらの孫が やってくるんじゃないのかね。お前さん、どう思うかね？”

その日、太陽が沈む前に、若い男が彼らのところに漸く辿り着きました。彼らは、彼がとても強靱な若者であるということがすぐに分りました。そして、彼が「自分は、冷たい風の部族に支配されているあなたがたを解放するためにやってきたのだ」と言う話しをすると、これを信じたのです。彼は、彼らがこんなに辛く扱われてきたことを申し訳なく思っていました。

そして、コヨーテが冷たい風の部族の酋長のもとに使いに出されました。暖かい風の部族の酋長の孫が果たし合いをするために来ているということを告げるためにです。こうして、その申し入れが受け入れられたのです。その果たし合いの日にちと場所が決められました。

支配をされている人々の村で、その孫にあたる男が、彼のお母さんの教えたとおりにするように頼みました。：“鮭を煮て、そのスープを五つの箱に詰めるようにしてください。”というわけです。

そして、その決闘の日の朝、両方の部族の者たちが戦いの場所に選ばれたところにやってきました。その孫は、まず、冷たい風の部族の一番年上の兄と戦ったのです。氷がとてもつるつるしていたのです。しかし、孫の男の言われた人たちが、暖かい鮭のスープの入ったバケツを投げつけたのです。すると、氷はぎざぎざになり滑らなくなりました。こうして、若い戦士は、5人の兄弟のうち一番上の兄を打ち負かしてしまいました。

すると、次に二番目の兄に前に進んで出てきて、若者と戦ったのです。冷たい風の部族の人たちが今度は、氷の上に水をまいて、滑りやすくしようとしました。そこで、暖かい風の部族の人たちは、その氷の上にも、暖かいスープの入ったバケツを投げつけたのです。またしても氷はざらざらになりました。そして、若い戦士は、二番目の兄も打ち負かしてしまったのです。

三番目の兄、四番目の兄、そして、末の弟が出てきましたので、彼は、彼らと次々に戦いました。彼は、そのたびに暖かい鮭のスープに助けられました。彼が末の弟を打ち負かすと、暖かい風の人々は自由になったのです。そして、彼らは、残りの冷たい風の部族の人たちをもう絶対に彼らに近づくことができないうくらい遠くの北の地に追放したのです。するとまもなく暖かい風が吹き始め、そして、辺り一面の氷が解け始めたのです。

春になると、若い孫の戦士は、北に向かって旅立って行きました。その後は、暖かい気候がずっと続いたのです。もし、彼が、冷たい部族の5人の兄弟に勝つことができなかったなら、私たちは今でも、氷河期のなかで生きていくことになっていたでしょう。

氷河期がこんな風にしてインディアン達の中に伝わってきていたと言うのは、驚き以外の何者でもありません。自然の脅威をこのようにして、勇気あるものが取り除いてくれたということが何時までも讃えられているのですね。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

102 コヨーテの鮭の話

Sanpoils

Native American Lore

昔、昔のこと、南の方に流れてコロンビア川に注いでいる Sanpoil 川という川があり、これは、その川の話なのです。その川の辺に、Sanpoil 族という名前なのですが、その部族のほかの者たちと一緒にある年寄った男と彼の妻が住んでいました。二人は腰が曲がっていましたので、その歩く姿はまるで、膝と肘をついているような格好だったのです。その彼らのところには、非常に可愛い孫娘があり、お爺さん、お婆さんと一緒に暮していたのです。

ある日のこと、コヨーテがやってきて、その綺麗な娘さんと一緒にいる老夫婦を見つけました。するとたちまち彼は、その孫娘を自分にお嫁さんにしようと思いついたのです。しかし、彼はそのことを彼女に直接お願いするよりほかにいい方法があると知っていました。夜になるまで待とうと彼は考えました。彼は、昼間、じっとそこに座っていれば、家族により気持ちよく迎え入れられると思ったのです。

年寄った二人は、彼の長い髪がきちんと編まれ、そして、彼の前髪も注意深く櫛で後ろにとかされているのに注目しながら彼を観察していました。二人は、このコヨーテが酋長になれるかどうか話していたのです。

昼遅くになって、コヨーテが老人の方に尋ねました。“あの向こう流れの下にあるものは何でしょうかね?”

“なにを言っているんだ。あれは、あたしの魚を取るしかけだよ。”と、老人が答えました。

“魚とりの仕掛け? それは一体なんなのですか? それをどうやって使うんですか?” とコヨーテが自分はしっていないような振りをして聞きました。

“ああ、ああやって私は時々だけど、なまずや黒鱒を捕まえるんだよ。”と老人が言いました。

“それは、あなたが食べるものなのですか？ そんなもの私は聞いた事ありませんが。肉が食べられるほどたっぷりあるんですか？”とコヨーテが尚も聞きました。

“そいつらは、決して沢山と言うわけではないが、じゃ、一体、ほかに食べるものがあるとでもいうんかい？”と老人が答えました。

“丘のほうに行って、辺りを見回したらいいと思いますよ。”とコヨーテが言いました。それは、丁度、日が沈む1時間ほど前のことでした。

丘の上に上がり、コヨーテが、木の上に止まっている何匹かの雷鳥を見かけました。彼は、それに向かって石を投げつけ、五羽ほどし止めたのです。そして、その雷鳥をあの老人の所まで持ってきて、“さあ、これで、夕飯を食べましょうよ。”と言いました。

その羽をむしったあと、その獲物を老人が火で丸焼きにし、料理が出来上がると、みんなで、座り込んで素敵な食事をしたのです。その歳寄りとその家族に取っては、それはとても素敵な祝宴のように思われました。

“こんな料理をお前さんはいつも食べているのかね？”と老人がコヨーテに聞きました。

“時には、野いちごを食べたり、木の根、そして、あなたの腕ほどもある大きな魚を捕まえて、もっと素敵な食事をしていますよ。”とコヨーテが言いました。

そして、そのあとになり、コヨーテは、もし彼らが望むなら、自分は、帰らずに、そこに留まっていたいと申し出たのです。

“それは、一体どういうことかね？”と老人が聞き返しました。

“分かりました。それは、こういうことです。つまり、私は、あなたのお孫さんと結婚したいということですよ。”とコヨーテが言いました。年老いた老人とお婆さんは顔を見合わせ、何も言いませんでした。コヨーテが、その年取った夫婦と内緒の話ができるくらいに近づいて 行きました。

コヨーテが立ち去ると、お爺さんがお婆さんに尋ねました。“あいつのことをどう思うかね？ 我々の夕飯のために素敵な食べ物をもって来るなど、お前さんはあいつのしたことを見ただろう。もし、ワシらが孫娘と結婚することを認めたなら、彼は、ずっと此処にいるようになり、そうすれば、わし等は何時だってあんな素敵な食事をすることができるんだ。どっちみち、わし等の孫はいずれ誰かと結婚するだろうが、この若いもんほど立派なものと結婚するとはかぎりゃんよ。”

“分かったよ、お前さん。わたしや、お前さんの言うことに賛成するよ。”

まもなく、コヨーテが戻って来ました。彼は、叔父さんに先に話をさせようと考えていました。お爺さんは、片手に自分のパイプを持って、こう言い出しました。“なんとか、私はタバコを吸いたいよ。私のタバコがなくなってからもうずいぶんと経ったよ。”

“此処に、私のタバコがあるよ。”とコヨーテが自分のポケットに手を入れて言いました。彼は、大きなタバコの束をつかみ出し、それを老人に渡しました。と老人は、コヨーテが本物のタバコを持っていることに非常にびっくりしながらも、そのタバコを自分のパイプに詰めたのです。

暫くして、老人が話しだしました。“私たち、夫婦はお前さんの申し出について、よくよく考え、妻は私の意見に従うことにしたよ。そして、わたしは、お前さんが私たちの孫娘と結婚し、ずっと此処にいてもよいと決めたよ。ところで、どうやってお前さんがそんな風にしてくれるということを確かめることができるんだい？”

“そんなこと、心配しないでくださいよ。”とコヨーテが言いました。“私はこれまで旅ばかりしてきて随分とつかれています。ですから、私は、私の残りの人生を此処で過ごしたいんです。勿論、もし、あなたがたがそれを許してくれるならですが。”

この言葉をきいて、老人はコヨーテが言ったことをすっかり信用するようになってしまいました。こうして、コヨーテはその可愛い孫娘を自分のお嫁さんにすることができたのです。

その晩のまだ、宵のうちのころ、コヨーテは彼の妻と一緒にいましたが、やがてこんなことを言い出しました。“私はちょっと外に出てくるからね。直ぐに戻ってくるから、そしたら、一緒に寝ることにしよう。”

“よく、わかりました。”と彼の妻が言いました。

コヨーテは、あの老人のつくった魚とりの仕掛けのところに行きました。そして、老人の仕掛けを籠の形の仕掛けに取替え、魚がその籠に入るよう岩を杭のように並べたのです。その作業が終わると彼は、公叫びました。“鮭さんよ。私は明日の朝、お前さんたちを二匹だけ欲しいんだ。しかも、一匹は雄で、もう一匹は雌をね。”こうしてからは、彼の花嫁のところに戻って行きました。

次の日の朝、コヨーテは老人に早く彼の仕掛けのところに行くように促しました。“昨日の夜のことなんだけど、私は鮭があつた仕掛けに引っかかったような音をたてていたように思うんですがね。”と彼はいいました。

そう言われて、老人は、鮭が掛かっているかどうか見に行きました。すると、間違いなく、そこには二匹の鮭が仕掛けにかかっているではありませんか。老人は、もうびっくりして、急いでコヨーテのいるところに駆け戻りました。

“おまえさんの言う通りだったよ。しかけには、ちゃんと私がこれまで見たこともないような立派な鮭が、二匹もかかっていたよ。”と老人が見てきたことを報告したのです。

“いや、それは、夢じゃないんですか。”とコヨーテがいいました。

“なら、私と一緒にきて、自分で確かめるがいいさ。”と老人がいいました。

2人が、仕掛けのところにゆくと、今度はコヨーテが興奮して叫びました。“本当だ。あなたの言うとおりの。ありとあらゆる魚の中の酋長の鮭ですよ。さあ、つかまえて、向こうの広場まで持って行きましょう。そして、それをどうするか私がお見せしましょう。”

彼らが広場にやってくると、コヨーテは、老人に丘の上まで行ってひまわりの茎と葉っぱを取ってくるように言いました。

“それらは、鮭の植物なのですよ。”、“鮭はいつもひまわりの茎と葉っぱの上に横たえておかなければいけないんです。”とコヨーテが説明しました。

そこで、老人はひまわりの葉っぱを土の上に広げました。コヨーテがその上に鮭を置き、そして、その鮭をどのように料理するかを老人に見せるために前に進んで来ました。

“まず、最初にですね、細い棒を鮭の口の中に通します。そして、それを頭が外れるように後ろに曲げて折るんです。次に、火の上であぶることができるくらいの長さの先の尖った棒を鮭の体の中に突き通すんです。”とコヨーテが言いました。

“このことをよく覚えておいてください。”と、言い、“最初の一週間は、毎日、あの仕掛けの所に下りて行って鮭を取るのです。しかし、鮭を捕まえるときに、決してナイフを使ってそれを外そうとしないようにしてください。私が教えたように、いつも、中に棒を指して火の上で焼くようにしてください。最初の一週間はどんなことがあっても鮭を煮ものにしてはいけませんよ。鮭がこんがりとおぶられたあと、それを注意深く裂いて、そして、中の骨を崩れないように取り出すのです。それから、鮭の頭の後ろのところは、神聖なものですから、ここは絶対に食べてはなりません。もし、あなたがたが、私が言った通りにしないようなら、その時には、あなたがたは、ガラガラ蛇に噛まれ、そして、死ぬことになるでしょう。”とコヨーテが付け加えました。

“鮭の骨を取り出したあと、それを鮭の頭の後ろの部分と一緒に、綺麗な、湿地の生えている草で、丁寧に包み、束にして、そして、それをどこか安全な場所の木に掛けて置くのです。もし、あなたがたが、私の話したようにちゃんと実行するなら、あなたがたは、いつまでも沢山の鮭を仕掛けのところで捕まえることができるでしょう。”

“私もやがては死んでいく運命にあるのですから、だから、こうして、鮭についての神聖な物語をあなたがたに話しているんです。私は、あなたがたや、あなたがたの部族の人たちに、自分たちの鮭を大切にし、そして、その恩恵を受けるもっともよい方法を知ってもらいたいんです。将来、あなたがた人間は、いつも鮭を捕まえるために川のあちこちに仕掛けをかけることになるでしょう。最初の仕掛けを持っている男が鮭の酋長になるのです。そして、他の人たちは、彼が命令することは、どんなことがあっても実行しなければならないのです。

“鮭の季節の最初の一週間が過ぎたら、あなたがたは鮭を煮物にしたり、あるいは、自分たちがしたいような料理をしても結構です。しかし、骨は、神聖なものとして丁寧に包み、大事にすることだけはいつも思い出して下さいーそれを足で踏まれるような、あるいは、跨れるような形にして放っておいてはなりません。”

そのことがあってから二・三日の間、その老人は毎朝自分の仕掛けのところに外かけて行きました。そして、いつも前の日の二倍もの鮭がいるのを見たのです。コヨーテは、彼に、冬のための蓄えとなるような燻製の鮭をどうやって作るのか教えてあげました。ずっと以前は、彼らは、乾燥した鮭が一杯吊るされたとても大きな樽を持っていたのです。

Sanpoil の部族の人たちは、魚を見て、そして、その老人とお婆さんがどれだけ上手にそれを料理するのか注意深く見てゆきました。彼らは、自分たちの村に戻り、仲間達に鮭という名で呼ばれている赤い大きな魚のことを、そして、老人にどうやって鮭を料理するのか教えていった、あの背が高く、若い不思議な若者のことを話しました。

それから、まもなく、ありとあらゆる人たちが自分たちもそれを習おうとやって来ました。老人とお婆さんは自分たちが丸焼きにした鮭を振る舞うために彼らを招いたのです。そして、老夫婦が、どうやって自分たちの孫の娘の夫となった若者が、鮭の捕まえ方、それを乾燥して冬の食料として蓄える方法を教えてくれたのかを話して聞かせました。

今日に至るまで、Sanpoil の部族は、自分たちは、ずっとずっと昔、そしてそのまた昔に、コヨーテが彼らの先祖に教えた方法で、実際に鮭を捕まえているのだと、言い伝えているのです。

頭がよくて、ずる賢いコヨーテがこんな風にしてインディアン達に生活の知恵を授けてきたこと、そして、鮭にまつわる言い伝えの中に、自然の収穫物を大切にするという話が含まれていることは、とても、心の和むものを感じましたが・・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

103 ちょっとばかりへまな接待役のウサギとカワウソの話

Native American Lore

沢山のアメリカ原住民部族たちは、いろいろな動物達が時には、だますようなやり方をしたり、彼らの工夫を凝らして他の動物の獲物を奪い取ったりする方法を言い伝えています。彼らは、その後、ご馳走を振舞ったり、自分たちと同じような生活をしているものたちに食料を分けてやったり、他の人が前に施したようなことをするのです。ところが、これがときに問題を引き起こすことがあるんです。

あるところに二つばかりテントが在りました。そのひとつにはカワウソが老婆さんと一緒に住んでおり、もうひとつのテントには、これまた、同じようにお婆さんと一緒にウサギが住んでいました。そして、ある日のこと、ウサギが、自分の家から外にでて、カワウソの家を訪ねようと辺りと歩きまわっていました。そのウサギがカワウソのテントに入っていくと、カワウソが、何か土産にここで食べるものを持ってきたのかと尋ねました。“いや、そんなもの持って来っていないよ。”とウサギが答えました。そこで、カワウソは、こんどはお婆さんに彼女がなにかウサギのために料理してやるものはあるのかと聞きました。が、お婆さんは何も料理するものなんかないよと言いました。

仕方なく、カワウソは、彼の住まいの前にある池の方に真っ直ぐ歩いて行き、なかなか立派なうなぎを捕まえて来ました。一方、ウサギのほうは、カワウソがどうやって食料を手にいれるのかじっと見つめていたのです。そして、カワウソがうまいこと獲物を捕まえると、ウサギは、自分もそれができるんじゃないかと考えました。

というわけで、次の日に、こんどはウサギがカワウソを自分の家に招待したのです。彼のお婆さんが、あらかじめ彼に、自分のところに

はみんなで食べるようなものを料理するものがないということを話して、何か食べるものを探してくるよう頼んでありました。そこで、ウサギはカワウソがあんな長いうなぎを見つけた同じ池に出かけて行きました；ところが、彼は一匹のうなぎも、そして、一匹の魚すら捕まえることができませんでした。彼には、もぐって魚を捕まえることなど到底考え付くことができなかったのです。

お婆さんは、しばらくの間、彼の帰りをまっていたましたが、戻って来ませんでしたので、カワウソに彼を探しに行くようにいい、彼は、探し回った挙句、最後に自分がうなぎを捕まえた同じ池のところに、びしょ濡れになり、しかも、獲物の収穫は何もない彼を見つけました。

“一体、どうしたというんだい？”と彼が尋ねました。

“私は、何か獲物を捕まえようと一生懸命になっているところなんだよ。”と返事をしました。

そこで、親切なカワウソは、池の中に飛び込んで行き、前と同じように立派なウサギを捕まえてきて、それをウサギのお婆さんが夕飯の料理をするようにとウサギにあげ、自分は家に戻ってゆきました。

そして、次の日になるとウサギはキツツキの所に出かけて行きました。彼がキツツキの家に着き、キツツキがお婆さんと一緒にいるところを見ました。

お婆さんは、料理を作るためにとても大きな入れ物を持っていたのですが、“この入れ物のなかには何もありやしないよ。”と言いました。そこで、きつつきは、乾いた木の幹のところにいて、そこから沢山の食べ物を集めて来ました。彼はそれをお婆さんにわたし、彼女はそれでみんなのために素敵な夕ご飯を用意しました。

このとき、ウサギは、キツツキがどんな風にして食べ物を集めてくるのかよく見ていて、こんどは、キツツキを自分に家に招待することにしました。次の日のこと、キツツキがウサギの家にやって来ました。すると、ウサギは、彼のお婆さんに食べ物の入れ物を持ってきて、みんなの食事を用意するように頼みました。

“そんなこと言たって、私のところには料理するようなものはなにもないじゃないかね”と彼女が返事をしました。すると、ウサギは食べ物を一杯つめるためにカバノキの皮でできた入れ物をもって、外に出かけて行きました。最初に、彼は、自分の鼻で食べ物を一生懸命掘り出そうとしました。そうです。それはまさしくキツツキが食べ物をとるのを見ていた、そのやり方と同じ方法だったのです。キツツキがなかなか帰ってこない彼の様子を見に来ました。

ウサギは、自分の鼻で木の幹の中をほじくり出そうとしましたので、その鼻の先が平らに、そして、真ん中から割れてしまい、すっかり傷だらけになってしまいました。というわけで、キツツキは何もご馳走にならずに自分に家に帰ることになりました。それ以来、ずっと、ウサギは、裂けた鼻をもって歩きまわらなければならなくなりました。

また、ある日には、ウサギは必死になって食べ物を探していました。そのときに彼は、ふと、あのカワウソのところにいってうなぎをすこし盗んでこようと思いついたのです。こうして彼は、その次の晩からそれが習慣のようになってしまいました。春になって、カワウソはどうも、自分のうなぎが少なくなっていましたので、一体どこに行ったのだろうと疑問を持ち始めました。

カワウソは、見張りをしようと考えたのですが、直ぐにウサギの足跡があることに気がつき、“そうだったのか。分った。よし、これからウサギを殺しにいこう。”と決心したのです。一方、ウサギのほうでも、カワウソの気持が何をしようとしているのか知り、カワウソがウサギの家に着いたときには、彼は、逃げてどこかに隠れてしまいました。

カワウソがウサギのお婆さんに、“ウサギはどこに行ったんだい?”

“私じゃ、知らないよ”と彼女が答えました。“昨日の晩、彼は、いくらかのうなぎを此処に持ってくると、そのままどこかに行ってしまったのさ。”

“彼は、ねっ。私のうなぎを盗んでいったんですよ”とカワウソが言いました。“だから、私は彼を殺すつもりなんだ。”

こうして、カワウソのウサギ捜査がはじまったのです。自分を追いかけてくるに違いないと思っているウサギの捜査だったのです。カワウソは、直ぐにウサギに追いつきそうになりました。そのウサギは小さな木切れを広いあげ、それに、隠れ家になってくれるように頼みました。すると、直ぐにその木切れは、小屋になり、ウサギは、その中に老人のような格好をして座ったのです。

カワウソがやってきて、その小屋を見つけましたが、その時に彼は、その小屋の中に白髪頭の老人が座っているのに気がついたのです。が、彼は、まるで目が見えないような振りをしたのでした。カワウソは、この老人がウサギだったとは知りませんでした。彼を哀れに思ったカワウソは、この老人のために薪を幾分か集めてきてそれをこの老人に差し出し、彼にウサギがこの近くを通らなかったかどうか尋ねました。“イヤーっ。私は、今日は誰もこの近くを通ったとは聞いていないよ。”ということで、また、カワウソはウサギ探しに出かけました。

後に、ウサギは彼の隠れがを後にし、そして、別の道に向かって出かけて行きました。カワウソは、ウサギの後を見失いましたので、彼もまた、その小屋に戻ってきました。ところが、その小屋は、誰もいないばかりが、跡形もなくなっていたので巢。ただ、そこにあったのは、小さな木切れだけだったのです。

ところが、そのあと、カワウソは、その小屋のあったところからウサギが飛び跳ねていった足跡を見つけたのです。このトリックにカワウソは、真っ赤になって怒り、“ウサギめ、また、このワシを馬鹿にしたな。”と大声で叫びました。こうして、カワウソは、そこで見つけた新しい足跡を追い始めました。

ウサギは、カワウソが自分に随分近づいて来ていると感じたときに、今度は別の木切れを広いあげ、それが何とか住処になってくれないかと考えていました。すると、なんと、彼があたかもそこに住んでいるかのような家ができたのです。カワウソは、すぐそばにやって来て、その家の前にベランダがついていて、その前を真っ白な服をまとった大きな男が新聞を読みながら行ったり来たりしているのを見て、これはおかしいぞとおもったのです。

これは、勿論、ウサギだったのですが、カワウソはそうとは気がつきませんでした。そこで、かれはその大きな紳士に尋ねました。“この辺りでウサギが逃げてゆくのをみませんでしたか?” その男は、聞こえない振りをしていました。そこで、カワウソがもう一度尋ねました。すると、その紳士は、ピジン訛りの言葉で “ウサギなんて見やしないよ。” というような意味の言葉を言いました。しかしカワウソは、まじまじとその紳士を見て、その紳士の足元に気がつきました。それは、確かにウサギの足の格好をしていたのです。そうして、彼は、こいつが確かに自分の探しているものだと分ったのです。

その大きな紳士は、カワウソに、いくらかのパンとワインをあげたのでした。するとカワウソは、それをもって急いで一度帰り、また、その家のところにウサギを追ってやって来ました。ところが、彼が戻ってみるとそこには家など姿形もありませんでした。カワウソが見たものは、ウサギが逃げた足跡だけでした。

“あいつめ、私をだますのは、これが最後だぞ!” とカワウソが覚悟しろといわんばかりに言いました。

やがて、ウサギは海岸にやって来ました。そこには、とても小さな島があったのです。その島はあまりにも小さいために、人は簡単にその島に一とびで行くことができたのです。彼は、こうしてその島に渡り、そして、その島が戦う武器になるように魔法をかけました。

そうしているうちに、カワウソも同じ海岸にやって来ました。そして、そこに錨を下ろしている大きな船を見ました。なんと、その船のデッキには、白いスーツをきたあの紳士が歩きまわっているではありませんか。カワウソは、その紳士に向かい、“もう、これ以上、私をだますことはできないぞ! お前こそ、私が探している張本人なんだ。”

カワウソは、その船のほうに泳いでいき、船によじ登って行って、ウサギを殺そうとしました。しかし、その大きな紳士は、水夫達に向かってこう歌っていたのです。“みんな、あいつを撃つのだ! あいつの毛皮は、フランスに行けば、随分高価なものなんだぞ。”

さてさて、この結末がどうなったかは、出てきませんが、ウサギがカワウソをだまし続け、最後の最後になってまで、悪知恵を働かせているのは、カワウソがすこし可愛そうな気が

します。フランスがカワウソの毛皮だけに興味があり、アメリカにわたってきたということが、インディアン達にもよくわかっていたのですね。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

104 北極星が夜空に動かないでいるのはなぜでしょう

Paiute

Native American Lore

これは、昔、昔の話なんですけど、まだこの世界ができたばかりのころ、天に住む人々は、それは休むことなく空を旅していたんです。そして、その旅のあとを天のあちこちに残して行きました。ですから、今、私たちが夜に空を仰ぐとそこに彼らの残した旅の跡を見ることができるのです。

ところがですよ、たった一つだけ、夜空の星で旅をしない星があるのです。ごぞんじでしょうか。そうです。それが北極星という星なのです。この星は旅をすることができないんです。彼は動けないんです。彼がずっとずっと昔、この地球の上にいたころ、彼は、**Na-gah**、つまり山羊、**Shinoh** の息子として知られていました。彼は、勇敢であり、誰からも愛されていて、とても頑強な足をもっており、しかも、勇気があったのです。彼の父は、そのかれをととても誇りに思い、そして、愛していたのですが、それがあまりにも度をこしていたために、彼は、

自分の息子の頭の両側についている耳にとっても大きな耳飾りをつけたのです。そして、かれが、とても威厳を持ち、重要な人物で、そして、指導者であるかのようにしたのです。

毎日、**Na-gah** は、山にどんどん登ってゆきました。彼は、もっとも険しくて高い山を目指し、その山に登ってゆき、そこに住むようになると、とても楽しかったのです。その彼は、ずっと昔に一度だけ、非常に高い山を見たことがあったのです。その山の斜面は、とても急でしたが、滑らかで、そして、その鋭い頂は、雲よりも高く、天に突き出ていたのです。**Na-gah** は、それを見上げると、“その、天辺はどうなっているのかな。その一番高いところに登ってみることにしよう。”と彼は言いました。

こうして、彼は、のぼり道を探しながら、その山のまわりを旅して回りました。しかし、彼は、のぼり道を見つけることができませんでした。どこにもそののぼり道がなく、あるのは、とても厳しい崖だけでした。この山こそ、登ることができないほど厳しい、彼がみた最初の山だったのです。

彼は、どうすればよいのか考えに考えました。こんなことでは、彼のお父さんが、仮に自分の息子が登ることもできないような山があるのと知ったなら、きっと恥ずかしく思うに違いないと感じました。**Na-gah** は、なんとしても頂上に通じる道を探そうと心に決めました。彼の父は、もし、かれがそれほど厳しい山の天辺に立っているのを見たなら、それを誇りに思うでしょう。

こうして、彼はその山の回りを歩きまわり、時々立ち止まって、その厳しい崖のどこかに自分が登っていけるような裂け目がないかどうか、探しまわったのです。何度も何度も、自分が行けるところまで登ってゆったのですが、それでも、彼は、いつも引き返して、また降りて来なければなりませんでした。そんなことを繰り返している、あるとき、彼はとうとう、ずっとしたの方まで続いている岩の大きな割れ目を見つけたのです。彼は、その中に最初降りていったのですが、直ぐに上の方に繋がっている洞穴があるのを見つけたのです。彼は、しめたと思いました。こうして、彼は、どんどんその穴を登っていったのです。

そうしていると、直ぐに暗くなり、彼は何もみることができなくなると、その洞穴は、緩んで、彼の足元に崩れ落ちてくるような岩で一杯になっていたのです。そして、彼は、転げ落ちた石が、底で粉々に砕け、その瞬間、その洞穴を通して、猛烈な音が響いてくるのを聞いたのです。その暗い洞穴のなかで、彼は、時に滑り落ち、また、時に膝をすりむいたりしていました。彼の勇敢さと意欲がだんだんくじけて来ました。彼は、それほど暗くて、そして、危険な場所などこれまで見たことがなかったのです。彼は、恐ろしくなり、体がとてもだるくなってきたのです。

“もう、これ以上はだめだ。一度、戻って、またどこかもっとましな道のぼり道を探すことにしよう。”と独り言をいい、“開けた崖なら、何も恐いことなんかないんだが、でも、此处の穴は真っ暗だし。恐ろしくて仕方ないよ。ちょっと、恐いんだ。何とかここから出たいんだけど。”と思いました。

しかし、なんとしたことでしょう。Na-gah が降りようとしたら、彼の下洞穴が崩れた岩で埋まっていたのです。彼は降りることもできなくなりました。いまや彼にはただ一つのことしか残されていませんでした。彼ができたことは、：どこか外にでるまでのぼり続けることだけでした。

そして、長い間のぼり続けた、そのあと、彼は、かすかな光を見ました。そして、自分がその穴の外にやっと登りつめたということを知りました。“とうとう、やった。”と彼は声を出して言いました。“私は、あの暗い穴をとうとう登りきったんだ。なんと素晴らしいことだ。”

彼は、自分の周りを見渡すと、息をつくことができなくなるほどでした。と言うのも、彼は、自分が、あのとても高くて厳しい山の頂にたっていることに気がついたからです。そこには、彼が歩きまわるほどの空間さえ殆どなかったのです。そして、この一番高いところから回りを見た彼は目が回りそうになったのです。どっちを見ても、そこにはとても険しい崖があるばかり、そして、自分が動くことができるのは、ほんの僅かな場所があるに過ぎないとわかったのです。彼が降りて行くことのできるのは、この外側だけしかなく、あの洞穴の内側はもう、うずもれて通れなくなっていたのです。

“ああ、私は、死ぬまで此処にいななければならないのか。”とかれが言いました。“しかし、私は、この山を征服したんだ！ 私は、とうとう、自分の山に登りきったんだ！”

彼は、岩の小さな割れ目に見つけたほんの僅かの草を食べ、水を飲んで飢えを凌いでいました。そうすることですこしは気が休まったのです。彼は、まわりには自分よりも高い山がないことに気がつき、自分のずっとしたのほうに地球があるのが見えました。

丁度、このころ、彼のお父さんが天を歩き出していたのです。彼は、自分の息子を探してあちこちいったのですが、しかし、彼を探し出すことはできませんでした。大きな声で、“**Na-gah, Na-gah**”と叫んだのです。すると、彼の息子は、その一番高い崖の上から返事を返しました。**Shinoh** は、そこにいる息子をみて、とても悲しくなりました。“おお、私の勇敢な息子は、もはや、此処にはもどって来られないのか。彼は、いつまでたったって、あの高い山の頂上にいななければならないんだ。かれは、動き回ることも、山に登ることもできなくなってしまったんだ。”

“でも、私は、あの勇敢な息子が無駄に死なせたりはしないぞ。彼を星にしてしまおう。そうすれば、彼は、あそこにずっといることができるし、誰でも、かれがそこにいるということがわかるように光り輝いていられるのだ。この地球ばかりでなく、天界にいるすべての生き物の目じるしになるに違いない。”

こうして、**Na-gah** は、誰でもがみることのできるような星になったのです。この星だけが、いつも同じ場所に見つけ出すことのできる唯一の星なのです。彼は、いつも動かずにじっとしているのです。彼のお陰で方角を決めることができるのです。ですから、彼を見上げた旅人は、簡単に自分のすすむ方角を知ることができるのです。彼は、他の星たちのように動き回ることをしません。ですから、彼は“動かない星”と呼ばれているのです。しかも、彼は、いつも、真北の方にいますので、私たちは、彼のことを **Qui-am-I Wintook Poot-see** とよんでいるのです。その意味は、“北極星”と言う意味なのです。

この **Na-gah** のほかにも、沢山の山羊達が、星となっているのです。彼らは、“北斗七星”、そして、“小びしゃく”星座と呼ばれて

いるのです。彼らも偉大なる山を見つけ、そして、それに挑戦したのです。彼らは、その頂にじっとしている **Na-gah** を見て、そこまで行ゆきたいと思ったのです。

Shinoh、彼は、北極星の父になるのですが、かれらも星に変えたのです。ですから、あなたがたは、天界のなかのその大きな山の麓にあたるところに彼らを探し出すことができるかもしれません。いつも彼らは旅を続けているのです。彼らは、その山のまわりを、頂にじっとしている **Na-gah** のところに通じる道はないかと探しながら、ぐるぐるまわっているのです。一方、**Na-gah** は、今でも北極星としてじっと動かずにいるのです。

自然の中で生活しているインディアンには、文字も学問も必要なければ、天文学などというものもいらなかったはずなのですが、それでも、天の星の動きをこのようにしっかりと理解していたことに驚きを感じます。

大草原を旅し続ける彼らにとって、夜空の星が動くことは、どんなにか不思議なことではなかったかと、彼らの思いを想像するだけでも楽しくなりますが……。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

105 ウサギと月の男

Micmac

Native American Lore

ずっと昔のことですが、そのころはウサギは立派な狩人だったのです。その彼は、**Micmac** の森の奥深くに建っていた小屋にお婆さんと一緒に

住んでいました。それは、ある冬の事です、ウサギは、食料にする獲物を取ろうと仕掛けを作り、その罠をかけておいたのです。彼は、こうして沢山の動物や鳥達を捕まえたのですが、ところがある日のこと、その彼の仕掛けた罠をとて不思議な生き物が盗んでしまったのです。そんなことがあり、ウサギと彼のお婆さんは食べるものがなくなってしまったのです。彼は、毎朝、自分の仕掛けた罠の跡を見にいったのですが、そこはいつも空っぽだったのです。

最初、ウサギはその仕掛けのそばに残っていた細長い足跡をみるまで、その泥棒はずるがしこいグズリなのだろうと思っていました。それが、泥棒の足跡だと思ったのです。しかし、それらは、月の光のようにも見えました。毎朝、ウサギは段々速く起きるようになりましたが、長い足の生き物は彼から遠ざかっていってしまい、いつもその仕掛けには何もかかっていなかったのです。

ウサギは、弓の紐を輪にしてとても上手に罠をつくってありましたので、彼は、もし泥棒が来たなら必ずその罠に掛かるはずだと思っていました。彼は、その皮ひもの端を自分に結び付けて、仕掛けを見張ることができるような藪の後ろに隠れていました。彼がまっている間、月の光がとてもきらきらと輝いていたのです。ところが、突然、その月が見えなくなり、辺りが急に暗くなりました。ほんの僅かの星がまだ輝いていましたが、かといって、空には雲は殆どなく、ですからウサギは、あの月に一体何が起こったのだろうかと不思議に思いました。

すると、なにか得体の知れないものがこっそりと森影からやってくるではありませんか。ウサギは彼の仕掛けの方に真っ直ぐ伸びて、かれが仕掛けた罠を照らしている、白く輝く光のお陰で、殆どその姿が見えない形になっていました。そして、まるで光が一瞬輝くように、ウサギは、弓の弦を引っ張り、それを鼻のところにしっかりと固定しました。すると、なにかもがいているような音がして、光が横から横に動いたのです。ウサギは、その紐をぐいっと引っ張れば、盗人をつかまえられると分っていたのです。彼は、その紐がぴんと張っている状態で小さな枝に結び付けました。

ウサギは、賢い歳寄りのお婆さんのところに、なにがおきたのか話すためにもどったのです。するとお婆さんは、彼に直ぐに罠のところに戻って、ウサギが捕まえたのが誰であるのか、あるいはどんな正体をしているのか確認しなく

てはいけないよと言いました。とても恐がりのウサギのほうは、日が昇り明るくなるまで待っていたかったのですが、お婆さんは、それでは遅すぎるよと言いましたから、ウサギは彼の仕掛けのところにもどったのです。

そして、彼が仕掛けのところにもどってみると、まだ、光線が差し込んでいたのです。その光があまりにもまぶしかったので、彼の目が少し見えなくなりました。そこで、彼は、近くの小川の凍った水の中に目をつけたのですが、しかし、其れでも彼の目は普通の状態にもどりませんでした。彼は、今度は、すこし大きな雪の塊をつくり、それをその光に向かって、光が別のところを照らすようにと投げつけたのです。ところが彼がその光のほうに近づいてゆくと、シューシューという音がして、それが溶け出していることが分りました。そこで、ウサギは、川の底から柔らかい泥のとても大きな塊を掬い取って、それで沢山の土の玉を作りました。彼はとても投げるのが上手でしたので、それらの玉を踊りまわっている光めがけて、思いっきり投げつけたのです。その玉が見事に命中した音が聞こえ、彼の餌食となったものが悲鳴を上げました。

すると、なんともいえない不気味な、震えた声が聞こえてきたではありませんか。そして、その声は、彼がなぜ罠にかかったのか尋ね、自分は月にすんでいる男で、月が沈む前にどうしても月に戻らなければならないので、どうか自由にしてほしいと頼んできました。その男の顔には、泥のしみができ、ウサギが近づいて見ますと、その月の男は、彼を見て、もし彼が直ぐに自分を自由にしないのなら、彼と彼の部族の者すべてを殺してしまうと驚かして来ました。

ウサギは、彼があまりにも恐くなって、急いで自分のお婆さんのいるところに駆けて戻り、この不思議な獲物のことを話したのです。すると、彼女もとてもこわくなって、ウサギに戻って直ぐにその盗人を自由にするように促しました。ウサギは急いで元の場所に戻りました。そして、彼が月に住んでいるという男に、もし、彼がもう二度と獲物を盗んだりするようなことをしないと約束するなら、自由にしてやろうではないかと話したのですが、その時には彼の声は、恐ろしさでガタガタ震えていたのです。この約束を確かめるために、ウサギは、彼に二度と耳に聞こえるようなところに来ないと約束するかと聞き、月の男も自分はもう決して、こんなことはしないと誓いました。ウサギは、ちかちかする光に目がくらんで、彼を殆ど見ることはできませんでしたが、しかし、結局、彼が自分の歯で弦を噛み切ってやると、その月の男はたちまち天のどこかに消えていなくなってしまうました。そして、そこには彼が通った光の後だけが残っていたのです。

あまりには、まぶしい光でウサギは殆ど目が見えない状態になっていました。そして、彼の肩にはひどい火傷ができていたのです。今でも、ウサギは、あたかも光が彼らの目には強すぎるという感じで瞬きをしていますし、彼らのまぶたはピンク色をしているのです。そして、きらきら輝く光を見るときにはいつも、涙を一杯流すのです。また、彼らの口もと、いかにもその時の恐ろしさを表すかのようにいつも震えて居るのです。

その月に住んでいるという男はそれ以後二度と地球に戻ってくることはありませんでした。その彼がこの世の中を照らしているときには、私達は、あのウサギが彼の顔に投げつけてのこした泥のしみを今でもみることができるのです。彼が、自分の顔にできたしみを消そうと思い、そんな時には、彼は幾晩か姿を隠すことがあります。そのときには、この世界は本当に暗くなりますよね；しかし、また、その月の男が姿をみせると、やっぱり、ひかり輝いている彼の顔には、その泥のしみは決して消えることなく残っているのを見ることができます。

ウサギが月に住んでいるというのは、東洋だけの伝説なのでしょうか。ウサギと月の関係をこんな風に説明しているインディアン達は、どんな発想をしたのか不思議な気がします。月のしみのこともとても印象的です。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

106 火の取り合い競争

Karuk

Native American Lore

これはずっと、ずっと昔のことなのですが、そのころは、3人のスズメバチの娘たちだけが火を持っていました。他の動物達は、氷ついていたのですが、其れでも火は彼らからは遠い存在でした。しかしながら、賢いとしとったコヨーテがその火を盗むことを考え、手助けをしてくれるほかの動物の仲間のリストを作りました。コヨーテは、スズメバチたちの気をそらし、その間に火のついた枝を掴み取り、まっしぐらに逃げ出したのです。スズメバチたちが彼を追いかけてきました。すると、コヨーテは手にもっているその木をワシに手渡し、彼は、今度はそれをヤマネコに引き継ぎました。こうして手渡しを何度か重ねたあと、カエルがその熱い火種を口の中に咥えて、川の底にもぐってしまいました。というわけで、とうとうスズメバチは、追いかけるのを諦めてしまったのです。カエルが口の中に咥えたその火種を吐き出すと、柳の木がそれを包み込んでしまったのですが、そこで、コヨーテは、それをどうやって引き出すのかその方法を他の動物達に教えてあげたのです：それは、二本の小枝を乾いたコケの上でこすりつけてやればよかったのです。こうして、すべての動物達が火を持つことができるようになり、毎晩、その回りに集まり、輪になって歳寄りの人たちが聞かせてくれる話を聞いたのです。この自然の世界のなかで何がとても大事なものであるのか、そして、その火とともに仲良くして生活していくことがいかに大切なことであるかを思い知らせてくれる話しでした。

展開がはやくて、とても短い話でしたが、なるほどと思わずにはいられない素敵な話でした。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

107 うさぎの仲直り

a Native American Lore

この話は、昔、昔、全能の神 **Gloscap** がまだ **Wabanaki** の世界を治めていたころの話なのですが、そこには、ふたりの元気のいい動物、一方は **Keoonik** というカワウソ、そして、もう一方は、**Ableegumooch** といううさぎがすんでいました。かれらは、御互いにずっと昔から罾を仕掛けて獲物の取り合いをしていたのです。

ある日のこと、**Keoonik** が、泳いでいるときに、**Ableegumooch** が来て、彼が岸においてあったうなぎをとって逃げて行きました。そこで、**Keoonik** は、急いで水から上がり、怒って跡をつけていったのです。彼は、うさぎが飛跳ねるときに大地につけた魚の形をした印が、どっちに行ったかをしっかりと教えてくれましたので、うさぎを追跡するのにはそれほど苦勞をしませんでした。しかしながら、その足跡が、かすかな火のそばにやせ衰えたお婆さんがいるという、森の空き地のところで終わっているのをみて、彼はびっくりしてしまいました。

“**Kwah-ee, Noogumee**” と、歳とった婦人のためにかしこまった挨拶をし、“貴女は、長いうなぎを引きずりながら、この道を飛び跳ねていったうさぎを見ませんでしたでしょうか?” と尋ねました。

“うさぎだと?、うさぎ?” と歳とった婦人がつぶやき、“それはいったいどんな動物かね?” と聞き返してきました。

カワウソは、それは、ちっちゃな、茶色の跳ね回る動物で、長い耳と短い尻尾をもった奴ですよと説明しました。

“そんな動物、お目にかかったことがないね。” とその歳寄りがぶつぶつぶやき、“だけど、わたしやお前さんが此処に来てくれてとても嬉しいよ。わた

しゃ、いま寒くて仕様がなないんだ。病気なんだよ。火にくべる薪を集めてきてくれんかね。”と言いました。

Keoonik は、喜んでお婆さんの頼んだとおりのことをして上げました。そして、薪を集めてもどってみると、彼はびっくり仰天。なんと、あの老婆がいないのです。彼女が座っていた場所には、うさぎのお尻の跡が残っているだけ。あの見慣れた足跡が森の方に消えていっていたのです。彼は、**Ableegumooch** が非常にたくみに自分の姿を変え、そして、人をだますことにたけていることを思い出したのです。

“おお、なんて情けないうさぎの奴だ!” と **Keoonik** は叫び、そして、再びうさぎの後を追ったのです。今度は、足跡は、**Penobscot** というインディアンたちの部落の方に真っ直ぐ続いていました。そこで、**Keoonik** は、伸ばした髪の毛に酋長の羽飾りをつけたか弱そうな哀れな男と話をしているウサギを見つけたのです。そこで、かしこいカワウソは、ずんぐりとした木の陰に隠れ、そこで待ち伏せしていました。今度は、**Ableegumooch** は、なにやらぶつぶついいながら道を駆け下りて来ました。彼の顔は、気もそぞろに不満に満ちて、シワだらけになっていました。

そんなわけで、**Keoonik** は簡単に彼を捕まえてしまいました。彼は、うさぎの頭を棒でゴツンゴツンと叩くと、**Ableegumooch** は、草の上に倒れこんでしまいました。

“思い知るがいいさ。” と **Keoonik** は、満足げに思い、うさぎが気を取り戻すのを座って待っていました。

そして、**Ableegumooch** が気を取り戻したのですが、彼はボーッとした様子で、足がふらついていました。

“お前は、私の獲物のうなぎをどうしたんだ?” と **Keoonik** が問いました。

“私は、うなぎを全部インディアン達に上げてしまったのさ。” とうさぎが、ぶつぶつ言いながら自分の頭を正気に戻そうと唸り声で言いました。“なんだって、そんなことをしたんだ、お前は気でもちがったのかい?”

“いや、**Penobscots** の人々は、飢えで苦しんでいたんだ、**Keoonik** よ” と、うさぎが返事をしました。“何ヶ月ものあいだ、誰かが彼らの食べ物を盗み続けていたんだよ。”

“じゃ、全く、おまえと同じじゃないかの。” と **Keoonik** が睨んで言いました。“あれは、私のうなぎなんだぜ。”

うさぎがなにか思いついたことがあるかのように、後足で大地を力強く踏みつけました。

“そうだ。**Keoonik** よ、一緒にその泥棒を捕まえて、懲らしめてやろうではないか。”

“一緒にだって？” と今度は、**Keoonik** がびっくりしたように言いました。

“そうさ。おまえとわしと一緒にだよ。” と、彼の仲間は自信を持って言いました。“だから、その泥棒を見つけ出すまで、僕らの戦いは、一休みにするんだ。” **Keoonik** は、**Ableegumooch** は、他の人の食べ物をぬすんでいくようなやつに対して不満をいうなど、なかなかいい奴だと内心思いました。そして、彼もまた、**Penobscots** の人々を、可哀想に感じていたのです。

“よーし。分った。” と彼は承知しました。“僕たちは暫くの間、仲直りということにしよう。” こうして彼らはうやうやしく握手をしたのです。それから、彼らは村に戻り、酋長が誰か手助けをしてくれる人はいないか頼みに戻りましたが、ところがそこで、彼らは酋長に話をしていた二匹の別の動物達を見つけました。それは、イタチの **Uskoos** と、野鼠の **Abukeheech** で、彼らはいつもごたごたを起こしていましたので、彼らの仲間たちですら、彼らと一緒に行動するようなことをしていませんでした。

“ちょっと聞いてみよう。” と、木の陰に **Keoonik** を引っ張り **Ableegumooch** がつぶやきました。

“酋長、私たちがあなたのために泥棒を見つけてやりますよ。” **Uskoos** が言うのを聞きました。

“心配なんかすることはないですよ。” と、今度は、**Abukcheech** の声がしました。

Ableegumooch は、カワウソに不満を漏らしました。

“今の言葉、聞いたかい？”

“聞いたともさ。”と **Keoonik** が言いました。“インディアン達が我々の助けを要らないなんていっていたのはこのためだったんだ”

“でも、どうしてなんだろう。”とうさぎが考え深そうに言いました。

“なにが、へんなことでもあるのかい？ それにどうして我々はここそとしていなくてはならないんだ？”

“シーッ。ちょっと考えてごらん。**Keoonik**。おまえ、あの2人がどうやって生きているのか、なにか思い当たるふしでもあるのかい？ 彼らは、昼間はずっと寝ているのに、夜になると狩に出かけるんだぜ。”

“われわれの仲間だって、なかには夜に狩に出かけるのが癖の奴もいるぜ。”と **Keoonik** が、冷静に答えました。

“分った。じゃ、ちょっと聞いてごらん。”とうさぎが言いました。“家の中にあるカワウソの毛皮、全部が、めためたに引きちぎられ、破られて、ずたずたになっているではないか。あんなに引きちぎったり、かきむしったりする動物は一体どこの誰だと言うんだい。”

“イタチと野鼠さ。”と **Keoonik** が即座に答えました。“その通りさ。よし、彼らの後をつけてみよう、そして、どんなことがおこるか確かめるんだ。”

こうして、**Keoonik** と **Ableegumooch** は、彼に気づかれないように、随分と長いことイタチと野鼠のあとをつけて行きました。そして、丘の斜面にできた大きな巣穴のところまでやって来ました。その穴には、評判の悪いイタチと野鼠が沢山群がっていたのです。かれらは、**Uskoos** と **Abukcheech** を喜んで迎え、彼らがこれから何を喋るのか聞いていました。一方、うさぎとカワウソも、ブルーベリーの木陰に隠れ、彼らもまた、その話を聞こうとしていました。

“われわれは、彼らに非常に友好的であった。”と **Uskoos** がにやにやしていました。“そして、彼らは我々が彼らを助けるだろうといていたんだ。”

“そう、いま、彼らは我々を疑ったりなんぞしていないさ。”と **Abukehiich** がいいました。そして、そこにいるすべての野鼠とイタチたちが、いかにも嬉しそうにたいそうご機嫌だったのです。

“さあ、いまこそ、時が来た。”と **Uskoos** が言いました。“すべての動物に一緒に来るように声をかけるんだ。いいかい、今、あの **Penobscots** のインディアン達を征服する時が来たんだ。我々は、あのインディアン達より痩せているんだから、われわれは自分たちのためにすべての食料をもつことがあたりまえなんだ。”

“そうだ。そのとおりだ。”とみんなが賛同して声を上げました。

“どうやって、他のものたちを仲間に入れるつもりなんだ？”と **Abukcheech** が尋ねました。

“痩せている連中は、我々に対してノーということを恐れているのさ。”と **Uskoos** がはっきりと言いました。“他のものにはうまく策略を使うのさ。かれらには、**Penobscots** のインディアン達が、この地上の動物達をすべて殺してしまおうと計画していんだ、だから、われわれは自分たちを守るためにみんなで協力しなければいけないというんだよ。”

“それから、狼と熊とヘラジカが我々に味方するのさ”と **Abukecheech** が叫びました。“我々は、たちまちすべてのインディアン達を自分たちの配下にすることになるだろう。”

カワウソとうさぎはわが耳を疑いました。誰かがこのことをインディアン達に知らせなければならないのだ。

“こっちに来いよ。”と **Keoonik** がつぶやきましたが、うさぎは、じっと自分が隠れている場所に、緊張してじっとしゃがみこんでいました。事實は、彼はくしゃみをしたかったのです！ **Ableegumooch** は、それまでの自分の一生で一度もしたこともないようなくしゃみが出そうだったのです。でも、彼はくしゃみをしてはなりませんでした——と言うのも、もし、くしゃみをすればそのおとでみんなが逃げ出してしまうからでした。ですから、かれはなんとかくしゃみをしないようにと我慢に我慢を重ねていたのです。かれは、上唇を押さえ、顔は真っ赤になってきました。そして彼の目には涙がたまり、——といって、なにもよいほうには回転しませんでした。

“あーッ、はーッ、はーッくしょん!”

その途端、イタチと野鼠たちが **Keoonik** と **Ableegumooch** に襲い掛かり、彼らを取囲んでしまいました。

“スパイだ!” と **Uskoos** がなじりました。

“こいつらを殺すんだ。殺せ!” と **Abukcheech** が煽り立てました。

“いいことを思いついたぞ。” と **Uskoos** が言いました。“こいつら2人は、我々の最初の新兵なんだ。” こう言って、彼は、この捕虜たちを彼の隊の隊員にならなければ、殺すぞと脅しました。

哀れな **Ableegumooch** 、かわいそうな **Keoonik**。彼らは死にたくはありませんでしたが、しかし、**Penobscots** の人たちは彼らの友人でしたので、彼らは盗人達が望んだようには決してすることができなかったのです。**Ableegumooch** は、例え結果がどんなものであってもこの泥棒たちに反抗するという気持ちを表して口を開き、そして、その口を勢いよく閉じたのです。彼は不思議な音を耳にしました。それは、遠くから聞こえてくるフルートの音色だったのです。そして、その音色の意味が彼にはわかっていたのです。それこそ、**Glooscap** のあの魔法のフルートでした。その偉大なる想像の神が彼にメッセージを送っていたのです。

うさぎの頭のなかに、**Glooscap** がずっと昔に一度、半分冗談、半分真面目で彼に言った言葉が蘇ってきたのです。“**Ableegumooch** よ、” 彼にはその言葉が再び聞こえてきたような気がしました。“蛇を捕まえる一番いい方法は、自分もその蛇と同じ様に考えることだよ!” この意味がうさぎには直ぐに理解できました。彼は、かれらは意地汚く、そして、自分勝手な奴らばかり、だから、イタチや野鼠のそんな気持ちになることにしました。こうして、そのあとかれはある考えを思い着きました。

“わかった。分ったよ。” と彼はいい、“私たちも仲間になろう。あのインディアン達は確かに非常に情けがないし、正直ものじゃないよ。かれらこそ、最悪な目にあっても当たり前なんだ。たった、昨日のことなんだぜ。” ——とここで彼は、**Keoonik** にこっそりと肘で合図を送りました。—— “なあ、私の友人と私は、ある秘密の場所にとっても沢山の食料を隠しているところを見たんだ。そうだったよな、**Keoonik**? ”

“おお、確かに、そうだったよな。”と **Keoonik** が、うさぎがどんな策略を用意しているのか思い浮かべながら、慌てて返事をしました。

イタチと野鼠たちは、まるで興奮して飛び上がらんばかりでした。“どこだ？ どこなんだ？ その場所はどこなんだ？”

“直ぐにわれわれをその場所に案内するんだ！”と **Uskoos** が彼の唇をなめながら叫びました。

“承知した、”と **Ableegumooch** が、“僕等の後をつけてくるがいいさ。”と森に向かって歩き出しました。

野鼠の **Abukeheech** は、彼らのすぐ後についたのですが、**Uskoo** は、直ぐ、彼を無視しました。それから、それぞれの動物達が、先を争って歩き出しました。こうしてみんなが、森を走って通り抜け、草原を横切り、谷に入り込んでゆき、さらに、丘を越えて行きました。押し合いへし合いしながら、御互いになぐりあったり、あるいは、ののしりあいながら、彼らは、草の沢山生えた丘の下までやってきたのです。そして、**Ableegumooch** はその丘の頂上にある大きな岩を指さして、こう言いました。

“お前さんたちが探している食料はあそこに行けば直ぐに見つかるさ。急いだ、急いだ！ 一番早いものが、最初にあそこにいけるんだ。”

と、みんな、我先にと争って駆け上って行きました。うさぎとカワウソは、そばに立って、その野生の暴徒達が丘の上にもがきながら上って行くのをじっと見ていたのです。ところが、彼らは懸命に駆け上ったものですから、自分たちが崖の縁をふらついているのだと分ったのですが、その時にはすでに遅かったのです。彼らは、自分たちの前には、何もないのに気づいたのです。が、もう、止まることができませんでした。しかも、自分たちのずっとしたの方には海が広がっていたのです。一番前にいた連中は、このことに気がついて必死に止まろうとしたのですが、なにしろ、後ろに沢山のものが這い上がってききましたので、これを止めることができませんでした。そして、恐怖におののきながら、彼らは次々にその海にまっさかさまに落ちていったのです。

“うまくいったな。”と **Kenoonik** が、震えながら崖の縁から覗き込んで言いました。“彼らがいなくなって部族は幸いだ。”

“**Penobscots** はそのとおりさ。 ” とうさが言いました。 “そうなんだ、いまこそ僕たちは協力して、野鼠とイタチからわれわれの友人をまもったんだ。さあ、よい隣人たちならそうしなければならないように、僕たちもなかよく家に戻ろうよ。 ”

“僕はそうするつもりなんだ。 ” とカワウソが言いました。が、しかし、彼は、直ぐに大地をのたくり歩き出しました。**Ableegumooch** が彼に躓きました。

“頭を殴るのは、だからなんだよ。 ” とうさが笑いながらいい、

木を掴みました。怒りながら立ち上がると、**Keoonik** は、彼のあとを “私が追いつくまで、待つんだ。私が畏の遊び方を教えてあげるからな。 ” と叫びながら追いかけて行きました。彼らは仲直りは終わったのです。

そして、**Glooscap**、彼は、**Keoonik** や、**Ableegumooch** のところの中にインディアンに対しても、あるいは、また、御互い同士が、何の意地汚さや、慾がないことを良く知っていましたから、彼らのふざけを笑いながら、**Blomidon** から見下ろしていたのです。

さあ、これで、**kespeadooksit**——つまり、この話は終りということさ。

最後にインディアンの言葉まで出てきて、随分楽しい話でしたね。御互いに助け合うことの大切さをこんな形で教えていたのですね。改めて、人間の知恵を深さを感じた次第です。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

108 人間とワタリガラス

Anishinabe

Native American Lore

あるところに、真っ黒なワタリガラスが飛び回ったり、ギャーギャー鳴いたり、あるいは、けたたましく鳴いたりしているのをみて楽しんでいる一人の男が降りました。それがあんまりにも楽しかったものですから、彼は彼らをもっと近くで見ようと木に登ったりしていました。ワタリガラスも最初のうちは何ヶ月も彼のことを無視していたのですが、しばらくしてから、ある一匹のワタリガラスが近くの木から飛んでいって、その男のいるすぐ近くに下りていったのでした。

そして、なんとなんと、びっくりしたことには、その鳥が、男に話かけたのです。“お前さんは、ずっと長いこと僕らのことを眺めていたね。僕らに近づこうとしていたね。でも、一体どうしてそんなことをするのかね？”

すると、その男は、“私は、なんにも悪気なんかないよ。わたしはね、お前さんや、仲間達にうっとりとしていただけなんだよ。お前さんたちの遊びや、鳴き声を楽しんでいるのさ、そして、わたしはね、お前さんたちの喋っていることが分ればと思っているんだ。そうすれば、もっとお前さんたちのことをよく知ることができるからね。”と答えました。

これを聞いたワタリガラスは、“我々のことを知りたいなんて本当に名誉に思うよ。お前さんが我々に意地悪をしないというんなら、我々の言葉をお前さんに教えてあげようではないか。”

こうして何ヶ月の間、ワタリガラスたちはその男に自分たちの話す言葉のすべてを教えたのです。そして、自分たちが毎日どんな風に生活しているかも見せてあげました。その男はいろいろなことを教わり

ましたので、ワタリガラスのことについてなにからなにまで知ることになったのです。ワタリガラスたちは彼のことを良く知り、そして、自分たちの友達として受け入れたのです。

そして、ある日のこと、一羽の歳寄りのワタリガラスがその男のずっと上のほうを飛びながら、胡桃の実をその男の頭のうえに落としたのです。それは意識してやられたことで、ワタリガラスのみんなが彼らの止まっている枝を折り曲げてやんやの喝采をしたのです。あるワタリガラスなどは、飛び上がったのですが、あまりにも夢中に笑いましたので、その男のまん前に落ちてしまうほどでした。

男は、気分の悪い思いをし、自分が笑い者になったことに名誉を傷つけられ、すぐ目の前にいるワタリガラスに尋ねました。“どうしてみんなは、私のことをからかっているのですか ”

そのワタリガラスは笑うのをやめ、そして、真面目な顔をして、“私たちは、お前さんに我々のことを理解させようとしたのさ。だけど、はっきり言ってお前さんは、理解していないよ。もし、お前さんが分っていたのなら、お前さんは、我々がお前さんのことを嘲っているのではないと分ったはずさ、・・・まあ、それはそれとして、ちょっとだけだけ悪ふざけをしたのかも知れないがね。われわれは、お前さんと‘遊び’をしているのさ。ただ、それだけさ。そう、真剣に考えることもないよ。お前さんはもっと我々のことを良く思ったほうがいいよ。”と言いました。

男は、そういわれたことを理解するのに少し時間がかかりましたが、すこし時間がたってから、また、いくつかの冗談な遊びが彼の身の上におきたのです。そして、今度は彼は、その鳥達にちょっとだけ、“好意”を持つように成りました。こうしてみんなで楽しいときを過ごし、その男は、ワタリガラスとより親しくなったのでした。

そんなことをしているうちに、また、別の事件がおこったのです。若い一人のワタリガラスが、突然空から舞い降りてきて、その男の頭をつついたのです。と、今度は別の若いワタリガラスもやってきて、同じ様に彼の頭をつついたのです。男は、原っぱを走って横切り、森の木の中に逃げ込みました。しかし、ワタリガラスたちは尚も彼を追いかけて、しかも、巧みに森の木の間を猛烈な勢いで飛び交い、しきり

にその男を困らせたのです。でも、結局、二羽のワタリガラスは追いかけるのを止め、男に挑戦を意味するような言葉を大声でわめきだしたのです。

また、男は分らなくなっていました。しかし、彼は、この二羽のワタリガラスが自分に気がたっているのだと分りました。ですから、彼は、その場所から遠ざかり、ワタリガラスたちの好きなようにさせようと思ったのです。こうして、男は、何ヶ月ものあいだ、彼らから離れていました。

自分の部落に戻り自分の仕事をしている時に、彼は自分が経験したこの冒険の話、そして、ワタリガラスたちについて学んだことを村の人たちに聞かせてあげました。ある人たちは非常に興味をもって聞いていましたが、なかには、ワタリガラスのことをそんなに一生懸命知ろうとするなんて、この男はどうかしているよと言う人もいました。そんなことをしているうちに村人達は、この男のことを “黒い羽 ” と呼ぶようになりました。それは、彼があまりにも鳥達のことに詳しくなかったからなのですが。しかし、その男は異議を唱えて、“自分は、もう、これ以上ワタリガラスたちには近づきはしないよ。” と言いました。

空の上の方から一羽のワタリガラスのギャーギャー鳴き叫ぶ声がしました。みんながこれを見上げて、自分たちがワタリガラスのことが分ることに驚きを感じました。が、ある者たちは、鳴き声以外に何も聞くことができなかったので、辺りをキョロキョロ見回していました。ワタリガラスは、あの男に話しかけ、“お前さんは、これまでのどんな **Anishinabe**(人間たち)よりも、ずっと我々と親しくなったんだよ。だが、確かに親しくはなったが、まだ、お前さんは、我々のことをすべて知ったというわけではないんだ。私がお前さんを我々のところに案内しよう。われわれは多くの仲間がお前さんがいないというので淋しがっているんだ。” と言いました。

黒い羽はワタリガラスの後をつけていくことにしましたが、やがて、彼は村のはずれで立ち止まりましました。彼は、回りを見渡して他の **Anishinabe** が聞いていないことを確かめ、ワタリガラスに尋ねました。“どうして、お前さんたちは、あの二羽のワタリガラスが私に敵意を

持って、腹を立てているというのに私に戻ってくるように進めるのかね ” と。

ワタリガラスが彼の前に舞い下りて、“お前さんが我々のことについて知っているというものがどれだけ少ないか分っているのかね。あの二羽のワタリガラスは、別にお前さんと戦おうとしたわけではないんだよ。というのはお前さんは、**Asnishinabe** だし、ああすることが、彼らがワタリガラスの一員としてお前さんを仲間に入れる印だったのさ。”と言いました。“お前さんは、我々が自分たちの中でもあんな風にしてやりあうのを知っていなくちゃいけないね。あれは我々のやり方の一つなのさ。腹をたてて、すねていなくなったりする代わりに、戻ってきて正々堂々を戦うんだよ。”と付け加えたのです。

黒い羽は、黙ってそこに立ち止まり、そして、“本当に、ワタリガラスについて私の知らないことが沢山あるんだね。たぶん、我々は、これまで御互いに理解しあうには、あまりにもかけ離れているんだね。私は、ここに留まり、そして、村の人たちのところに戻ることにするよ。”

ワタリガラスは、もう一度、黒い羽の意思を翻させようと話しました。“それは、お前さん次第さ。しかし、もう一度言いたいね。お前さんは、これまでのどんな **Anishinabe** よりも我々ワタリガラスと親しくなったんだよ。それをまだ我々のことを理解できないからと言って、すべて投げ出してしまうつもりかい？”

黒い羽が、“そんなこと無駄なことさ。これまでだって、私がどれだけお前さんたちのことを理解できたと言うんだね、私は、飛ぶことさえできないんじゃないか！”

と、突然、回りの木々の間から、猛烈な爆笑の笑い声が聞こえて来たのです。黒い羽は、そこに、ワタリガラスたちみんなが隠れて、聞いていたんだということに気がつきました。

“勿論、お前さんは飛ぶことなんかできないさ。だって、お前は、**Ashininabe** だし、我々はワタリガラスなんだから。しかし、我々は、お前さんを我々の仲間として受け入れようとしているんだよ。われわれはお前さんと遊びことができるし、お前さんと戦うこともできるん

だ。われわれはお前が好きなんだよ、そして、どうしてももどってきてほしいんだよ。だから、**Anishinabe** でもなく、また、ワタリガラスでもない、得たいの知れないものになってしまうんだから、われわれと同じ様になるために飛ぼうとなんかしないで欲しいんだよ。われわれは、ワタリガラスとしてわれわれを理解している一人の **Anishinabe** としてのお前さんが好きなんだよ。さあ、我々のところに来るかどうかは、お前さんの気持ち一つさ。”

黒い羽は、**Anishinabe** の村に戻り、そして、彼がワタリガラスの人たちと一緒に暮らすことにしたので、別れを告げに来たとみんなに話して回りました。村人達との別れが済むと、やがて、彼は村を去って行きました。**Anishinabe** の人たち、みんなが、彼との分かれのためにやって来ました。そして、その空のずっと上のほうには、何千羽というワタリガラスがいたのです。

そして、非常に高いところから、あの年老いたワタリガラスが、しきたりに従い黒い羽の頭の真上に胡桃の実を落としたのです。ワタリガラスのみんなが大笑いをし、そして、**Anishinabe** の人たちもやっぱり大笑いをしたのです。

黒い羽も、にっこりと笑い、そして、その年老いたワタリガラスを見上げて、“いい人だね ”と言いました。

Charles Phillip Whitedog

ワタリガラスと人間とのかかわり。ワタリガラスが知恵者で、これに少しでも近づいて、その知恵に肖りたいという願いがこもった伝説のように思いましたが、・・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

109 ウサギとコヨーテの話

Native American Lore

この話はウサギ叔父さんとコヨーテの物語なのです。あるときウサギはある大きな岩に所にやってきて、そこで、コヨーテをだましたのです。コヨーテが直ぐそばに来たときに俺は、その岩にもたれかかっていたのです。

コヨーテが、このウサギを見て、“お兄さんよ、一体そこで何をやっているんだい？”と聞きました。

するとウサギは、“おお、友よ、いいところにきた。直ぐにあがってきてくれ。今にも空がわれわれの上に落ちてきそうなんだよ。だから岩をこうして、その支えになるように抑えるんだ。”とコヨーテに頼んだのです。

“承知した。”とコヨーテがいい、彼も全身の力を込めてその岩を支えはじめました。コヨーテはすこしおっちょこちょいだったものですから、ウサギが彼に言ったことを真に受けていわれたとおりにしたのです。そして、ウサギは、なにか支えを持ってこなくてはいけないと行って、その場を離れ、コヨーテをそのまま置き去りにしてどこかに行ってしまった。ウサギがなかなか戻ってこないものですから、とうとうコヨーテが、

“おい、お兄さんよ、戻ってきてくれよ。岩が重くて疲れてきたんだよ。”と叫びました。

でも、ウサギは戻っては来ませんでした。

“ああ、どうしようもないよ。いいや、空が落ちてきたってもう知りやしないよ。”と、コヨーテが言いました。そして、彼は一目散に逃げ出し、谷間に倒れ込んだのです。ウサギは戻ってなど来ませんでした。コヨーテは置き去りにされただけなのです。

それからしばらくして、今度はウサギは、ある池のところにやって来ました。そこには、月が水面に写っていたのです。ウサギは人をだますのが非常に上手でしたから、彼は、いつもコヨーテを罾にかけていたのです。頭の悪いコヨーテは、いつも彼の後をついてまわり、まさかウサギがかれを騙しているなどとはすこしも気がつきませんでした。そして、コヨーテはウサギがいる池のところまでやって来たのです。すると、ウサギはコヨーテがやって来るのをみて、今度は池の水を飲み始めたのです。

“お兄さん、何をしていますか？”とコヨーテがまたウサギに尋ねました。

“見ての通りさ。兄弟よ、ここには沢山の食べ物があるのさ、”とウサギが答えました。

“一体、どんな食べ物があるんだい？”

“みてごらん。”とウサギがコヨーテを促しました。

そして、コヨーテは水のなかを覗いて、“あゝ、何かあるけど、あれは一体なんだろうね？”と言いました。

“あの水の中にチーズがあるんだよ、”とウサギがコヨーテにいい、“もし、この水を二人で全部のみ干してしまえば、あのチーズがとれるじゃあないか。だから、水を飲んでしまうんだ。お前さんのほうが体大きいから、お前さんなら必ず全部水を飲み干してしまうことができるはずだよ。”

“分かった。そのとおりだ。”とコヨーテは言って、また、その水をガブガブ飲み始めたのです。

“私は、ちょっと散歩してくるからね。”とウサギは行って、また、そこからどこかに言ってしまいました。

コヨーテは、いつまでもその水を飲み続けました。が、ウサギはどこかに行ったきり、戻ってきませんでした。コヨーテのお腹は一杯になり、お腹の調子が悪くなり、彼はその場を離れてしまいました。かれはその水を全部飲み込んでしまうことができなかったのです。とい

うわけで、彼の努力は実を結ばず、無駄なことをしただけになりました。

インディアンたちの間では、コヨーテのほうが智慧ものとして、尊敬されているのですが、この話は、馬鹿なコヨーテのように描かれています。すこし可愛そうな話ですが、一生懸命、勉強しないとこんなコヨーテになってしまうですよという、教訓のような話でした。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

110 うさぎが太陽に向って弓を射った話

Native American Lore

それは、真夏の凄さを表すものでした。一年のその時期を、偉大なる熱の神、**Hadotso** と呼んでいたのです。その時期は一日中、あの真っ青、雲ひとつない空から、強烈な日差しが太陽がこの地球をじりじりと照りつけていたのです。何日も何日も雨は降らず、息を詰まらせるような空気を冷やしてくれるほんの僅かな風さえも吹いてはいませんでした。この地球上にあるものすべてが熱く、乾ききっていたのです。あの真っ赤なバラのような色をした谷間、そして、平らな台地の下の崖ですら、それ以前よりもずっとぎらぎらとしているように見えました。

動物達はその悲惨さにみんなぐったりとしていたのです。外は暑くて、その暑さにあえぎながら狩ができるような温度ではなかったから、

彼らは、喉がからからに渇き、食べ物に飢えていたのです。そして、何とか陰ができるような岩や森を探し求めまわっていました。

そんな動物たちの中でも、一番悲惨だったのはうさぎでした。その日、二度ほど、揺らめく熱が彼をそのむき出しの大地を走りぬけ、水と涼しさと木陰のあるところに行くように誘惑したのです。かれは、そこにたどり着こうと懸命になったのですが、近づくとそのたびにどんどん遠ざかっていく蜃気楼を見ただけで、ほとんど疲れ果ててしまいました。

こうして、疲れ果て惨めなうさぎ、突き出した岩陰のしたにもぐりこみ、そこで、呆然として座りこんでいました。彼の柔らかな毛は、荒野の赤い誇りでこり固まってしまいました。頭はふらふらとするし、目は太陽の光線でちりちりとしていました。

“どうして、こんなに熱くなくっちゃいけないんだ?” とかれはうめきました。“一体、われわれが何をしたって言うんだい。こんなひどい仕打ちを受けなきゃならないのは?” かれは、太陽に向かって上目遣いに睨みつけ、腹をたて、“あっちへいってしまえ。お前さんはなんでもかんでも暑くしすぎなんだよ!” といいました。

ところが太陽のほうはこんなこと一考に木にかけませんでした。そして、これでもかこれでもかというようにその強烈な太陽光線をこの地上に注ぎ続けました。ですから、ウサギはたまらず何度も岩陰に非難していなければならなかったのです。“太陽さんよ、あなたはすこし勉強しなくちゃいけないね、”とウサギが小言を言いました。“私は、犠牲的な気持ちで太陽と戦ってみようではないか。もし、かれが照りつけるのをやめないのなら、かれをやっつけてやるから。” 決心したのです。

このかれの決意が太陽を刺激し、かれを疲れ知らずにし、今度は耐え難い太陽の光を注ぐかわりに、かれは、自分が毎朝、昇ってくるこの世の東のはずれのほうにかけて行き、そこから見えなくなってしまったのです。

かれがかけていったときに、かれは、自分の持っている弓矢の扱い方を鍛錬していました。そして、彼自身がどんどん勇敢になり、頑強

になっていったのです。彼は、自分の行く手を阻むものすべてと戦ったのです。彼は、あるときにはホリネズミと、そして、またあるときにはトカゲと戦いました。カブトムシや、あり、そしてトンボには自分の持っているやりを投げつけました。また、ユッカやお化けサボテンにも投げつけました。こうして、彼は、名実ともに非常にすさまじいうさぎになったのです。

その彼が、この世の端に辿るその時まで、太陽は空のどこかに行ってしまう、もはやどこにも見つけ出すことができませんでした。

“卑怯者め!”とうさぎがののしりました。“かれは戦うのが恐くなったんだ。しかし、彼はそう簡単に私から逃げられやしないさ、”と言って、彼は、木陰に入り、そこに座って待つことにしました。

そうした日にちの間、太陽は、今日のような形でユックリとは現れて来ませんでした。その代わり、地平線からアット言う間に昇ってきて、そして、力強く跳躍して、天国に入って行きました。うさぎの方は彼を待ち伏せるために直ぐに行動を起こさなければならないと良く分っていました。そして、太陽がいつも上がってくる場所を目を凝らして見つめていたのです。

しかし、太陽の法は、うさぎの脅しかたを良く聞いていました。そして、彼が戦うのを何度も視ていたのです。彼があのもりかげに隠れて自分を待っているのを知っていたのです。というわけで、彼は、この貧弱な動物なんか少しも恐れていなかったし、彼をからかってなにか楽しんでやろうと考えていたのです。

そこで、彼は、自分がいつも上がってくる場所から少し離れたところに転がって行き、うさぎが一体何事がおこったのか納得する前に、空にさっと上って行きました。うさぎがぎょっとし、それから我に帰り、弓矢を弾く前に、太陽は、かれのずっと上の安全なところまで言うってしまったのです。

うさぎが、地団太踏み、かっとなり、きりきり怒り出しました。これをみて、太陽は大笑いをし、以前よりももっときつく照り出したのです。

この熱のために沢山の動物たちが死んだのですが、でも、うさぎは決して諦めませんでした。次の日の朝、彼はもう一度、挑戦したのですが、しかし、今度は、太陽は、また別のところから昇ってきて、また、上手に彼から逃れてしまいました。

次の日も、また、次の日も同じ様なことを繰り返しました。時に、太陽はうさぎの右手の方から昇ってきたかと思うと、つぎには、左の方から、そして、なんとかれの真正面からも上がってきたのです。しかし、いつも、うさぎはどこから昇ってくるのか皆目見当がつかなかったのです。

ところが、ある日の朝、太陽はちょっとばかり油断をしたのです。彼は、いつもよりものんきに昇ってきたのです。今度は、うさぎはこれを余裕を持って待ち構えていました。彼は、素早く弓を弾いたのです。空気を劈いて、矢がヒューと飛んでゆき、太陽のわき腹を深くえぐって此处に突き刺さったのです。

してやったり、うさぎは歓喜しました。少なくとも、彼は自分の敵を射止めたのです。もう、嬉しくて気も狂わんばかり、彼は、そこいら中を飛跳ねてまわりました。大地に自分の体をこすり付けるような転がりまわり、とんぼ返りをしてはしゃいだのです。そして、もう一度、太陽をみて、それを急に止めました。

太陽の彼の矢の刺さったところが、深くえぐれて折、その傷のところから、火がどろどろとなって勢い良く流れでて来ているのです。それは、この世界中がたちまちにして火の海になってしまうのではないかと思われるほどでした。そして、炎が立ち上がり、ぱちぱち音を立て、唸りながら、うさぎのほうめがけて噴出してきたのです。

うさぎには、もう、一時の余裕もありませんでした。彼は、恐怖のあまり、混乱状態になり、その火から逃れようと必死になって走り出したのです。そして、ある一本の銀杏の木を見つけると、一目散にその方に逃げ込みました。

“なんと言うことだ。すべてのものが燃えているんだ！”とうさぎが喚きました。“どうか、私をかくまってくれないか?”

すると、銀杏の木は、その細い枝を弱弱しく振り、“私に何ができますでしょうか?”と答えました。“私は、焼き殺されてしまいよ。”

うさぎは走りました。彼が走った後から、炎が今にも追いつきそうになっていました。自分の後ろに炎の息が感じられたのです。今度は、枯れの道筋にアカザの木が茂っていました。

“隠れさせて! 隠れさせてよ!” うさぎはあえぎあえぎ言いました。“炎が追いかけて来るんだよ。”

“私は、お前さんを助けることなんかできないよ。”とアカザの木が答えました。“私だって、枝ごと、根こそぎ焼かれてしまうよ。”

恐怖で、うさぎは息もできないほどになり、其れでも、まだ走って逃げました。しかし、彼の体力には限界があり、力尽きてしまいました。彼は、火が、彼のかかとを嘗め尽くし、そして、自分の毛が焦げ出しているのが分りました。と、突然、彼は誰かが彼を呼んでいる声を耳にしたのです。

“早く来なさい。私の下に来るんだ!” “炎は私の上をサーッと通り過ぎていただけなんだから。私の天辺が少しこげるだけだよ。”

それは、その小さな枝を包むように綿の枝に似た花をつけた小さな緑の藪の声でした。この声を聞いたうさぎは、喜んで、その下に飛び込み、そこにぶるぶると震えながら横になっていました。彼の目は恐くて開けては居られず、耳は、体にぴったりとくっついてしまっていました。

ものすごい、雷の唸りと共に、幕となった炎が頭の上をサーッと通り過ぎて行きました。ちいさな藪は、ぱちぱちと燃え、シューシュー音がしました。それから、だんだんとその音は、小さくなって行き、やがて、辺りには、また元のように静かになってきたのです。

うさぎは用心深く頭を持ち上げ、そして、回りを見渡しました。すると、どこを見ても、この地球は、真っ黒にこげ、そして、煙が立ち昇っていたのです。しかし、あの炎は、もうどこにも見当たりませんでした。彼は、助かったのです!

彼をかくまってあの小さな藪は、もう、緑ではなくなっていました。あの炎により、燃え尽き、焦げてしまったのですが、でも、それは、金色のような黄色になっていました。今の人たちは、それを砂漠の黄色い藪と呼んでいます。といのは、この藪は、最初は緑色をしているのですが、太陽の熱を感じるといつもこうして黄色にかわるからなのです。

一方、うさぎのほうは、この恐怖を決して忘れることができませんでした。そして、今日まで、彼は、彼の首の後ろの、炎で焦がされてしまったところが、茶色の斑点になって残っているのです。そして、彼は、もはや気性が荒々しくはなくなり、喧嘩をするようなことはなくなり、どんなかすかな音にも、直ぐに逃げたし、物陰に隠れるようになったのです。

ところで太陽の方はといえば、彼も以前のようにではなくなりました。彼は、あのように輝いており、誰も彼の弓矢にあとを見つめるほどそんなに長く見ていることができません。が、彼は、いつも、自分が姿を全部現す前に、水平線の上にちこっとだけ出て、注意深く様子を伺うようになったのです。

うさぎと太陽がこんな風にして戦いをするというのは、とても天衣無縫な発想のように思います。その結果が今のうさぎの性質になり、そして、もっと面白いのは、日の出の様子が、こんな理由からだと言明されていることです。その様子がよく分るような気がします。・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

111 悪魔の大將と大洪水の話

Chippewa

Native American Lore

Maine 州、そして、カナダの Nova Scotia からロッキーの山にかけてのインディアン達の間には、偉大なる悪魔に関するこんな言い伝えがあります。もう、一世紀以上も前のこと、Serpentこそ、“真の偉大なる悪魔”だと思われていました。ここに出てくる話は、大昔の大洪水の話のある別の言い伝えなのですが、世界中で語られているものなのです。

Nanabozho (Nuna-bozo, アクセントは bozo の方にあります)は、Chippewa のインディアン達の間で言い伝えられている沢山の物語に出で繰る英雄でした。ある時代に彼らは、スペリオール湖の辺、今のミネソタとウィスコンシン、そして、オンタリオ州ですが、その辺りに住んでいました。

ある日のこと、Nanabozho が、長いたびから自分の小屋に戻ってきますと、彼は、自分と一緒に住んでいた若い従兄弟がどこかにいっていなくなっていることに気がつきました。彼は、従兄弟の名前を懸命に呼び、探したのですがどこからも返事は戻って着ませんでした。いろいろな道の後を調べましたが、Nanabozho は、そこに偉大なる Serpent の足跡があるのをみて仰天してしまいました。かれには、彼の従兄弟が自分の敵に捕まえられてのだということが分ったのです。

Nanabozho は、自分の弓と矢を見に付け、その serpent の足跡を追跡してゆきました。大きな川を通り過ぎ、幾つもの山々の乗り越え、そして、谷をわたり、ある深く、そして、どんよりとした湖の岸のところまでやって来ました。その湖こそ、今、聖の Manitou 湖、もしくは、悪魔の湖と呼ばれているところでした。偉大なる Serpent の足跡は、その水際のところまで続いていたのです。

Nanabozho は、その湖の底に、あの偉大なる **Serpent** の住みかがあるのを見つけたのです。そこには、彼の召使達や手下土もの悪魔の霊が満ちて居ました。彼らの姿格好は、不気味で、また、見るも恐ろしいものでした。そして、その殆どは、彼らの親分の似たような魂を持っていたのです。この恐ろしい仲間達の真ん中に、あの、偉大なる **Serpent** が、**Nanabozho** の従兄弟の回りに、彼のいかにも恐そうな長い足を巻きつけて座っていたのです。

Serpent の頭は、真っ赤な血の色をしており、彼の鋭い目は、まるで火のようにぎらぎらしていました。彼の体全体は、色とりどりの鮮やかにきらきらと光る武器のようなうろこで覆われていました。

この悪魔のねじれた聖霊たちを見下ろして、**Nanabozho** は、彼の従兄弟のあだ討ちをしようと決心しました。

彼は、雲の向かって“消えうせろ！”と叫びました。

すると、雲はたちまちどこかに消えてなくなりました。

“風たちよ、直ぐに静まれ！”と、風がなくなりました。

悪魔の聖霊たちがいる湖の上を覆っている空気がよどむと、今度は、太陽に向って、“ありったけのきつい日差しを湖に浴びせ、あの水を沸騰させるのだ。”と **Nanabozho** がいったのです。

Nanabozho が考えたのは、こうすれば、あの悪魔の大將は、涼しい木陰を探してあの湖の岸に生えている木の下に来るだろうということでした。そこで、彼は、あの敵を捕まえて、あだ討ちができると思ったのです。

こうして、注文をつけたあと **Nanabozho** は弓と矢をもつて、その悪魔が木陰を求めて垂がってくるのではないかと思われるところに潜んでいました。それから暫くしてかれは腐った木の、ぼろぼろになった根株のところに場所を移しました。

風は全くなく空気も静かで、太陽は雲ひとつない空からじりじりと照らしたのです。今度は、湖の水がたまりませんでした。その湖面が沸騰しはじめたのです。そして、太陽の光線が悪魔の家にまで届くよ

うになりました。水が沸騰し、泡立つようになると一匹の悪魔が自分の頭を湖の湖面から外にだし、回りの岸を見回したのです。すると今度は、別の悪魔が湖の上にあがって来ました。両方の悪魔は **Nanabozho** の足音に耳を立てたのですが、彼は直ぐそこにいたのです。

“**Nanabozho** がここに寝ているぞ。” と御互いにいいあっていました。

そして、悪魔の聖に近づくとジューと音をたてるようにも見える水の中に彼らは慌てて潜りこみました。

それからそんなに時がたたないうちに、湖はもっと大変なことが起こりました。それは、そのずっと深いほうから沸騰し始め、熱く水の波が土手のほうにある岩めがけて猛烈な勢いで広がっていったのです。

彼の血のように赤いとさかがほてり始めました。彼のうろこから反射する光はまばゆく、それは、冬の太陽のもとで雹に覆われた森の輝きのごとく光っていたのです。他の悪魔の聖を従えていました。その数といたらこれまた凄いものでしたので、彼らは直ぐその湖の岸を占領してしまったのです。

彼らが朽ちた木のぼろぼろの根株をみて、彼らはこれは **Nanabozho** の魔術の一つにちがいないと思いました。彼らは彼のずるがしこさを十分知っていたのです。悪魔の1人がその根株に地価好き、そして、自分の尻尾をその周りに巻きつけました。そして、それを湖のなかに引っ張ってゆこうと試しました。**Nanabozho** はその怪物の尻尾が彼のわき腹をちくちく刺しましたので、大きな声で泣き喚くのをはまんしきれなくなっていました。しかし彼は、しっかりと立ちどまり、そして、声を出しませんでした。

悪魔の聖霊たちが動き出しました。そして、悪魔の大將は森の中に滑るように入って行き、自分のもっている巻き毛を沢山の木に巻きつけました。彼の子分達もみんな陰になるところを見つけたのです。ただし、一匹だけは別でした。彼は、**Nanabozho** の足音を聞くために岸の近くにのこっていたのです。

そして、切り株から **Nanabozho** は悪魔のみんなが眠ってしまい、見張りが目を凝らして別の方角を警戒しているのを見ていました。それから、音を立てずに彼の 矢筒のなかから矢をとりだし、それを弓にかけると、あの悪魔の大將の心臓を狙いました。そして、その矢が的を射たのです。山を揺るがすような、そして、洞穴の中の獰猛な野獣たちをびっくりするような喚きごえで、怪物が目覚めたのです。するとその子分達をつれて、かれらもまた怒りと恐怖でうめき声を上げていたのですが、悪魔の大將は湖の水の中にもぐっていつてしまいました。

湖の底、そこには今も **Nanabozho** の従兄弟が横たわっていました。悪魔達は、怒りで彼の体をばらばらにしていきました。その引き裂かれたこっぱ微塵になってしまいました。彼の小さくなった肺は湖面に浮かび上がり、それが湖を真っ白に覆ったのです。

悪魔の大將は直ぐ、自分は負った傷のために死んでしまうだろうと観念しました。しかし、かれと彼の子分達は何とか **Nanabozho** をやつつけることを諦めませんでした。そして、湖の水を一杯吸い上げ、それを雷の轟きとともに岸に向かって噴出したのです。するとどろどろの洪水が大地を蒔きこみ、岩や丸太を押し流して **Nanabozho** の足元までやって来ました。一番大きな波の天辺の上にあの傷ついた悪魔の大將が流されていました。彼の目は自分の周りを睨みつけており、そして熱い息が沢山の子分達の熱い息と一緒に聞いて来きました。

怒りくるった水の前から逃げながら、**Nanabozho** はインディアンのこども達のことを考えていました。彼は、“山の上に逃げるんだ！ 悪魔の大將が以下って、この大地に洪水を起こしているんだ！ 逃げろ！ 逃げるんだ！” と叫びながら村を駆け抜けて行きました。

インディアンは子供たちを抱き上げ、そして、山の頂上に安全な場所を見つけたのです。**Nanabozho** はなおも西のほうの丘の麓に沿って逃げ続けました。そして、スペリオル湖のずっと北のほうにある高い山に登って行きました。彼はそこで、あの洪水、それはその時には谷を埋め尽くし、平野を多い、高い山さえその中にうずもれるほどでしたが、その洪水から逃れた沢山の人たち、動物達がいるのをみつけました。洪水は尚も水かさを増していました。そして、まもなくすべ

ての山という山が大洪水のしたに流されてしまったのです。ただ、一つだけ、**Nanabozho** のたどり着いた山を除いてなのです。

そこでかれは丸太を集め、それでいかだを作りましたそのうえに沢山の人、動物たちが彼と一緒に乗っていました。と、たちまちそのあと、その山の頂さえ、自分たちの視界から消えてしまったのです。そして、彼らは水の表面に漂い始めたのです。こうして、数日のあいだ彼らは漂っていました。それからかなりたち、洪水は引き始めました。まもなくいかだの上にいる人々は、山の頂から木々が顔を出しているのに気が着きました。すると、今度は、山ばかりではなく、丘が、野原が、そして、谷も顔を見せ始めました。

こうして、この大地から水が消えると、生残った人々は、あの悪魔の大將は死に、そして、その子分達はあの聖霊の湖の底に戻っていったのだと知りました。こうして彼らは今の世の中まで残り続けているのです。**Nanabozho** が恐ろしいために、彼らは決して二度と水面に上がって来ようとしませんのです。

大洪水の話は、聖書にもでてきますが、インディアン達の間にもこうした話があったこと、そして、その筋書きが良く似ていること、これには本当に驚きを感じます。一体、彼らの先祖はどこからきたのでしょうか。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

112 スカンクがコヨーテを騙した話

Native American Lore

ある日のことですが、それは、コヨーテがお腹をすかしてうろついている時にスカンクに出会った時の話です。 “いやー、兄さん。” コヨーテが愛想良く彼に挨拶をしました。 “君はとてもお腹が空いているように見えるんだけど、と言っても、僕もけどね。私にいい考えがあるんだけど、私と一緒に来て、何か食べ物を手に入れる策略を手伝う気はないかね?”

“お前さんの目標がなんであってても手伝うことにするよ。”

“プレーリードッグの村がああ丘の向こうにあるんだ。君はあそこに言って、横になって死んだ振りをするんだ。そこへ、私が後からやってきて、そして、プレーリードッグにこういうんだ、 ‘みんな来いよ、ここで死んでる僕たちの敵の体の上で踊りを踊ろうよ’ とね。”

スカンクは、彼らがこれまで死んだ振りや踊りをして、どうやって食べ物を手に入れていたか不思議に思いました。 “なんだって、こんなことをしなくちゃいけないんだ?” と彼が尋ねました。 “さあ、さあ、行って、” と、コヨーテは促し、 “息を一杯吸って、死んだ振りをするんだ。”

スカンクはプレーリードッグの村に行き、死んだ振りをしました。その直ぐ後にコヨーテがやってくると、何匹かのプレーリードッグが彼らの住処の外で遊んでいたのです。でも彼らは、スカンクのところから少し離れた所にいました。

“おい、見てご覧よ、”と、コヨーテが叫びました。“僕らの敵が此処で死んでいるよ。こっちに来て、祝いの踊りをしようと思うんだが。みんな出てきて、夜まで踊るんだ。”

頭の悪い、プレーリードッグたちは、彼の言うとおりにしました。“さあ、”と、コヨーテは言い、“みんな、立って輪になり、目を閉じて踊りを踊るんだ。もし、1人でも誰かが目を開けて見たりしたら、その彼には、なにかたたきがあるからな。”

プレーリードッグたちが目を閉じて踊り始めるや、直ぐに、コヨーテは、彼らのなかの一匹を殺してしまいました。“さあ、このとおり。”と彼は声を出し、“みんな目を開けてごらん。”と言いました。プレーリードッグたちは言われた通りにし、そこに一匹が倒れて死んでいるのを見て驚いてしまいました。“おっ。何ということだ。ご覧よ、この哀れな奴の格好を。彼は目を開けたのさ。それで死んだんだ。さあ、みんな、目を閉じて、そして、もう一度踊りを始めるんだ。見ちゃいけないよ。目を開けると死んでしまうからね。”と言いました。

彼らはもう一度踊りを始めると、コヨーテは、その踊りの輪の中から一匹ずつ引っ張ってきて、そして、それを順番に殺してしまいました。しかし、結局ついにプレーリードッグの仲間の一匹が何かおかしいと言うことに気が付き、目を開けてみたのです。“おっ、コヨーテが我々の仲間を殺しているんだ!”と彼が叫び、生残っているものたちはみんな一斉に駆け出し、なんとか無事に自分たちの巣穴に逃げ込みました。

スカンクは、コヨーテがいとも簡単に彼の策略を成功させているのを見て、笑いながら立ちあがりました。そして、彼は、薪を拾い集めるのを手伝い、彼らはコヨーテが殺したプレーリードッグを丸焼きにしだしたのです。

その言い掛いがあまりにもおいしそうだったので、コヨーテはその肉の一番いいところを何とか自分が食べてやろうと考えたのです。

“よし、競争をしようじゃないか”と彼が言いました。そして、“競争に勝ったものが、一番おいしそうなプレーリードッグの肉を食べられるということにしよう。”と。

“それは、駄目だよ。”と、スカンクが返事をしました。“だって、お前さんはとても素早いけど、私は、そんなに速く走れないよ。お前さんに勝てっこないじゃないか。”

“分った。じゃー、こうしよう。私は自分の足に岩を巻きつけることにしよう。”とコヨーテが言いました。

“うん、もしお前さんが大きな石を結ぶんなら、それなら競争してもいいさ。”

こうして、彼らは丘の麓を一周する競争をすることにしました。“私がこの石を足に巻きつけている間に、お前さんは、先に走っていったいいよ。お前さんに先をゆずるけど、直ぐに追いつくからさ。”

スカンクは走り出し、直ぐにその丘の陰になって見えなくなってしまう。そして、コヨーテが自分の足に石を縛り付けて、その後を追いかけてきた。最初のうちはユックリと、しかし、直ぐに彼は、その石を蹴飛ばし、とってしまうと、それまでのスピードの倍の速さで走り出したのです。ところが、スカンクは、競争しているその道にそって背の低い木が積みあがっているのを見つけ、その中に飛び込み、隠れたのです。

やがて、彼はコヨーテが自分をおい抜いて行くのを確認し、急いで火のところに戻りました。そして、あまりおいしそうではない、二匹の小さな骨ばかりのものを残し、それ以外の丸々と焼けたプレーリードッグを炭の中から取り出しました。そうしておいて、彼は、その尻尾を切り落とし、それらを灰のなかに突き刺しておいて、肉のほうは、藪のなかに持って行ってしまいました。

一方、コヨーテのほうは、スカンクが自分の前に居るに違いないと信じ込んで、まだ、丘の周りを走っていました。かなりたって、彼は、独り言を言いました。“スカンクの奴、一体どこに居るんだろう？ 彼がこんなに速い何てちっとも知らなかったぞ。”そして、すぐ彼も、クルリと向きを変えて、あの料理をした火のところに帰って行きました。と、そこで彼はあの灰から突きでているプレーリードッグの尻尾を見つけたのです。その一つを掴み、引っ張り出しました。そして、他のものも同じ様にしたのです。“おーっ。でも本当によく焼けてい

るな。”と彼は言い、また別のものを取り出しました。が、直ぐに何かおかしいと言うことに気が付いたのです。

棒を持ってきて、コヨーテは灰の中をかき混ぜました。だが、彼が取り出したのは、スカンクが持っていかなかったあの二匹の痩せた貧相なプレーリードッグだけでした。“こりあー。誰かがわし等の肉を盗んでいったに違いない。”と彼はいい、味も素っ気もない二匹の小さな肉を食べたのです。

この時までに、素敵な肉のご馳走を腹いっぱい食べていたスカンクはあの丘の上に上り、そこからコヨーテの様子を伺っていました。コヨーテが肉を盗んだ犯人を探し出そうと歩き始めると、スカンクは、彼の前に沢山のプレーリードッグの骨を投げ出したのです。

コヨーテがそれを見て、彼をにらみつけました。“お前、おいしいところを全部食べたのか!”と喚きました。“ワシに、その残りをよこすんだ。”

“嫌だね。”とスカンクが返事をしました。“お前さんは、そのために競争をしたんだろ。そして、私が勝ったんじゃないか。これは全部私が食べるんだ。”

コヨーテがおいしい肉を少しでもくれるようにと何とかお願いをしましたが、しかし、彼が必死で頼んでいる間に、スカンクは最後の一切れも食べてしまいました。つまり、スカンクのほうがコヨーテより騙すのが上手だったという訳です。

ネブラスカには野生のプレーリードッグを沢山見ることができます。とても愛嬌のあるしぐさをしますが、こんなふうにコヨーテたちの犠牲になっているというのが現実ですので、すこし可愛そうな気がしました。それにしてもスカンクの悪知恵もなかなかたいしたものですね。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

113 逃げ切れなくなったらうさぎの話

Native American Lore

Ableegunooch といううさぎがメープルシロップのご馳走を2人の友達と一緒に楽しんでいたのは、まだ、その辺りには雪がすこし残っていましたが、冬の終わりごろか、あるいは、もうすぐ春になるという頃のことでした。友達の2人とは、1人はカワウソの **Keoonik**、そして、もう1人は、**Miko** というリスでした。

彼らはとても幸せを感じながら、自分たちの手足についての最後の糖蜜をなめると、今度は近頃話題の話を交換したのです。

“昨日の晩のことだけど”と **Miko** が言い出しました。“月の光が私の住処に差し込んできて目が覚めたんだけどね。そしたら、そとで狼が何やら話しをしているのが聞こえたんだ。彼らの話しでは、彼らは誰かを殺すために、あのワイルドキャッツの **Lusiffee** に二房の貝殻玉を差し出したとのことだよ。”

“えっ、本当かい?”とうさぎが興味深く尋ねました。“だれだろうね?”

“彼らは誰の名前も言わなかったよ。”とリスが言いました。“だけど、ただの召使だけど、ものすごく畏が上手な **Glooscap** の友達、彼は森を通り抜ける道を知っているんだが、その彼のことを話していたんだ。”

“彼が誰だっていいさ。”と **Keoonik** が淋しそうに言いました。“**Lusiffee** と言うのはとてもずるがしこい追跡者だし、全く、血も涙もない奴だからね。”

“われわれの主人の友達は、我々のうちの誰かに違いないんだ。”と **Ableegunooch** がつぶやきました。

“非常に罾が上手な奴さ”と、カワウソが落ち着きなく一言言いました。“それは、私のことかも知れないな！”と。

“へーッ。”うさぎが鼻を鳴らして言いました。“お前さんは、私がこのあたりでは一番罾が上手な仲間のひとりだということを知っているんだろ。”そして、**Keonik** もそれを否定しませんでした。というも、彼は、これまで、うさぎの意地悪を沢山受けていたからでした。**Miko** がちょっとだけ身震いをしました。

“お前さん、彼らがこの森の通り抜ける道を知っているものについて話をしているとき私はもし彼らが私のことを話しているなら、私は、それはおかしいと思わずには居られないよ。だって罾だろ。私ができるのは、全体ではなく、数本の木を通り抜ける道を見つけ出すことぐらいしかできないんだから。”

“馬鹿なことを行っているんじゃないよ！”と **Ableegunooch** が鋭い口調で言いました。“リスくんは何だってできるんじゃないか。それに、うさぎくんはもっとうまくできるんだよ。そして、私は **Glooscap** の認めた森の案内人てわけ。そして、彼のとても素敵な友だちなのさ。”かれが誇らしげに付け加えました。

“要はだね。”と **Keonik** が、無意識のうちにうさぎに目をやりながら、“こうした要件に一番合っているものを見つけることなんだよ。——罾が非常に上手で、森のことを良く知っていて、そして、召使の身分でありながら、偉大なる酋長の友達でもあるもの。”

すると、その時、うさぎがまるでミツバチに刺されでもしたかのように飛び上がりました。

“私！ 彼の言うことを聞いているとそれは私のことではないか！”

Keonik は打ちひしがれたうさぎを励まそうとしました。

“僕たち、君のそばにすることにするよ。”、“いいだろ、**Miko**？”と彼は言いました。

“も、勿論だとも。”とリスが、心配そうに言いました。実は、彼は、彼ら3人が例え一緒にいたとしてもあの恐ろしい猫に叶うわけがないと思っていたからです。

“ありがとう、そう言ってくれて嬉しいよ。”と **Ableegunooch** が、彼らの義理堅いことにこころを打たれて言いました。

“でも、ひょっとしたら君たちの助けはいらないかも。私にいい考えがあるんだ。”

Miko がどんなことをかれが考えているのか尋ねました。

“強さと速さでは、これは **Lusifée** の方に部があるさ、だから、私は知能に頼る必要があるんだ。”と **Ableegunooch** が言い、いわくありげににっこりと笑いました。“うさぎの肌の毛が短く落ちるときに、彼は、別のものを借りなければならないんだ。だから、彼は、此处に私を探しに来ることは間違いないのさ。私は、どこかに行くよ！”というのと、うさぎは、彼の住みかからはずっと離れたところに届くように、空中高く跳ね上がりました。ですから、彼の住みかの近くには彼の足跡が何も残っていなかったということです。**Ableegunooch** は、こうして、同じ様な方法で、自分が見えなくなり視界から消えてしまうまで飛んで行きました。そして、風のようにどこかにいなくなってしまったのです。

Keoonik と **Miko** は近くの隠れ場に飛び込み、何が起こるのか見ようとじっと待っていました。そして、今、そうその通りあのワイルドキャットの **Lusifée** が、あの黄色の目をぎらぎらさせ、忍び寄るように彼の大きな足跡を雪の上に残して、地面に鼻をつけ、なにやらかきながら矢って来たのです。

そして、うさぎの住みかがもぬけの空だと分ると、我は、地団太踏んで怒鳴り散らしたのでした。しかしながら、その住みかを真ん中に持ってきて、彼はその周りをその輪がだんだん大きくなるように、そして、うさぎの逃げた手がかりを掴むまでぐるぐる回ったのです。かれは、うさぎが、飛跳ねるのをやめたその地点にたどり着くまで回り続けたのです。こうして、**Ableegunooch** を捕まえて、彼を殺すために

自分の尻尾に誓いを立て、足跡がはっきりしているところを素早く追いかけ始めたのでした。

それまでと同じ様に、**Lusifée** は足跡の当たらしさから、自分がうさぎに直ぐに追いつくと分っていました。しかし、彼は、日が暮れるまで獲物の影を捕らえることができませんでした。夜がやってきて、**Lusifée** は、見晴らしのきく沼地の上にポツンと建っている小屋にやって来ました。そして、の中に首を突っ込んだのです。すると、そこには、綺麗に梳かした白い毛を頭の両側にきちんと二つに分けた、いかにも礼儀正しく、そして、品のある年老いたキツネが座っていたのです。**Ableegunooch** をみたかどうか尋ねると、その歳寄りは首を横に振りましたが、彼は、その夜を **Lusifée** と一緒に過ごすよう中に招き入れたのです。

“お前さんは明日の朝もそうやって探し続けることができるだろうよ、” と励ますように言いました。そのとおり、**Lusifée** は、疲れ、そして、お腹が空いていたので、その招きを受け入れ、おいしいご馳走をよばれたあと、火のそばで横になり、そして、ぐっすりと寝こんでしまいました。

しかしながら、夜明け近くになると、彼は、なんだか身震いするほど寒くなり、そして、我慢できないほど居心地が悪くなってきたのです。そして、とうとう目を覚まし、まわりをみてびっくり仰天してしまいました。彼は、温かい小屋の中に居るどころか、雪が吹きすさぶ広い沼地の上に横になっていたのです。そして、**Lusifée** は、ぼんやりと残っているうさぎの足跡をみつけ、初めて、**Ableegunooch** が自分をだましたのだということに気がつきました。うさぎは、変装するのが非常にたくみで、キツネに化けていたのです。そして、**Lusifée** が寝ている間に、小屋ごと一緒にどこかに行ってしまったのです。

物凄い剣幕で再び追跡が始まり、ヤマネコは自分の尻尾にと同じ様に、歯によっても、自分が夕暮れまでに **Ableegunooch** は死んでいるだろうと誓ったのです。しかし、あたりが暗くなり始めても、彼はうさぎの姿を捉えることができませんでした。

彼が最初に来た村、そこはヤマアラシの部族の村でしたが、そこまで来て立ち止まると、最初にあったヤマアラシにこの道を通っていったうさぎを見たかどうか尋ねました。

“シーッ”とヤマアラシがいました。“あなたは、私たちが話しの語りべに耳を傾けているというのがわかりませんか？”それで、**Lusifee** は、部族のみんなが火の回りに集まってきて、白い頬髯を生やし、奇妙な形の耳をした1人の老ヤマアラシの話を聞いているということが分りました。**Wabanaki** の土地では、その語りべはとても尊敬されていて、彼の話をさえぎることはもっとも無作法なことだと思われていました。だから、ヤマネコは、仕方なくその話が終わるまでじっとして待っていたのです。そうして、もう一度その若いヤマアラシの方に向き直りました。

“でも、お前さんはうさぎを見たんだろ？”

“何百匹という彼らが、”と、別のものが我慢できなくて答えました。“ここからそう遠くないヒマラヤスギの沼地の辺りを走り回っているよ。あんたは自分の好きなだけ彼らを捕まえることができるさ。”

“そいつらは、私が追いかけている奴ではないんだ。”とヤマネコがけちをつけました。“私が狙っているのは、**Ableegunooch**、**Glooscap** の森の案内人を捕まえたんだ。”

その若いヤマアラシが、自分は人気のない森で手助けをするうさぎ以外のことなら知っているよ。だけど、あの話をしている語りべは、歳もとっているし、賢そうなので彼になにかヒントを教えることができるだろうと言いました。

そこで、**Lusifee** はその語りべの所に行き、彼がこの近くを通ったうさぎを見なかったか尋ねました。

“ウサギだって？”その語りべは、いかにも何か考えているように刺を鳴らしました。そこで、ヤマネコは慎ましく彼の後ろに回りました。“知らないね。うさぎなんて見なかったさ。しかし、わが友よ、お前さんは疲れているようだね。どうだね、今晚、ワシのところに来て、休んだらどうかね。もし、お前さんさえよかったら。私の小屋はこの村の外れにあるんだがね。”

そんな誘いに、温かいベッドのなかで寝られるだろうとヤマネコは大喜びで出かけました。随分と彼は寝たあと、目が覚めると、風が前の晩の十倍くらい強く吹き、回りはヒマラヤスギが身震いするほど恐ろしく揺れ動く湿地帯で、彼の回りには、うさぎの足跡だらけだったのです。

Lusifeef は、以前にもましてかんかんに起こり、今度こそうさぎに仕返しをしてやると、歯や尻尾にした時と同じ様に爪に誓いをたて、再びうさぎの足跡をつけて行きました。彼は一日中はしりまわり、そして、夜になると熊たちの住んでいる村にやって来ました。そのときには彼はもうへとへとでしたから、あえぎあえぎ、

“ウ、ウ、うさぎを見なかった、かい?” というのがやっとでした。

熊たちは誰もが首を横に振りました。しかし、彼を自分たちと一緒に食事をするように誘ったのでした。そして、ご馳走が食べ終わると、彼らは礼儀正しく歌を歌うように頼みました。ヤマネコは、もう自分の声にとっても自信などなかったのですが、直ぐに機嫌を直して、声を張り上げうさぎをののしる歌を歌いました。熊たちは大喝采をし、彼を輪になって踊るそのなかに招き入れたのですが、でも、ヤマネコはあまりにもへとへとに疲れているのでどうか勘弁してほしいと頼み、横に座って、その踊りを眺めていたのです。

ところで、熊の中に一匹他の者達より体の小さなものが居ました。そして、彼の耳は何か普通の熊の耳よりちょっと長かったのですが。しかも、彼はとても踊りが上手で、他の誰よりも空高く飛跳ねることができたのです。そのかれが、**Lusifeef** の近くを通り過ぎたときに、それは偶然のようにも思えたのですが、彼は、そのヤマネコを強烈に跳ね上げたのです。彼の頭を傷つけるほど、そして、彼の意識がなくなるほど殴ったのです。

ヤマネコは意識が戻ると、なんと、自分が小屋の外にいたことが分かりました。そして、熊の部族の祈祷師が彼の上に覆いかぶさっていました。ヤマネコは、自分が頭の両側に長い白い羽をつけられていることに気がついたのです。今では、**Lusifeef** は、これまでよりずっと疑い深くなっており、彼は細い目でその祈祷師をじっと見つめていたのです。

“私は、一匹でもうさぎがここら辺りにいたかどうか尋ねていたんだ。”と **Lusifee** が言いました。“そして、お前さんがいかにもそれらしきものを見えるんだが。どうしてお前さんの唇はそんな風に裂けているのかね？”

“なんだ、そんなことどうだってことないよ。”と祈祷師の男、彼は、勿論 **Ableegunooch** ではなかったのですが。“昔、私は貝殻の飾りだまを砕いていたんだが、その時、私が砕くのに使っていた下の石が二つに割れ、その一つが飛んで私の唇にあたり、それで、こんな風に裂けてしまったのさ。”

“でも、じゃ、お前さんの足のかかとは、どうしてそんなに黄色なんだね。それじゃ、まるでうさぎの足のようだが？”

“そんなのなんでもないことだよ”と祈祷師が応えました。“私は、

前にタバコを作っていたのさ。そして、その仕事をするには両手が必要だったのさ。だからそんなときには、そのタバコを私の足でもって押さえ、——そう、そんなことをしているうちにタバコで足が黄色くなってしまったのさ。”

ここまで説明されると、もう **Lusifee** は、何も疑うことができませんでした。そして、その祈祷師に彼の受けた傷に薬を塗って治してくれるものと信じ込み、安心して深い眠りについたのです。しかし、なんということか、不幸なことに彼の頭は膨れ上がり、痛みがズキズキして、ヤマネコはとても悲慘な思いで目をさましたのです。彼の傷はいまや薬どころか、ドクニンジン針の針を埋め込まれたようでした。

もう、**Lusifee** はかんかんになり、自分の尻尾に誓い、爪に誓い、そして歯に誓ったように、今度は自分の体と魂に、何がなんでも今度あった奴は、うさぎだろうが、他の誰だろうと殺してやると誓いました！。

彼は、まだできたばかりの **Ableegunooch** の足跡を見つけると大変興奮して、痛みも、そして、寒さも忘れて、また再び追跡をはじめました。勿論、うさぎの方だって追いかけて随分疲れていましたから、そう遠くまで逃げることはできませんでした。そうです、畏が上手なものが先に格好でした！ 事実、**Ableegunooch** は川幅の広い川辺に来たときに、そこにどうしても止まらなければならなかったのです。ヤ

マネコは、うさぎがあまり泳ぎが上手でないことを知っていたので、してやったり今度こそ捕まえてやるとにっこりしたのです。“さあ、もう逃げられないぞ”と、彼は叫びました。おお、可愛そうな **Ableegunooch**。彼は、もうこれ以上逃げ出すことができませんでした。

はるか彼方の **Blomindon** の霧の掛かった山頂から、**Glooscap** がいまおこっていることのすべてを見ていました。そして、うさぎが自分のでき得るすべてのことをしてしまっていると分っていました。この偉大なる酋長は、彼のパイプでタバコを思い切りすい始め、その煙を青い空に向って黒い輪を書くようにぱっと吹き出しました。と、なんと言うことでしょう。その煙は直ぐに鳥達に変わったのです。

森の下の方では、**Ableegunooch** が入り江に追い詰められ、**Lusifée** は、もう飛び掛らんばかりになっていました——と、その時突然、空から戦いの時に発する鳴き声を出しながら、大ワシの大集団が襲い掛かってきたのです。**Lusifée** が大声を上げ、彼らと戦おうと向きを変えました。しかし、彼らは、彼の目をめがけてつつき、羽で殴り付け、数の力で彼を圧倒してしまいました。そして、とうとう、恐怖におののきながら、ヤマネコは尻尾を丸め、そして、森に逃げ込んでしまいました。たぶん、彼が死んでいないとしたら、今でも逃げ回っていることにちがいません！。

恐ろしくて身震いしながら、**Ableegunooch** はとうとう休みを取るためにしゃがみ込んでしまいました。いまや、彼は最初のころに自分が持っていたうぬぼれは半分もありませんでした。もし、ワシの助けがなければ自分はもう死んでいたに違いないと分ったからです。遠くのほうでフルートの音が聞こえて来ました。それで、かれは自分が間一髪のところであのワシを送ってくれた人が誰であるかを理解しました。

“ありがとうございました。ご主人様、” 彼が囁きました。**Glooscap** は、はるか彼方の **Blomindon** の上で、うなづきました。——そして、戻ってくる鳥達に向って、勝利の歌を送ったのです。

さあ、**kespeadooksit**——このお話しはこれで終り。

うさぎがいろいろと化けて、ヤマネコをだますのはなかなか楽しいはなしですが、とうとう最後にはこれ以上だますことができなくなり、絶対絶命に成りましたね。その時、助け

てくれたのが、創造の神なのです。私たちがどんなことをしているのか、その創造の神はすべてを見ているのです。・・・・これは、とても大事な教えのように思いますが・・・

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

114 キタオッポサムの尻尾がむき出しな、その訳

Cherokee

Native American Lore

この世の中のすべての生き物、人間、動物、植物、そして、木々も、最初のころはみんな同じ言葉を話し、同じような生活をしていました。やがて人間のような動物はそれぞれの部族の集団になって行きました。彼らは、小屋に住んでいる何人かの酋長がいて、彼らが会議を開き、そして儀式を取り仕切っていたのです。

沢山の動物達は、私達が今知っているようなものとは違った特徴を持っていました。たとえば、うさぎの場合には、彼は、獰猛で、威勢がよく、大胆だったし、また、とてもいたずら上手でした。鹿が、彼の鋭い狼のような牙を失ったのは、うさぎの罠のためだと考えられていたし、また、ノリスが頭の上にとっても素敵な毛の房を持っているのも、そして、キタオッポサムがもじゃもじゃな尻尾をしているのもやはりウサギの仕業のためといわれていました。

キタオッポサムは、今日でも見られるようなふさふさの黒い毛皮で覆われた彼の尻尾をととても自慢にしていました。ですから、彼はとて

も長い時間をかけて、その尻尾を綺麗にし、ブラシをかけていました。そして、その美しさと素晴らしさを讃える歌さえ作っていたのです。彼が村を通り抜けるときなど、彼は、丁度旗が微風になびくように、自分の尻尾を真っ直ぐ立てて歩いていました。また、別の時には、彼は、これはまた汽車が連なるように自分のあとに引きずっていたのでした。その尻尾は、キタオッポサムが横になって寝るときには、ただ、美しいと言うだけでなく、それと同じ様にとっても役にたったのです。彼は、それを丁度柔らかいベッドの変わりになるように自分の下に抱いていたのです。そして、寒い日などは彼は今度は暖をとるためにそれを被っていたのです。

うさぎは、このキタオッポサムの尻尾のことをとても羨ましく思っていました。彼もまた、買っては長く、毛のふさふさとした尻尾を持っていたのですが、しかし、熊と戦いをしている間に、彼はその大部分を失ってしまい、今では、ほんの僅かのちょっとした房があるだけの尻尾になってしまったのです。ですから、キタオッポサムが他の動物達の前で、気どった振りをし、彼の尻尾をこれ見よがしにくるくる回している姿は、うさぎの気持ちをむかむかさせ、ついに、彼は、今度チャンスがあったら、彼に罌を仕掛けてやろうと密かに考えていたのです。

その当時、動物達が一緒に仲良く暮しているときには、みんなはそれぞれ自分たちの決められた場所で、決められた仕事をしていたのでした。ですから、かえるは会議の議長でしたし、うさぎは、彼はとてもすばしこかったので、手紙を届けたり、みんなに情報を伝達する係についていたのです。

時代から時代に彼らのしきたりで、動物達は、重要な事柄について議論をするための会議を開くことになり、うさぎも、いつものように、人々を招集し、招待状を配達する役目を言い付けました。と同時に、この会合は、おいしいご馳走を食べ、踊りを踊るときでもあり、うさぎは、キタオッポサムを破滅に追い込むときだと考えていました。

うさぎが会合の知らせを持ってくると、キタオッポサムはいつものように彼の自慢の尻尾を磨きながら、小屋のドアのそばに座っていました。

“キタオッポサムのお兄さん、私は明日開かれる大事な会議の知らせにきたのですが・・・。”と、うさぎがいい。“どうか来て、踊りに加わってくださいよ。”と頼みました。

“分ったよ。でも私に特別な席がないならいかないよ。”とうぬぼれやのキタオッポサムが、自分の尻尾の先のほうのまだとかされていない毛を丁寧にきちんとしながら返事をしました。“つまりだね。”と彼は、うさぎを意地悪そうにニヤニヤ見ながら、“私の尻尾がこんなに長く見事であるから、私は誰をも見渡すことができ、みんなが崇めるような席に座って当然だろ。”

うさぎは、憤慨して殆ど取り乱していたが、しかし、彼は、この嘲りには関心を示さないような振りをし、そして、“でも、やっぱり、キタオッポサムのお兄さん!、私は、自分ではその会合の開かれる小屋の一番いいところにあなたがすわるとおもっているんだけど、踊りのためにあなたの尻尾を特別に着飾るために誰かを送ることにしますよ。”と言いました。

この申し出にキタオッポサムは満足し、うさぎは彼のところにいつもにまして彼の尻尾を讃える言葉を残して行きました。

次に、うさぎは、インディアン達が、良く切れる髪のカッターのようだという評判から、床屋とよんでいるコオロギのところに立ち寄りしました。コオロギは、うさぎがキタオッポサムとの会話を繰り返しましたから、とても驚きながら聞きました。他の動物達、みんなと同様、彼は、キタオッポサムのうぬぼれや高慢な話をとてもいやな気持ちで聞いていました。

彼は抵抗を始めました。がしかし、うさぎは足を差し上げて、そして、“ちょっとまってください。私に良い案があります。けど、それにはあなたの助けがひつようなのです。いいですか・・・”と言い、声を小さくしてコオロギにどんなことをして欲しいか説明をしました。

次の日の朝はやく、コオロギはキタオッポサムの家の扉のところに外向き、そして、自分はいさぎの言いつけで、その日の晩に開かれる会議のためにあなたの評判の尻尾を整えにやった来たのですが・・・と言いました。と、キタオッポサムは床の上に言い気分になって寛ぎ、

そして、彼の尻尾を一杯に伸ばしました。すると、コオロギがそれに丁寧に櫛を入れ始めました。

“私は、尻尾を櫛で梳かすときにこの赤い紐をまきつけるんですが。”と彼が説明をしました。“そうしてやると、 今晚の踊りの間でもそれが滑らかにきちんとなっているんですよ。”

キタオッポサムは、コオロギのやり方がとても心地よかったものですから、彼の尻尾に完全に巻き付いた赤い紐の最後の結び目をコオロギがくくりつけてときにやっと目を覚ますほど、深い眠りについていたのでした。

“わたしは、最後の最後まで、それをしっかりと結びつけておくことにしよう。私がどうやってこんなにも綺麗なのか、それを披露したら、みんなはどれほど驚くのだろうかねえ。” とキタオッポサムは上機嫌になっていました。

その日の晩になり、彼の尻尾には、まだしっかりと赤い紐が蒔きついていたままでした。そして、キタオッポサムは揚々とその会議の開かれる小屋に入ってしまったのです。そして、不自然にこびへつらっているうさぎに案内されて彼の特別席に案内されたのでした。

それからまもなくして踊りの時間がやって来ました。太鼓やガラガラなる楽器の音がなり始まりました。キタオッポサムは立ち上がり、彼の尻尾に蒔きついていた紐を緩め、そして、その踊りの床の中央に誇らしげに歩み出して行きました。

“みんな、私の素晴らしい尻尾をよく見るんだ。”とその床を輪に書いてまわり、歌を唄ったのです。“それが大地をどんな風に掃き清めるか良く見るんだ!”

と、観衆の中から大きなどよめきがおこりました。そして、沢山の動物達が喝采を始めました。“みんな、なんと私を讃えていることか!”と、キタオッポサムは思いこみ、そして、彼は踊り続け、ますます大きな声で歌を唄ったのです。“この火の光のなかで、私の尻尾がどんなに輝いているのか良くみてごらん下さい。”

そして、再び、誰もが歓声をもてはやしました。するとキタオッポサムは、その場で起こっていることがちょっと様子が違うということで、愚にもない疑いを持ち始めたのです。なにか、彼らの言っている言葉の中にあざ笑っているようなきっかけがあるかもしれない。が、彼はそんな風なばかげた考えはすてて、尚も踊りを踊り続けたのでした。

“私の尻尾は、ワシより強いし、ワタリガラスの輝きなんか比べ物にならんさ！”

とこのとき、動物達が大きな声で叫び声を上げましたので、キタオッポサムは踊りの足を止め、そして、みんなを見つめました。

となんと驚き、悔しいことにみんなは笑いこけているのでした。中には自分の隣のものの肩にかすかにもたれかかったり、あるいは、他のものなど、あまりにも愉快になって大地を転げ回っているものさえありました。何人かが彼の尻尾を指差しているではありませんか。

途方にくれて、キタオッポサムが下をみると、なんと彼の尻尾、美しく、ふさふさで、光輝いていた尻尾が恐ろしいことに、今ではトカゲのようにがさがさな、うろこ状になっていたのです。もう、あの前のようなしなやかさはどこにもありませんでした。尻尾に櫛を入れて梳かしている間に、あのずる賢いコオロギかぎ一本一本ずたずたにちょん切ってしまったのでした。

キタオッポサムは、恥ずかしさと、気持ちが混乱してしまい、一声も出せなくなってしまうました。その代わりキタオッポサム今でも、まるで自分があの驚いた時にしたように、バツが悪くてしかめっ面をしながら、自分の背中の方に尻尾を巻き上げているのです。

行過ぎた自慢とうぬぼれはやがてはみんなの笑いものになるという、という、とても教育的な話でした。こんな話をきいてすこし反省する気持ちに成りましたが、・・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

115 二匹の小鹿とうさぎの話

Native American Lore

二匹の若い小鹿が丘に座って自分たちのことについて話をしていました。彼らは母親のいない2人の少年だったのです。“僕たち、良く鹿をお母さんと思っていたよね。”と彼らのはなしていました。そこにうさぎがやってきて、“ああ、お腹が空いたよ。何も食べずに旅をしてるんだ。ずっと遠くからやって来たのさ。”と言いました。

小鹿が、“此処には何も食べるものなどもっていないよ;僕たちの食料は此処にはないんだ。”“じゃ、どこにあるのさ?”とうさぎが聞きました。“だから、ここにはないって言っているでしょ、”と片方の小鹿が言いました。

そこで、うさぎは、“じゃ、そこがどこなのか教えてくれないか、とにかく私はお腹がすいて、何かを食べたいんだ。”彼は、こんな風に長い時間をかけて小鹿たちの食料のことについてはなしを続けました。しかし、彼らは自分たちがそれをどうやって手に入れたのか彼には隠したのでした。

そこでうさぎは、“お前さんたち、2人とも食料を手に入れるのにあまり熱心じゃないとおもうよ。どっちの道に行けばよいか私に教えれば、私がそこに自分で行くよ;そして、僕たちみんなが食べるのにじゅうぶんだけの食物を持ってきてあげるから。”

“いや、いいんだ。僕たちは此処では食べないことにしているんだ。”と小鹿たちが言いました。するとうさぎは、“君たち、私のことを知らないんだね。私はお前さんたちのお爺さんなんだよ。私が分からないのかね; それでお前さんたちは自分たちの食べ物のありかを教えようとしなないんだな。”一匹の小鹿が、もう一方の小鹿に肘で合図を送り、こうつぶやいたのです。“私は、この人、僕たちのお爺さんだと思うんだ。; だから、私は僕たちがどこで食べ物を手にするか教えようと思うんだが・・・。”

ところが、もう一方の小鹿は暫くの間何も言いませんでした。が、やがて、“私たちが食べているものは、この大地の上にはないんだよ；僕たちの食べ物はずっと高いところにあるんだ；そして、僕たちは、ある時間が来たときだけ、そこで食事をするんだ。僕たちが食べ物を欲しいというと、いつも誰かが空からやってきて；それは、雲のように白いものなんだけどね。その雲の端の所には、人間のようなものが居るんだ；目と口とが付いていて、僕たちをじっと見つめているのさ。それは、あるときだけしかこないのさ。もし、その時間よりも早くお願いしたような時には、だれか他のものが私たちの食べ物を求めていると思うんだよ。だけど、もしわたしたちのためにその時間が来たときに頼むとするなら、そのときにはあなたは見えないうところに隠れていなきゃならないよ。” こう言って、彼らはうさぎを隠したのです。

そして、一匹は東に、残りの一匹は西に；彼らはそれぞれの方角に駆け出して行きました。彼らが出会うと、若い動物達が遊ぶときのように声を出して叫びました。辺りをぐるぐる回り、そしてまた出会うと叫び、だんだん、あるテントの方に近づいていったのです。すると、空から何やら白いものが降りてきました。うさぎにもそれが分かりました。それは、顔のようなものがその上に見える雲のようでした；そして、彼らの食料の上に座っている人間のように見えたのです。

少年達はあまり切れそうでないナイフを取り出し、その食料が近づくと、彼らはそれから小さな塊を切り出したのです。この日、かれらはいつもよりちょっとだけ沢山、切り出しました。そうです。自分たちのお爺さんの分もたっぷりとしたのです。それがすむと、雲はまるで光の速さで空に上がって行ってしまいました。

小鹿の少年たちは、切り取った食料を持ってくるとうさぎに食べに出てくるようによびました。その食料は素晴らしくおいしいものでしたから、うさぎはもっと欲しくなり、少年達になんとかもう一度あの食料が来るように頼み込みました。小鹿たちが、“でも、それは、決められた時間だけだよ。” というと、うさぎは、“じゃ、私はお前さんたちと一緒に暮らすことにしよう。とにかくお前さんたちの食べ物はすばらしいんだから。” かれは、近くの藪の中に自分の隠れ家を作り、小鹿たちの様子を伺うことにしました。

食べ物が見えなくなった。その上に載っている人が、丁度、アンテロープが警戒するように辺りを見回していました。すると、うさぎは自分の矢筒から弓と矢を取り出しました。そして、まさに、少年達が食料を切り取るのに十分なほど近くまで来たとき、うさぎは、その雲の上にいる人間のような標的に向けて弓矢を放ったのです。その白いものがこんもりとした中に倒れたのです。

“ああ、私はこんなことがおこるだろうと思っていたよ。”と兄さん鹿が弟の鹿に、まるで彼にせいにするように言いました。すると、うさぎが彼らに言ったのです。“さあ、私の孫達よ、もう私はここから消えることにするよ。お前さんたちは、食べるものは持っているんだ。そして、それは、いつもまでもなくなることはないだろう。でも、それがなくなったら、お前達はあの山に行くが良かろう。そうして、草を食べ、鹿になるんだ。”

この話は、孤児の鹿たちに、食料は自分たちで見つけて生きていくんだということをうさぎが教えてあげるといふ話のように読みましたが、・・・

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

116 跳ね回るねずみの話

by Hyemeyohsts Storm

Native American Lore



昔、昔、あるところに一匹のねずみが居ました。

彼は、ヒゲを草になすりつけ、なにかを探してあちこち動き回っているせっかちねずみなのでした。彼もまた他のねずみたちに負けず劣らず、ねずみ達の性格でとてもせっかちだったのです。しかし、彼は、一度だけ、とても不思議な響きを聞くようになったのです。彼は、自分の頭を上げ、そして、何かを探すように目を細め、そして、ヒゲを揺れ動かしのです。彼にはなにが起こっているのか分らなかったのです。ある日のこと、彼は友達のねずみのところに忙しく行き、彼に尋ねました。“私の友よ、何か唸りのようなものを聴いたかい？”

“否、なんにも”と、彼も土を忙しくかきまわっている鼻を上げようともせずに応えました。“何にも聞こえなかったよ。とにかく、いま、私は忙しいんだ。話しがあるなら後にしてくれよ。”

彼は、今度は別のねずみに同じことを尋ねましたが、そのねずみは、かれを不思議そうに見て、“あんた、頭がどうかしてるんじゃない？　どんな音がしたというんだい？”その彼が今度尋ねたのは、倒れている銀杏の木にあいた穴の中に向かって入っていったのでした。

その小さなねずみは、彼のひげをすくめて、そして、また、忙しく動きまわっていました。すべてのことを必死に忘れようとしたのでした。しかし、彼には、また、あの唸るような声が聞こえたのです。それは、本当にかすかな響きだったのです。が、なんとそれは直ぐ近くから聞こえてきたのです！そして、ある日、彼は、その響きをちょっとだけ追跡しようと覚悟したのです。他のせっかちねずみたちと別れ、彼が忙しく歩いていくと、やっぱりあの唸る声が聞こえてきました。なにかきっと居るに違いない！今度は突然その声がはっきりと聞こえてきたのです。そして、どこの誰かは分らないけれど、こんにちとはといったのです。

“やあ、小さな友達よ。”という声がしました。そして、ねずみのほうはというとびっくりして飛跳ねてしまうほどでした。彼は、背中と尻尾を丸め、まさに逃げ出そうという一瞬でした。

“やあ、今日は。”とまた声がしました。“私だよ、友達のアライグマだよ”今度は、はっきりと確認することができました。“一体、君

はここで何をしているんだい、ちっちゃな友よ？”とアライグマが尋ねました。そう言われてねずみのほうは、恥ずかしくなり顔を赤くし、自分の鼻を地面すれすれに近づけました。“私はこの耳で確かに、なにか唸る声を聞いたんだよ。だからわたしは、それが何だか探っているのさ”と彼はおどおどしながら応えました。

すると、アライグマはねずみの近くに座り、“何、唸り声を耳にしたって？”と言いました。

“君が聞いたというのはね、小さな友達よ、実は、川なんだよ。”

“川だって？”と、ねずみが不思議そうにたずねました。“川って一体何なの？”

“私といっしょに来てご覧、川がどんなものか教えてあげるから、”とアライグマが言いました。

小さなねずみはとても恐かったのですが、しかし、一度はそれを見て、あの唸りを上げているものについて調べてみることにしました。“私は、自分の仕事にもどってくることができるはずだ。”、“このことがすっかり片付き、そして、ひょっとしたらこのことが、私が忙しく働いて、ものを集めていることになにかの手助けになるかもしれない。そして、わたしの友達、みんなに、あれはどうだったってことなかったよ、と教えてやることにしよう。そのときにはアライグマにも一緒に来るように頼んで、そして、証明してやるんだ”と、そんな風に考えたのです。

“分ったよ。アライグマくん。よろしくね。”とねずみがいいました。“私を川に案内してくれ。君と一緒に行くから。”

小さなねずみがアライグマと一緒に歩いて歩き始めました。彼の小さな心臓は、胸の奥で、ドキドキしていました。アライグマが、これまで考えてもいなかった不思議な道のほうにかれを引っ張ってゆきました。そして、小ねずみはこの道の通りすがりにある沢山のものの匂いをかぎながらいったのです。途中、彼は何度も帰りたいという気持ちと戦いながら、やがて彼らはついに川のところまで到着したのでした。それは、とても大きく、物凄いおとを立て、あるところでは隙とおってとても深くなっていたし、また、別のところでは、真っ黒にい

ろになっていました。湖ねずみは、それがあまりにも大きすぎたので、近くまで行って見ることはできませんでした。うなりをあげているようだし、時には歌を唄っているようだし、また、あるときには泣いているようにも、そして、音の響きによっては雷のようにも聞こえました。小ねずみは、その川面で繰り広げられる世界が途轍もなく巨大であり、また、ほんの一部に過ぎないことでもあることを知ったのです。

“物凄い迫力だね！”とその世界の凄さにもぐもぐしながら小ネズミがいました。

“そうさ。物凄いんだ。”とアライグマが返事をしました。“でも、こっちにおいで。お前さんがある友達に紹介させてくれ。”

とてもすっきりとした浅瀬に睡蓮の花が、見事に緑色に輝いていました。その中に座っていたのは、睡蓮と同じような緑色をした蛙でした。そして、その蛙の白い腹がくっきりと突き出ていました。

“やあ、こんにちは、小さな友よ。”と蛙が言いました。

“ようこそ、この川に来てくれましたね。”

と、アライグマが、“さあ、私は、君をここに残していかななくてはいけないんだ。”、“でも、心配いらないよ。私の小さな友達よ。蛙くんが君の面倒をみってくれるからね。”と話の途中で割り込みました。そして、アライグマは川の土手で自分が食べる食料を捜しながら行ってしまいました。

残された小さなねずみは水のそばに近づいて行き、そして、なかを覗きました。そして、彼が見たものは川に映った恐さでおびえて居るねずみの顔でした。

“君は一体だれ？”とその写った陰に小ねずみが聞きました。“君はその大きな川の底の深いところにいて怖くないの？”

“ちっとも。”と蛙が言いました。“私は怖くなんかないよ。私は、生まれたときから、こうして、川の上でも、また、場合によっては川の中でも生きていくようにプレゼントをもらっているのさ。冬の奴がやってきて、この魔法が凍ってしまうと、私は見えなくなって

しまうんだ。しかし、雷鳥が空を舞っている間は、私はここにいるんだ。そして、自然が緑になると、私を訪ねてある人が此処に来るんだ。なあ、友達よ、私はこの水の番人なのさ。”

“えっ—っ。何だって。”と小ねずみは溜まらず震えながら言葉を発しました。

“お前さんは、なにか魔法の力を持ちたいと思わないかい？”と蛙が聞きました。

“魔法のちからだって？ この僕が？”と小ねずみが言い返しました。
“そうさ、魔法だよ、魔法の力だよ。もし、それが可能ならね。”

“じゃー。お前さん、できるだけ小さくかがむんだ。そして、それから一揆に思いっきり飛跳ねるのさ！それがお前さんの魔法の力になるんだ！”と、蛙が言いました。

そこで、小ねずみは言われたとおりにしました。彼は、小さく小さくなり、そして、飛跳ねたのです。そんなことをしていると、やがて、あの神聖な山が彼の目に写ったのです。
小ねずみは、自分の目を信ずることができませんでした。しかし、確かに、そこに山があるのです！彼は驚き、びっくり仰天してしまいました。そして、川のなかに飛び込んだのです。

小ねずみはとても恐くなり、そして、土手によじ登っていきました。彼はずぶぬれになり、そして、もう気を失わんばかりでした。

“君は私を畏にかけたんでしょ。”と小ねずみが蛙のほうをみて悲鳴に似た声で言いました。

“ちょっと、待てよ。”と蛙がいい、そして、“君はちっとも傷ついてなんかいないよ。自分の恐怖心と怒りで自分を見失うなよ。一体なにを見たって言うんだい？”聞き返しました。

“ぼッ、僕は、”とねずみが口ごもり、“神様のいる山を見たんだ！”

“そして、新しい名前をもらったんだろ！”“それは、飛跳ねるねずみというんだよ。”と蛙が言いました。

“そうだったのか。ありがとう、” ととびはねねずみがいい、今度はここをこめてありがとうと言ったのです。

“これから、僕は仲間のところに言って、いま、自分の身の回りで怒ったことについて話をしてあげたいと思うんだ。”

“オーッ。それはいい。行きたまえ。” と蛙が言いました。“さあ、仲間のところに戻りたまえ。直ぐに彼らが見つかるだろう。いいかい、いつも、この魔法の川の流れの音を自分の頭の後ろの方から聞こえるようにするんだ。その音と反対のほうに行けば、直ぐに仲間のところに行き着くよ。”

こうして、とびはねねずみは仲間の居るところに戻ってゆきました。しかし、彼はそこでとても気を落としてしまったのです。というのは、だれも彼の話を聞こうとしなかったからです。そればかりか、彼がずぶぬれになっていたし、それが、雨も全然降ってもしないのに、なぜそうなったのか彼がうまく説明できなかったものだから、仲間のねずみたちは、逆に彼のことが恐ろしくなったのです。彼らは、彼が濡れているのは、何か他の獣がかれを食べようとして、その口からつばを吐きかけられたのではと信じ込んでいたのです。そして、誰もが、もし彼がかれを食べようとした動物のえさではないとしても、彼は自分たちの毒になると思うようになりました。

とびはねねずみはこんなふうに分の仲間達と暮すようになったのですが、しかし、彼は、自分が見たあの神様の居る山の面影を忘れることができませんでした。

そして、その記憶が飛跳ねねずみの気持ちと心のなかでどんどん膨らんでゆき、ある日のこと、彼はねずみ達のいる場所のはずれに行き、大平原の遠くを眺めていました。すると、はるか彼方にワシの姿がありました。その辺りの空は、沢山のワシの姿が点々と広がっていたのです。でも、彼は、あの神様がいるという山に行く決心をしました。自分のなかにある勇気を振り絞って、大平原の中に思いっきり走り出していったのです。彼の小さな心臓は、興奮と恐怖でドキドキしていたのです。

走りました。彼は、走りに走って、やがて、サルビアの木立のところまで来ました。そこに一人の老ねずみを見て、一息つこうと休憩を取ることにしたのです。老ねずみの住んでいたサルビアの一面は、ネズミたちのための安息の地だったのです。そこには、沢山の種といろいろなものが所狭しとあったのです。

“やあ、こんにちは。良く来たね。”と、老ねずみが言いました。

これには飛び跳ねねずみはびっくりしてしまいました。こんな場所も、こんなねずみもこれまでであったことがなかったからです。“あなたは、本当に偉大なねずみです。”と、飛び跳ねねずみが、最大の敬意を持って挨拶をしました。“ここは、じつに素晴らしいところです。そして、ワシたちも此処には目が届かないでしょう。”と彼が続けました。

“そうさ。その通りさ。”と老ねずみがいい、そして、“ここからなら、この大平原に居る生き物は全部見渡すことができるのさ：バッファローだろうが、アンテロープだろうが、うさぎだって、コヨーテだって見えるのさ。ここからは彼らをみることはばかりでなく、彼らの名前だって知ることができるのさ。”

“信じられませんよ。”と飛び跳ねねずみがいい、“じゃあ、あなたは川や、神様の居る山も見ることができるんですか？”

“うーむ。それはそうだと、否ともだね。”と、老ねずみが自信ありげに言いました。“私は、偉大なる川のことも知っているが、でも、その神様がいるという山のことは、これは神話だと思うんだ。そんなものを見たなんていう思い込みはもう忘れて、ここで私と一緒にいなさい。ここなら、自分の欲しいものはなんでもあるし、生活するにはとてもいいところなんだから。”と言ったのです。

“どうして、この人はそんなことを言うことができるのだろう？”と飛び跳ねねずみが考えました。“あの神様のいる山の魔法は、忘れられるほどなんでもないことだったんだ。”

“ご老人、私に沢山の食べ物をご馳走してくれて、とても感謝しています。そして、偉大なるこの家に招待してくれたことも、ありがとうございました。”と飛び跳ねねずみを言いました。“しかし、私は、どうしてもあの神様がいるという山を探さなくちゃならないんです。”

“ここをでていくなんて、お前さんどうかしているよ。大体、大平原は危険だよ。ほら、あそこをみてご覧！”と老ねずみが、さっきよりももっと確信をこめて言いました。あの点々を良く見るんだ！あれは全部ワシだよ。そして、みんなお前さんを捕まえようとしているのさ！

そんなわけで飛び跳ねねずみにとっては、なかなか去り難かったのですが、しかし、彼は、やっぱり強い決心をして、再び一生懸命走り出したのです。

大地は、とても荒れていましたが、彼は、自分の尻尾を丸めてあげ、力を振り絞って走りました。そうやって彼が走っているとき、自分の背中になにか影ができていることに気が付いたのです。そうです。この陰こそお分かりですね！そこで彼は、桜の木立の中に逃げ込みました。飛び跳ねねずみはもう自分の目を信ずることができませんでした。そこはとても涼しくて、そして、かなりそれが広がったからです。そこには、水があり、桜の木があり、そして、食料にする種があり、ねぐらを作るためのたくさんの草がありました。それに、これから探検しなければならぬ洞穴、そして、まだまだ直ぐにしなければならぬことが一杯あったのです。集めて回らなければならぬものが限りなくあったのです。

かれが、とても重々しい息の音を聞いたとき、自分の新しい領地を検分してまわりました。彼は、急いで、その音を突き止めそして、その音の出てくるところを見つけました。それは、黒い角をもった巨大な丘のような感じがしました。大きなバッファローだったのです。飛び跳ねねずみは自分の前に横になっているその生き物の大きさを信ずることができませんでした。あまりにも大きかったのです。ですから、飛び跳ねねずみはその片方の角にやっと這い上がっていくことができました。“全く、飛んでもない奴だ。”と彼は思い、そして、よじ登って、もっと近づいていったのです。

“やあ、兄弟、良く来たね。”とバッファローが言いました。“ぼくを訪ねてきてくれてとても嬉しいよ。”

“やあ、今日は。それにしても君は随分大きいね。”と飛び跳ねねずみが言いました。“ところで、君はなぜ、此处に住んでいるんだね？”

“ああ。実は私は病気なんだ。そして、もう、死んでしまうところなんだ。”とバッファローが返事をしました。

“そして、なんと、私の祈祷師が言うには、ねずみの目だけが、私の病気に効くというんだ。しかし、小さな友達、ここにはそんなねずみのような生き物はいないんだよ。”

飛び跳ねねずみは、大変のショックを受けました。“私の目のどっちか！”と、彼は思いました。“私の小さな目のどっちかか。”彼は、慌てて桜の木立の中に飛込みました。しかし、呼吸はだんだん荒くなり、そして、ゆっくりとなっていたのです。

“彼は死んでゆくのか”と飛び跳ねねずみは思いました。“もし、私が彼にこの目をあげなかったら。彼は、死なせるにはあまりにも偉大な生き物なんだ。”

すると彼は、あのバッファローが横たわっているところに戻ってゆき、こう話したのです。“私はねずみなんです。”彼は、ガタガタ震える声で言いました。“そして、あなたは、私の友達で、偉大なる生き物なんだ。だから、私はあなたを死なせるわけには行かないんだ。私には目が二つあるだろ。だから、そのうちの一つを君に上げるよ。”そう言って直ぐに、飛び跳ねねずみの目が彼の首から飛び出してゆき、バッファローはそのおかげで元気を取り戻しました。バッファローは飛び跳ねねずみの体に抱きつくほど、飛び起きたのです。

“ありがとう、私の小さな親友よ。”とバッファローがああ。“私はお前さんが神々のいる山を探していることを知ってるよ。そして川に行こうとしていることもね。君は私に命を授けてくれた。だから今度は私がその人々のいるところに連れて行ってあげるよ。私は、これからずっと君の友達でいたいんだ。すぐ、私の腹のところに来てくれ。そしたら私が君を神々のいる山に運んであげるから。点々とあんなに空を飛んでいる奴らをちっとも恐がる必要はないんだ。私の腹のしたで走っている間は、ワシは君には気づかないよ。彼らが分るのはバッファローの背中だけなんだ。私も平原にすむものだし、もし私もその山に登ってゆくようなことになったら、それこそ私は君に抱きついちゃうよ。”

こうして、小さなねずみはバッファローの下で走り続けました。そうすればワシ達からは安全に隠れることができたからです。でも、目は片目しかありませんでしたから、それが恐ろしかったのです。バッファローの巨大なひずめの音が、彼が土をけるたびに轟き渡りました。そして、山の麓にたどり着くとバッファローが立ち止まりました。

“さあ、私の兄弟よ、此处が君を置いていかなくちゃならないところなんだ。”とバッファローがいました。

“ありがとう。感謝するよ。”と、飛び跳ねねずみがいい、“しかし、君も知ってのとおり、片目で君の腹の下を走ってくるのはとても恐かったよ。きみの物凄い大地をけるひずめの音はいつも恐ろしかったよ。”

“もう、なにも恐がることなんかないよ。”、“私が歩いてゆく道は、サンダンスの道なんだ。そして、私は、いつでも私のひずめの音がやがては聞こえなくなっていくと分っているよ。ここで、私は平原にもどらなくちゃいけないんだ。なあ、私の友よ、きみは、いつでもそこにいる私を見つけることができるんだよ。”

飛び跳ねねずみは、直ぐにまた彼の新しい世界がどんなものか観察を始めました。すると、そこには、これまでの場所よりも沢山のにぎやかなもの、一杯の食べ物となる種、ねずみが好きなそのほかのものがありました。そんな観察をしているとき、彼は、突然そこで身動き一つしないで座っている茶色の狼と偶然出会いました。

“やあー。こんにちは狼さん。”と飛び跳ねねずみがありました。

狼の耳が立ち、彼の目がぎらぎらと輝きました。“狼！狼！そうだよ、それは、私のことなんだ。私こそ、狼なんだ！”しかし、それから、彼の気持ちはまたぼんやりとしてきて、彼が自分が誰だか本当に分からなくなって、また静かにじっと座るのにそんなに時間は掛かりませんでした。そのたびに飛び跳ねねずみは彼が誰だか思い出させ、彼はその話を聞くたびに気を確かにしたのですが、それもまた直ぐに忘れてしまったのです。

“かれは、それほど偉大な生き物なんだ”と、飛び跳ねねずみは思いました。“でも、彼は何にも記憶がないんだ。”

飛び跳ねねずみは彼のいる新しい場所の中央に向ってゆきましたが、そこは、回りがしーんとしていました。彼は、とても長い間、なにか心臓の鼓動を聞こえないかじっと耳をすましていました。と、突然、彼は、なにかに気づきました。そして、あの狼が座っているところに急いでもどって行き、彼に話しかけました。

“狼さん。”と、飛び跳ねねずみが口を開き、・・・・

“狼！狼！”と狼が言いました・・・・

“狼さん、” “僕の言うことをきいてください。私は、どうすればあなたが治るのか知っていますよ。それは、私の片方の目なんです。だから、私はそれをあなたにあげたいんです。あなたは私よりも大事な生き物なんです。私は本当にただのねずみにすぎません。だから、どうか、それを受け取ってください。”

飛び跳ねねずみが話し終わると、彼の目が顔から飛び出し、そして、狼は元気になったのです。

涙が狼の頬を伝わって落ちてゆきました。しかし、彼の小さな友は、もう両方の目がなく盲になっていましたので、それを見ることができませんでした。

“あなたは本当に素晴らしい友人だよ。”と狼が言いました。“だって、こうやって私は自分の記憶を取り戻したんだから。しかし、その代わり君は目が見えなくなってしまったんだ。私かあの神々の山に行く案内をするよ。君をそこに連れて行ってあげよう。そこには、偉大なる魔法の湖があるんだ。その世の中で一番きれいな湖なのさ。その湖面にはこの世のありとあらゆるものが映し出されているよ。”

“ありがとう。是非、そこに連れて行ってもらいたいな。”と、飛び跳ねねずみが言いました。こうして、狼は、森を抜け、その魔法の湖までかれを案内してゆきました。飛び跳ねねずみはその湖の水を口にしました。狼が彼にその美しさを教えてあげました。

狼が、“私は、そろそろ君をここに残して行かなくてはならないんだ。”もどって、他のものたちの案内をしなくちゃいけないからね。

でも、私は、君がいて欲しいと思うなら、何時までも君と一緒に此処にいることにするよ。“と、言いました。

“ありがとう。僕の友達よ。”と、飛び跳ねねずみが言いました。“確かに、正直、私は1人になるのが怖いんだ。けど、君が戻って、他の人を此処に案内しなくちゃいけないということもよく分っているよ。”

飛び跳ねねずみは、恐くてガタガタ震えながらそこに座っていました。彼は、目が見えなくなってしまったので走ることもできなくなっていたのです。でも、ワシが此処に彼がいることを探し出すに違いないと知っていました。自分の背中にその影を感じたのです。そして、そこにワシが立てる響きを耳にしたのです。彼は、衝撃を受けてもいいように態勢をとりました。そして、ワシがかれを襲ってきたのです。飛び跳ねねずみは、意識を失ってしまいました。

そして、暫くして彼が意識を取り戻しました。生きていることの驚きはとても大きなものでした。しかも、今、彼は目が見えるようになっていたのです。

あらゆるものがかすんで見えたのですが、でも、その色はとても素晴らしいものでした。

“目が見える！なんでも目えるぞ！と何度も何度も飛び跳ねねずみが言いました。

すると、なにかぼんやりしたものが飛び跳ねねずみのほうに近づいて来ました。彼は、一生懸命目を凝らしてみたのですが、でも、その姿はやっぱりぼんやりとしていました。

“やあ、兄弟、こんにちは。”と声がしました。“どうかね、君はなにか魔法の力がほしいかい？”

“私に、なにか魔法の力をだって？”と飛び跳ねねずみが聞き返しました。“そうだよ。魔法の力さ！”

“いいかい、君はできるだけ低くしゃがむんだ、”と声がしました。“そうして、そこから一気に思いっきり高く飛び跳ねるのさ。”

飛び跳ねねずみは、言われたとおりにしました。できるだけ低くしやがみこみ、それから、飛び跳ねたのです。風がかれをとらえ、そして、かれをずっと高いところまで運んでゆきました。

“恐がることなんかないよ。”と声が彼に話しかけました。“風にしがみつくんた。信じるんだ！”

飛び跳ねねずみは信じました。彼は目を閉じ、そして、風にしがみつき、風はどんどん高くかれを運んでくれました。飛び跳ねねずみが目を開けると、なんと、すべてもののものがはっきりしていました。そして、彼が高く高く上がっていくと、それがますますはっきりとしてきたのです。飛び跳ねねずみは、綺麗な魔法の湖の上に浮かんでいる睡蓮の葉の上に彼の古い友人がいることに気が付いたのです。そうでは、それはあの蛙でした。

“君には、新しい名前があるんだ。”と蛙が話しかけました。“君はワシなんだ！”

(さあ、これでお仕舞い。でも、これが、新しい話の始まりかも。)

This Lore was submitted to me by [Thomas Eriksson](#)

インディアン不思議な伝説。自分の両方の目を人のために上げてしまうねずみの素晴らしい愛、これが、彼に魔法の力をあげることになりました。でも、ワシがもともとはこの愛に満ちたねずみだったというのは、楽しい話ですね。しかも、そのワシがアメリカのシンボルだなんていうのは、これは、いかにアメリカがインディアンのことを尊重しているかという表れではないかと思います。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

117 ジャガイモ族 の話

Hitchiti-Mikasuki

Native American Lore

Oyea, Tau Natiaos, Guatiaos

これは、あるジャガイモ族のお話です。

インディアンの社会において、混血のインディアンの地位についての問題がずっと注目され続けてきています。F.B.I.(純潔のインディアン)と混血のインディアンの双方がこの問題について、彼ら自身ならびに、社会の両方についての議論を求めています。この問題は決して新しいものではなく、それは、最初の混血のインディアンの誕生以来、常に話題にされてきたものです。私は、この問題に対して一つの答えを与えようという気はありません。ただ、此処に、**Mvskokee** (クリーク族)の話を紹介したいと思います：

●よそ者たち●が我々の土地に入り込んできたときに、彼らはこの土地に落ち着き、そして、家を建て、大地を耕し始めたのです。この最初の侵入の力の波は、平和が到来したかのように見えました。そして、彼らは平和的な人々とであったのです。

こうして、暫くの間は我々の社会の人とその●よそ者たち●達とは、隣どうし仲良く暮らしていました。そして、友達づきあいが始まり、時間が経つにつれ、様々なことがおこり、人々は御互いに理解するようになると愛も生まれてきました。そして、人々の間には、●よそ者たち●から妻を迎えるというようなことがおこりました。

こうした夫婦が子供を授かると、今度は直ぐに別の問題がおこったのです。**Mvskokee** の伝統では、一族は母方の家族を通して形成されていました。しかし、この●よそ者たち●はどの **Mvskokee** の部族にも属していませんでしたので、子供たちはどこの部族にも入ることができなかったのです。

これが、子供たちと部族の間に問題を投じました。どの部族にも属さないということは決してよいことではありません。部族の習慣では、自分の部族の中では結婚することができませんでした。ですから、この部族に属さない子供たちが将来結婚するときにはどんな風に取り扱われたのでしょうか？ 子供たちは、彼らの両親からはとても愛されていたのですが、しかし、その社会のなかで完璧に受け入れられていたというわけではなかったのです。

部族に属することのできない子供たちのお母さんは、その子供たちにどんなことがおこるかを心配して、とても悲しい思いをしていましたから、彼女たちは長老のところに行き、そして、忠告を求めました。長老たちは、彼らに共に創造の神のところに行き、祈るがいいと話しました。そして、もし彼らの気持ちが真底、純真であれば、創造の神は、彼らの願いをかなえてくれるだろうといいました。

女たちは村を出て、祈祷師のいる場所を尋ねてゆきました。そして、彼らの貢物を創造の神に捧げたのです。何日も何日も、彼らは祈りを続けました。そして、創造の神は、彼らの祈祷師に耳を傾け、そして、彼らのこころの中に神聖なものを見ました。

創造の神は女達に、土が軟らかく、そして、黒い水が流れているところに行き、そこで留まって、そして、彼らが土の下から彼らになにかを求めてこえをだしている植物を見つけるように言いました。

創造の神は、彼らに、もし彼らがその植物を見つけ、そして、その植物が彼らに教えてくれるようにすれば、彼らは、自分たちの子供に新しい部族の名前を見つけてあげることができるばかりか、彼らも部族の人々に、これまでにないような食べ物をプレゼントしてあげることができるだろうといいました。

こうして、女達は祈祷師の場を後にして、また、自分たちの村に戻りました。彼らは自分たちの夫や子供たちに別れを告げ、そして、柔らかな、そして、黒い水の流れている場所を求めて出かけてゆきました。その柔らかい大地と黒い水の流れている場所は、噛み付くような虫や、蛇、刺虫、泥かめ、毒蜘蛛、枯れ木、そして、不気味な精霊な

どがうようよしているようなところでした。ここは、その女達の本当の気持ちを確かめる場所だったのです。

何日もの間、彼女たちはあの大地の下から、なにかを求める植物の声に耳を傾け、それを探しまったのです。そして、とうとう彼女たちはその植物を見つけ出す願いが尽き、諦めようと思って、創造の神にもう一度祈りを捧げたのです。と、その時、彼女たちは彼らになにかを求めている植物の声を聞いたのです。

その声は自分たちのいると頃からは見えないようなところからでしたから、彼らはその植物を探し出すことがとても難しかったのです。しかし、ついに彼女たちはその植物をみつけ、それを土の中から掘り出したのです。その色ぶちが彼女たちに、自分は土の下から出てきたのだけれども、創造の神は、私に、すべての方角を一度に見ることができるような能力を与えてくれたのだといいました。

これこそ、彼女たちがそうするように教わったことなのです。彼らはその植物を自分たちの部族の村に持って帰ることにしました。そして、そこで、彼女たちはナイフを取り出し、その植物の芽を切り出しました。そして、それを小さな土の盛り上りのところに植え付けました。もし、女たちが言われたとおりにするなら、その植物は大きく成長して、これからずっと部族の人たちに食べる物を実らせると約束しました。

女たちは、その植物の言うとおりに面倒をみ、属する部族のない子供は、ジャガイモの部族として知られるようになりました。そして、その植物は、今の今日までずっと、部族の人たちに沢山の食料をもたらし続けているのです。

This Lore submitted by [DS Adonaset Fort](#)

此处では、**white potato** のことを白いジャガイモと訳していますが、**white potato** がジャガイモのことのようです。混血の人たちのステータスを維持するために、混血のインディアンが彼らに幸せをもたらしているという話は、一民族、一国家の日本人にとっては、とても考えさせられる話だと思いますが・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

118 Tahina-Ca の話

Caraja

Native American Lore

今日の伝説は **Caraja** の人々に伝わっている話です。彼らは、いつもは狩猟や農業を営んでいたのですが、鉄の鉱脈が、彼らの名前のもととなっている丘、“**Serra dos Carjas** という名前ですが” から発見されると、彼らの住んでいる場所の一部から強制的に退去をさせられたのです。そして、今彼らは、**Araguaia** と **Java** の川の河岸に、そして、**Maoto Grosso** と **Par** という州に住んでいます。おそらく、**carajas** のなかでもっとも重要な場所は、あるいは、少なくとも、もっとも良く知られているのは、彼らの保留地となっている **Araguaia** 川の中にある **Bananal** という島に住んでいます。私が現在持っている情報では、17 世紀に、その保留地は公平無私な政府の役人によりとても劣悪な状態で管轄されていたということです。そして、**Caraja** はとても悪い条件だったようです。が、いずれにしても事は変わり、私は、それがいまだどんな状態になっているのか詳しいことは知りません。その一方、私は、**Caraja** の人々はとても評価の高い人形作りを良くし、それが工芸品として売られているということです。では、その物語とは一体どんなものなのでしょう。

Signed,
Emilia Novo

ずっと、ずっと昔のこと、**Caraja** は、どんな風にして植物を植え、どうやって農業をするのか知っていませんでした。彼らは、狩猟や、魚とりをして生活を営んでいました。そして、時々村の食料が尽き、とても辛い思いをしていました。人々はどうやってトウモロコシや、キャッサバ、あるいは、パイナップルを栽培すればよいのか知らなかったのです。飢えは、雨季、この時期は狩猟をすることも大変でしたので、この季節には厳しいものでした。

ところで、村には2人の娘が住んでいました。姉のほうは、**Imahero**、そして、妹は **Denake** という名前でした。ある日の晩のこと、彼女たちに話を聞かせていたお父さんと一緒にいたのですが、その日、**Imahero** は、夜空にとっても綺麗な星を見ました。そして、その星が何なのかを尋ね、それが欲しいといったのです。彼女は、星に魅了され、うっとりとして、心臓はドキドキし、息が止まりそうになっていました。

すると彼女の父親がこう言いました：“あの星は、**Tahina-Ca** なのさ。ずっーと、遠くにあるんだよ。誰も、あそこまで行きつけるなんて門じゃないよ。ただ、ひとつだけ、お前があれを手に入れる方法があるとしたら、それは、自分の精一杯の気持ちで、それを願うことだよ。そして、もし、お前の願いを聞いていて、きてもいいよというのなら、そしたら、たぶんお前さんはそれが手に入るかもしれないな”。それから、**Imahero** は、来る日も、来る日も毎晩、その星に願いを掛けるように成りました。それは、ある日のこと、彼女が誰かが彼女たちの家に入ってくるのを耳にするまで続けました。彼女は、びっくりして、入ってきたのは誰なのかと尋ねました。

すると、そこにやってきた見知らぬ人は：“私は **Tahina-Ca** さ。”これにはびっくり仰天。彼女は焚き火のところまで急いで行き、火をつけ、そして父親と妹を呼び、自分たちが、その星がどれだけ大きいものかを見るために辺りを明るくしたのです。しかし、彼女はその大きく輝いている星が、実は、長い白髪のとっても歳をとった老人だったことを知り、たまらなくがっかりしてしまいました。

そして、腹のたった彼女は、その老人に向かって外に出てゆくように叫んだのでした。“わたしは、あなたを自分の夫にしたくなんてないんです。”、“歳はとっているし、汚らしすぎます。出て行って頂戴！ さあ、行って！ 行って！”

Tahina-Ca は振り返り、そして、とても低い声で泣き始めたのです。

そこで、かわいそうに思った妹の **Denake** がこのみすぼらしい老人に心から謝りました。この老人は空から彼女の村まで長い旅をしてきたのです。そして、その手を強く握り、“泣くのはよして頂戴な！ 私があなたと結婚しますわ。”と言いました。

その歳寄りはとても喜び、直ぐ結婚式をあげることになりました。

そして、何日か経ち、その老人が彼の若くて、綺麗なお嫁さんに向かってこう言いました：“私はね、森にいかなきゃならないんだ。そこで、私は、お前さんの村の **Caraja** の人々がこれまで見たこともないような、とても素晴らしい作物を栽培するための土地を準備するつもりなんだよ。森を切り開き、いろいろなことをするのさ。でもなあ、私しや、全部それを1人でやらなきゃならないんだよ。” と。

これを聞いた **Denake** は、彼が非常に弱弱しいのでとても心配をしましたが、彼を1人で行かせることにしました。すると、**Tahina-Ca** は川の方に行きました。そして、彼は、なにやら魔法の呪文を唱え、自分の膝が浸かるほど川の中に入ってゆきました。彼が何度も体を曲げ、そして、手を水の中に浸しすと、そのたびに、手の中には、とうもろこしの種や、今日、**Caraja** の人たちが農業を営んでいるありとあらゆる食物の種が入っていたのでした。

この仕事をやり終えると、**Tahina-Ca** は、森の方に入って行って、木を切り、土を肥沃にし、食物の種を植える準備の重労働に取り掛かりました。

こうして、丸1日が過ぎ、やがて夜空を支配する夜の帳が足早にやって来ました。誰も、夜には、森はとても危険だということを知っています。ですから、**Denake** は、彼女の夫になにかが起きたのではないかと恐ろしくなり、気が気ではありませんでした。夫は歳寄りだし、そんな重労働には耐えられないと思ったからです。夫はきっと傷ついているに違いない、そして、家にもどってこれらないんだわ！ そう思った彼女は夫の命令に逆らって、森まで彼を探しに行く決心をしたのです。彼女が夫が切り開いた土地のところまでやって来ましたが、彼女はそこで彼を見つけることができませんでした。彼女は、その森の切り開いたところで、強靱でハンサムな若い男が、もうすぐ最後の仕上げの重要な仕事に夢中になって働いているのを見て、ますます心配になってきたのです。

彼は、切り開いた大地に温かい灰を撒いているところでした。彼女が切り開いた土地の端のところに来て、尋ねました：“若いお人、あなたは私の夫を見ませんでしたでしょうか？ 彼はとても歳をとって

おり、私は、彼がまだ私たちの村まで戻ってこないで、心配で、心配でなりません。彼の身の上になにか悪いことがあったのではないかと、とても心配しているんです！”

これを聞いた若者が、にっこりと笑い、そして、応えました：“もう、何にも心配することなんかないよ。私が **Tahina-Ca** なのさ。私は歳寄りなんかじゃないよ。私は、私と結婚したいという人が、本当に私を求めているのかどうか確かめるために、ちょっと姿を変えていただけだよ。僕は、お前さんが私の身なりなど構わず、私と結婚したいと言ってくれたので、本当に幸せなのさ。これはね、そのお前さんの素敵な心に対して私のしてあげることのできるお礼なのさ。こうして、村の人々に沢山の植物とその実をお礼にあげるのさ。さあ、おいで。一緒に村に帰って、みんなにこのことを教えてあげるんだ。”

村に戻って、**Tahina-Ca** が自分の話をし終わると、**Imahero**、そうです、彼女は彼を軽蔑したのですが、彼女が言いました。自分も本当に彼と結婚したかったんだよ、だから、自分こそ、彼の本当の妻になる資格があるんだ、と。でも、**Tahina-Ca** は、それを断りました

彼の断りを聞いて、**Imahero** は、もの悲しげに、劈くような鳴き声を上げ、気が遠くなってゆきました。と、たちまち、彼女の体はその場から消えてゆき、その場所には、一匹の猛禽の鳥がいました。それは、**Crajas** の人々が **urutau** の鳥（ワシ座を意味するアルタイルのことかと思われます・・・訳者）とよんでいるもので、直ぐに、天に上ってゆき、夜空で輝き始めたのです。そして、**Tahina-Ca** に結婚を拒まれたのを悔やんで、一晩中、悲しみの鳴き声をたてているのです。

This Lore was submitted by [Emilia Novo](#)

わがままで気が強いお姉さんと、こころ優しい妹の話。村の人たちが幸せになったのは、いうまでもなく心優しい妹のおかげ。とても、気持ちのいい話でした。それにしても、夜空にあがったお姉さんが、ワシ座になっているというのは、これまた、素晴らしい考えのような気がします、・・・

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

119 双子の兄弟

Caddo

Native American Indian Lore

双子の兄弟

アーカンソー、オクラホマ、テキサス、そして、ルイジアナ地方に住む **Caddo** 族の人々に伝わる話です。

それは、もう、何度も何度も冬を越すというずっと昔のことなのですが、あるところに植物と動物の知識の秘密を学んだ一人の若者がいました。彼は、どんな植物が、体や精神を清浄化したり、あるいは、人々が自分たちの考えをはっきりさせたり、すっきりした夢を見せたりして、病気を治療する薬草として治療に効くのか知っていたのです。彼は、やがて魔法使いとして知られるようになりました。

その魔法使いが **Clay Pot** の女と呼ばれている若い少女に恋をし、また、彼女のほうもかれを愛していました。彼女は、かれを自分の連れ合いとして選び、彼らは彼らの村の全部の人の祝福を受けて結婚したのでした。そして、その村の外れに草作りの自分たちの家を建てたのでした。

やがて一冬が過ぎ、**Clay Pot** の女は、赤ん坊を宿したのです。しかし、彼女は不幸にも病気になってしまい、彼女の生きているうちにお腹の赤ん坊が誕生するのは難しい状態になりました。魔法使いの彼は、**Clay Pot** の女の身の上をととても案じていました。

何とかしようと考えた魔法使いの男は、体と精神の両方に効力のあるような素晴らしい薬を作ろうと、ありとあらゆる病気に効く薬草と植物を手に入れるために出かけてゆきました。そして、ある薬草から

飲み薬を作りました。また、燃やすととてもよい香がし、草作りの小屋の中の空気を綺麗にしてくれるような植物をあれこれ燃やしたのです。**Clay Pot** の寝ている枕元には、彼女の気持ちが穏やかになり、また、気が確かになるように、いろいろな植物をそろえてあげました。

こんな努力が実り、大変な出産でしたが、**Clay Pot** は魔法使いのために素敵な赤ん坊を産んだのです。魔法使いの男は、薬草と、そして、飲み薬の残り、出産のときに出てきた汚れた寝具類を全部かき集めて、それらをガラクタや食われた容器などが投げ込まれているごみの山に投げ捨てました。そして、誕生のときに出てきたいろいろなものをまぜると、なんと奇跡が起こったのです:そのゴミの山からこともあろうにもう1人の赤ん坊が、しかも草作りの小屋の片隅で寝ているあの赤ん坊よりももっと大きい赤ちゃんが生まれてきたのです。

魔法がとても強かったためか、その二番目の赤ん坊は、最初の赤ん坊よりも大きく、そして、なぜかすでに歳が上のように見えました。インディアン部族に伝わる風習ですと、彼のほうを年上の兄弟とみなしているのです。彼は、草作りの家の中で生まれたのではなかったもので、森の中にいて、そしてそこで野生の動物達と一緒に成長しなければならなかったのです。

それから何度か冬がすぎ、小屋の中で生まれた若い少年は元気に成長し、魔法使いの男と **Clay Pot** は彼をとっても可愛がり、いろいろなことを教えてあげました。彼は少年時代の名前で良く知られていますが、しかし彼は、彼がやがて立派な狩人となり、戦士となって彼に相応しい成人の名前を授かることを楽しみに待っていました。その日のために、魔法使いの男は、この少年にとっても強靱な弓と、沢山の筋のいい矢を与え、そして、少年のほうも自分が立派な弓の使い手となる練習をして楽しく過ごしていたのです。

夏のある日のこと、魔法使いは狩にでかけ、**Clay Pot** は自分の水瓶を持ってその日に使う水を汲みに近くの川まで出かけてゆきました。少年は、彼の部族が自分たちの草作りの家の回りをいつもきれいにしているように、その何もない庭で遊んでいました。

ところが、少年の母親は夕方の影が草作りの家のほうまで長く伸びても帰ってきませんでした。彼女は太陽が木の向こうに沈んでもそれ

でも帰ってこなかったのです。魔法使いの男が家に戻ってきましたが、でも、そこに **Clay Pot** の姿はありませんでした。

自分の妻の身の上になにかが合ったのではないかと心配した魔法使いの男は、息子連れて川のふちまで様子を見に行きました。そこで彼らは **Cay Pot** の足跡をみつけ、そのそばの土手には壊れた水がめがあったのです。そして、2 人のものと思われる足跡は、川の中のほうに向っていたのです。そこには、こちらに戻ってきた足跡はありませんでした。

魔法使いの男は川の辺の土の上にひざまずき、そして、涙を流して嘆きました。“川を渡って人食い鬼がやってきたんだ。そして、私の妻を連れていってしまったのだ。” “そこに住んでいる化け物たちは、ご馳走に人を食べているんだ。私の妻も、お前のお母さんはもう帰ってくることはないんだ。” と彼が言いました。少年もやはりひざまずいて、父親と同じ様に涙を流しました。

そして、魔法使いの男と彼の息子は草で造った小屋に戻り、火をたいて、その中で 6 日間の間、悲しみにふけていたのです。7 日目になり、彼らの食料が尽きてしまいましたので、魔法使いの男は、また、狩に出かける準備をしていました。

次の日の朝、少年に出かける挨拶をし、彼に、彼らの庭の近く、村の砦の中で遊ぶように言いました。そして、日暮れまでには戻ってくるといって出かけたのです。

少年は、いつものように、庭にある木を標的にして、弓で遊んでいました。と、その時、まだ太陽は天高く輝いていたのですが、そこにもう 1 人の少年が森のほうからやってきて、かれに笑顔を見せたのです。その少年は魔法使いの若い息子よりも背が高く、体が丈夫で、そして、どうも、歳をとっているように見えました。が、彼は、彼らの父親にそっくりで、その若い少年の水に映った顔ととてもよく似ていたのです。森から来た少年は、ちょっとばかり長すぎるのではという感じの鼻をしており、それは、丁度、動物の鼻のような形をしていて、長い髪はぼさぼさで殆ど手入れがしてありませんでした。体にはなん

の衣服もまっとしておらず真っ裸でしたが、でも、その話し振りはとても穏やかで、直ぐに2人の少年達と一緒に遊び始めました。

彼らは楽しく笑い、そして、冗談を言ったり、代わりばんこに弓を射って、どちらが上手に的を当るか、試したりしていました。彼らは直ぐに仲良しになったのです。そして、最後に、森から来た少年が彼の秘密を打ち明けたのです。

“実は、僕は君の兄なんだ。”と彼が言いました。お父さんの呪いから生まれたんだ。しかし、君はこのことをお父さんに絶対に話してはいけないよ。私は森の中に住むことにするからね。”

太陽が沈むころになって、森から来た少年はさっさとかえってゆきました。魔法使いの男が、夕飯にする獲物をもって帰ってきました。

同じ様な日が四日間ほど繰り返されました。どの日も魔法使いの男は、草の小屋をでていくと、村のほうに入ってゆきました。すると、森から少年がやってきて、双子の兄弟と一緒に遊んだのです。そして、夕方になると、森から来た少年は、きまって“私のことをお父さんに話してはいけないよ。私は森に住むことにするからね。”と行って去ってゆきました。

毎晩、新しくできた自分の仲のよい友達がいなくて、若い少年は、草の小屋のなかで淋しくてしょうがありませんでした。そして、むなしく焚き火をじっと眺めていたのです。そんなことになにかがあるなと彼の父親が気づき、そして、なにか具合でも悪いのかと尋ねました。これまで自分のお父さんには決してうそをつくことがなかった少年は、あの森から来た少年のことをすべてお父さんに話したのです。

“分った。これはかれを引き止めなくてはならないな。”と魔法使いの男は、楽しそうに言い、“そして、かれをわし等の家まで連れてきて、家族のひとりにするんだ！あした、お前がその少年を見たら、彼のほうに近づいてゆき、彼の長い髪の中を這い回っている虫がいるかどうか確かめる振りをするんだ。そして、彼に、私はその虫を取り除いてやるよと言いなさい。それから、こっそりと彼の長い束ねた髪に四つの結び目を作るんだ。そうすれば、この魔法で、わし等はかれを捕まえることができるんだ。そして、かれをわし等の家族の一人にす

るんだ。わしは、飛んでいる虫に姿を変え、近くの草の中に隠れていることにしよう。

次の日、魔法使いの男は虫に姿を変え、そして、庭の片隅にある草の葉に座っていました。そこに、森の少年がやって来たのです。

“僕たちのお父さんはどこにいるのかね?”と彼は、なにか疑っているふうに尋ねました。“お父さんは此処にはいないよ。”と、年下の少年が言いました。事実、お父さんは、いつもの姿でそこにいたわけではなかったからです。

“じゃ、あの葉っぱのところにいる男は一体誰なんだね?”と森の少年がもう一度聞き、そして、彼は森のほうに走って行ってしまいました。

それから、四度も、彼らは森の少年を罠にかけようと試みました。魔法使いの男は鳥に化けたり、あるときには、犬になったり、這い回る虫になったり、そして、火の陰に隠れたりしたのです。が、いつも、森の少年は、彼を見破ってしまったのです。そして、とうとう、お父さんは歳下の少年にこう言いました。“今日は、私は狩にいくよ。しかし、もしお前の兄さんが来るようだったら、とにかく、あの魔法の結び目を作ってみるんだ。”

魔法使いの男は弓と矢を持って、小屋から出てゆきましたが、でも庭からちょっといったところで立ち止まり、そして、持っていた弓矢を木の枝にかけておきました。そして、自分はまた虫に化けて少年に分らないように庭に戻ってきたのです。

森の少年がまたやって来ました。“僕たちのお父さんはどこにいるんだい?”と彼が尋ねました。

“彼は、此処にはいないよ。”と、父親がいるとは知らない村の少年が言いました。

森から来た少年がにっこりと笑い、そして、庭に入ってきて、彼らはまたいっしょに遊んでいました。

“お兄さん。”、“お兄さんの髪の毛の中に一杯虫がいるよ。僕がそれを取ってあげよう。”と村の少年がいい、彼はそのふりをして、つ

いにその長い髪の毛を束にし、そのなかに四つの結び目を作りました。と、突然、そこに、魔法使いの男が、もとの姿になって現れ、自分の息子といっしょに森から来た少年の腕を掴み、そして、かれを草の小屋の中に引き連れてゆきました。

魔法使いの男が良く切れる貝殻を取り出し、それで、その森から来た少年の出すぎた鼻を削り落とし、髪の毛も村の少年達がしているような形にカットしました。森の少年には、子牛の毛皮で作った毛布を着るように用意してあげました。

ちょっと経ってから、彼らの父親は少年達にご馳走をつくり、彼らがそれを食べている間に、自分の弓と矢を取りに行きました。彼は戻ってくると、森の少年に、自分がかれを家族として迎え入れることをどれだけ歓迎しているか示し、彼に、魔法の火をつかい薬草の煙で燻り黒くした、極めて特性の弓をあげたのです。

そして、弟のほうの息子にも同じ様に愛していることを示すために、魔法使いの男は、彼には、沢山の薬用の植物の汁と脂で染めた、青い色の弓を与えたのです。

今や、着物を纏い、そして、本当村の少年らしく振る舞っている森の少年は、榆の木から幹を切り出し、そして、それを使って2人が弓でいるための、丸い木の的を作ったのです。彼らはその的に二色の色を塗りました。勿論、それは、黒と青の色でした。2人の少年は、その的を弓で射って遊び、とても楽しいときを過ごしました。時には、自分たちの腕を確かめるために、動く標的としてその丸い的を転がしたりしていました。

ある日、その的は、2人の少年がそれを射ようともしていないのに、森のほうに転がっていきました。

そして、少年達がそれを 探しに行きましたが、それはどこかにいつてしまいました。

“誰かが僕たちを見ながら、此処にいたんだ。”と森の少年が言いました。“そして、彼は、僕たちの的の輪を持って行ってしまったんだ!”

こうして、双子の兄弟は、何度も冬がきて、過ぎ去り、ますます勇敢になり、成長してゆき、3人は一つの家族としてとても楽しいときを過ごしていました。そして、ある春の日のこと、彼らの父親が何日かの間、留守にすると、森の少年は弟に、“もう、僕たち1人の成人としての名前をつけてもいい時が来たよ。どこかに旅にでかけようよ。”と言いました。

2人は、森の木を使って作ったそれぞれの弓と矢を持ち、旅の途中で食べる乾燥したトウモロコシの実を用意してでかけました。森の少年は、彼らの父から特別のもらった黒い弓も持ってゆきました。

2人の若者たちは、川に沿って森の中、深くまでは行ってゆきました。森の少年が道案内をし、そして、こんもりと茂った木々へと通ずる道を通り過ぎてゆきました。そして、そこで森の少年の友達だった、犬よりも大きい、立派なリスに出会いました。

その大きなリスは、双子の兄弟に、中に普通ではない威力を込めた二つの胡桃の実をあげました。そして、森の少年に、森のなかにいる彼の沢山の友達がかれを思い出し、突然いなくなってしまったのでとても淋しがっていたと話しました。この贈り物は、その深い森のなかにいる動物達、鳥達からの記念のものだったのです。

夜になると、2人の兄弟はキャンプを作り、柔らかい土のところを見つけて、そこにその胡桃の実の一つを植えました。そして、次の日に目を覚ましてみると、なんと一晩のうちにその胡桃の木は芽がでて、大きく成長していたのです。その木がとても高くまで育っていましたので、一番上の枝は、なんと、雲の上まで届いており、夢の世界に達していたのです。

森の少年が弟にこう説明しました。“天にいる偉大なる父が、僕たちが成人になるように我々に特別の贈り物を持っているんだ。その贈り物は、その父は、私が森で生活していたとても小さなころ、僕に約束したものだ。そして、いま、僕はこの木をどこまでも上ってゆき、幻想と、夢を見るだろう。私のすべての骨が私の体から離れ、そしてこの大地に落ちてくるんだ。頭の骨は一番跡から落ちることだろう。君は、私が死んだと思うかもしれない。が、実はそうではないんだ。”と。

“僕の骨を拾い集め、そして、それを塚の中に、頭を一番上になるようにして納めるんだ。そのあと、私の身に纏っているバッファローの子牛の毛皮でできたコートをその塚にかぶせ、そこで、空中めがけて黒い矢を射ったらいい。そして、私たちが一緒に祈り、そして、空中高く矢を射って、その矢が引き返して大地に落ちてくるのを眺めていたときに我々がしたのと同じ様に、私に呼びかけるんだ、用心するんだ、お兄さん、その矢は、真っ直ぐあなたのほうに向ってくるからな！”と。

弟は、森の少年が上っていくと、それをととても心配しながら眺めていました。そして、彼が言ったように、その骨が空から落ちてき始めたのです。頭の骨が最後に落ちてきました。村の少年は、その骨を拾い集め、それにカバーをして、矢を射ました。彼は、大声で叫びました。“注意するんだ。お兄さん。弓矢は、真っ直ぐあなたのほうに向ってくるからな！”と。

すると、森の少年はその子牛の毛皮でできたコートの下から飛び出し、これまでと同じ様に元気を取り戻しました。それはまるで、弓矢が隠れているバッファローを射る前とよく似ていました。

“さあ”とその年上の兄さんが、“お前も同じ様に上って行って、お前の幻想と夢を見てくるんだ。そして、天界の偉大なる父親がお前のために用意しておいてくれた力を授かってくるんだ。私はお前が私のためにしてくれたことと同じことをしてあげるつもりだ。そして、僕たちは、またここで出会うんだ。”と言いました。

村の少年は、雲までも達している木を登っていくのは恐くてしようがなかったのですが、でも、直ぐに彼は、ほかほかとしてきて心地よい気持ちになったのです。まるで自分は寝ているような。そして、彼は力の幻想を見たのです。彼が雲から落ちてきて、大地に強く打ったときでも彼は何の痛みも感じなかったのです。

でも、彼は彼のお兄さんがかれに呼びかけている声を聞きました。そして、彼も、バッファローの毛皮から、これまでと同じ様に元気に飛び出てきたのです。弓矢が覆いに突き刺さり、垂直に刺さったまま揺れていました。

“お前はどんな贈り物を授かったんだい?” と兄さんが聞きました。

“聞いて” と弟が嬉しそうに答えました。そして彼は自分の口を開き、まるで地震のように轟きわたる言葉を喋り、そして、その声が森の木や岩に跳ねかえりこだましていました。

“分った。これからは君のことを雷と呼ぶことにしよう。” と兄さんが言いました。

“じゃ、お兄さんはどんな力をもらったんですか。” と雷くんが言いました。

“良く見てくれ”、と兄さんがいい、丁度、蛇の舌のように彼の口から、矢継ぎ早に言葉を喋りました。そして、その言葉は、天を横切っていく炎のような閃光を放ったのです。

“兄さん、僕たち、これから兄さんのことを稲妻と呼ぶことにしましょう。”

こうして、長かった1日が暮れようとしていましたが、しかし、新しい力を授かり強靱となった、新しい名前の2人、稲妻と雷はその偉大なる川の辺を一緒に仲良く歩いて行き、村に通ずる道を走ってゆきました。そして、彼らが夜の間眠りにつこうというときに今度は二番目の胡桃の実を植えたのです。

すると、夜明け前、彼らが目を覚ますと、今度はまた別の大きな胡桃の木が、一晩のうちに育っていたのです。その長い枝は、彼らが丁度わたることができるように、川の向こう側まで達していたのです。

稲妻と雷の2人は、その二番目の大きな胡桃の木に登ってゆき、そして、川の反対側にまで垂れている枝を伝って歩いてゆきました。すると、木の枝からおりて少しばかり歩いていったところで、彼らは食事に人を食べる化け物の住んでいる村に来たのです。彼らは草原のあちこち沢山の骨の山があるのを見たのです。

“見て!” と、稲妻が骨の塚を見て叫びました。“僕たちのお母さんの骨が此处にある!” と指差したのです。彼が何を知っているのか、雷

のほうは想像できなかったのですが、しかし、彼は弟の言っていることを信じました。

そして、彼らはそこにあった骨を拾い集め、一つにまとめ、一番後に頭を乗せました。そして、その骨の上にはバッファローの毛皮をかぶせ、稲妻が空中に向って黒い矢を射たのです。

“お母さん、用心して。”と雷が叫びました。“その矢が真っ直ぐあなたのほうに向ってくるから！”

その黒い矢は、稲妻の全身の力を振り絞って強烈な力で空に向って射ましたので、どんどん高く高く飛んでゆきました。そして、今度は、向きを変え、最初はゆっくり、やがて、だんだん速くなってこの地上に落ちて来ました。と、突然、Clay Potの女が、その毛皮のしたから飛び出してきたかと思うと、その黒い矢が、物凄い勢いで大地にあたりましたので、矢は子牛の毛皮に深く付き刺さり、粉々に砕けてしまいました。

彼女は人々の世界から随分と長い間、かけ離れていたのですが、しかし、それにもかかわらず、Clay Potは、2人の少年を見た途端に、彼らが自分の息子であることが分かりました。彼らは御互いに抱き合い、なみだを流して喜び合いました。

彼らが抱き合っている、丁度その時、近くにあった草の小屋から化け物たちの偉大なる酋長がやって来ました。彼は、非常に意地汚く、そして、むごたらしい生き物でした。その化け物が近づいてくると、雷は、彼の青い矢をとりだし、それを弓の弦にセットしました。

その化け物の親分が近づいてくると、兄弟は、彼らが標的にしていたのを彼の右側の飾りとして身につけていることに気がつきました。それで、かれらはこの化け物が、何年か前に、彼らを見張りながら、彼らの母親を連れ去ってしまった、川を渡ってきた化け物だったと分ったのです。

その化け物の横腹めがけて、雷が青い色の矢を放ちました。すると見事にこれが命中し、その大化け物は倒れて、死んでしまいました。

化け物の中間達が目を覚ます前に、三人は胡桃の木の枝のところに駆け戻り、そして川を渡ってしまいました。彼らが枝に乗っているときに、最初の化け物の戦士が村から飛び出てきて、やりを投げながら、彼らのほうにやって来ました。そこで、雷が振り返り、彼の言葉を浴びせると、その声が物凄い唸り声となって川の向こうまでどよめいてゆき、それ以来、化け物たちはその川を渡ってこなくなりました。こうして無事に、雷が彼らの母恩を助けてその木の幹から降りると、今度は、稲妻が振り返り、彼の言葉を吐きました。物凄い大きな白い稲妻の閃光が彼の口から飛び出し、その偉大な胡桃の木を引き裂いてしまいましたので、木は枝を川の中に落として、そして、どこかに消えてなくなってしまうました。こうなると、もう誰も、あの恐ろしい化け物の村から川を渡ってくる者はいなくなったのです。

まもなく3人は村に戻ってきました。そして、彼らは草の小屋に行き、魔法使いの男と喜びの再会をしました。彼は、彼らを温かく迎え入れ、そして4人は、再び楽しい家族として暮すようになりました。

こうして、彼らは長い間幸せに暮らしていましたが、やがて、年とった魔法使いの男が楽しかった一生を静かに終えるときが来ました。**Clay Pot**の女は、彼女の夫がいなくなってからは、この世に長くは留まっていませんでした。彼女もそれから直ぐに亡くなってしまいました。

稲妻と雷は、もう、立派な大人になっていたのですが、彼らは、自分たちの母親と父親の骨を集め、そして、それをバッファローの毛皮で包み、そこにいる仲間達がいつもするように、そのいれものを土に埋めたのです。

それから、雷と稲妻がずっと昔、彼らが旅をするときに通った森の道に戻って行き、最初の巨大な胡桃の木に登ってゆき、そして、雲の中に立ち降りるまで、時はそれほど経ちませんでした。その古い大木は、彼らの下に倒れてしまい、森の長い丸太となったのです。

雷と稲妻は、それからは空に住むようになりました。そして、風や嵐と一緒に往ったり来たりするようになったのです。下界の人々はそれを見上げて二人のことを懐かしく思っていました。彼らは夜になる

と、火の回りに集まり、いつも、この2人の双子の兄弟の素敵な話を語るのです。

長い話でしたので、訳している途中で、どんな結末になるか、ドキドキわくわくの状態でした。兄弟が仲良く助け合って自分たちの母親を助け出す話。とても痛快ですね。それにしても、稲妻と雷が兄弟だなんて、本当に素晴らしい発想だと思います。自然の現象を科学的に解明するよりも、こんなふうに、人間の生き方を教える物語の主人公として言い伝えることのほうがどんなにか子供の心に印象的なのではないのでしょうか。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

120 おばあさん蜘蛛が火を盗んだ話

Choctaw

Native American Indian Lore

Grandmother Spider Steals the Fire

このお話しは、テネシーからミシシッピーにかけて住んでいた
Choctaw 族に伝わるものです。

Choctaw の人々は、人間はもともとは大地から生まれでた時には、まゆの中に入っていて、目は閉じており、手足は自分の体にしっかりと固定されいたと話しています。そして、このことはすべての人間、とり人間、動物人間、昆虫人間、そして、人人間について同じことが

言えるのでした。偉大なる創造の神が彼らに憐れみをかけ、そして、彼らの手足を自由にし、乾かし、そして目を開かすために使いを遣わしたのでした。しかし、開いた目は、世の中がまだ真っ暗で、太陽もなく、月もなく、星さえもなかったのです。何も見ることはできなかったのです。人々は誰もが、手さぐりで動き回っており、もし、誰かが彼らを先に食べることがないような何かを探し出したら、彼らはそれを生のまま食べていたのです。というのも、彼らは料理するための火というものを持っていなかったからでした。

すべての人、指導的な立場にある動物人間、鳥人間、そして、しり込みをした人人間達が集まり、重要な会議を開きました。動物人間ととり人間は、我々の人生は決して良いものではない。それどころか、寒くて、惨めなもんだと結論しました。この状況を何とかしなければ! 誰かが後ろのほうでつぶやきました。“私は、東のほうに住んでいる人間が火を持っていると聞いたことがあるよ。”この言葉が疑問を沸き立たせました。“火って、一体なんなんだね?”それから、ああでもない、こうでもないという議論がなされました。そして、最後に、もし、その火というのが噂のようなものなら、火はあったかくて、明かりをもたらしてくれるだろう。それならそれを何とか手に入れなくてはということになりました。と、別の声がしました。“でも、東の人々は、とてもその火を私たちに分けてくれるようなそんな人たちじゃないんだ。かれらはとても欲張りな奴らさ。”ということで、鳥人間、動物人間達は、自分たちがどうしても手に入れなくてはならないもの、そうです、その火を盗んでくることにしたのです!

でも、誰が一体、その誉れある手柄をてにするのでしょうか? と、お婆さん蜘蛛がボランティアをかって出ました。“私が、やろうじゃないか! 私に行かせてくれんかね!”と、その時すかさず、キタオッポサムが話し出しました。“おれ、俺だよ、キタオッポサムのこの俺は動物達のなかの偉大なる酋長だよ。私が東の国に行こうじゃないか。私は素晴らしい狩人でもあるから、その火を捕まえて、それを私の尻尾のこのふさふさとした毛の中に隠してくることにするよ。”だれもが、キタオッポサムは、動物達のなかでは一番豊かなふわふわとした毛の尻尾を持っていたので、彼がその役に選ばれました。

キタオッポサムが東の国に到着すると、彼は、直ぐにきらきらと赤い綺麗な炎で燃えている火を見つけました。が、東の国の人々は、そ

れをまるで宝石ように大事に守っていました。でも、キタオッポサムはその燃えている火の火とかけらを取り出せるくらいまで、何とか近づいてゆくことができました。そして、その小さな炎を掴み、彼の尻尾の毛の中に隠し入れたのです。ところが大変。たちまち尻尾は煙を出し、燃え始めたのです。東の国の人々は直ぐにこれに気が着きました。“おい、見ろ、あそこにキタオッポサムが我々の火を盗もうとしているぞ!” 彼らはすぐにそれを取り戻し、もとの火の燃えているところに返しました。そして、キタオッポサムを追い出したのです。おお、哀れなキタオッポサム! あの尻尾の毛という毛が、一本残らず燃えてしまったのです。ですから、今の時代にいたるまで、キタオッポサムは、自分たちの尻尾に毛が一本もないのです。

そこで、もう一度、会議では新しい奉仕任務についてくれる人を何とかしなければならなくなりました。と婆さん蜘蛛が“私に行かせなさい! 私ならそれができるんだ!” しかし、今度もある鳥が選ばれました。ハゲタカです。そのハゲタカはとても気位がたかかったのです。“キタオッポサムではうまくやれなかったけど、私なら、見事にそれをやってのけるよ。私がこの素晴らしい翼で東の国に飛んで行き、そして火を盗んで、それを私の頭の上にある、長く伸びた素敵な毛の中に隠してもってくるさ。” その時は、まだ、鳥達もまた動物達も火というものがどんなものか何も知りませんでした。こうして、ハゲタカはあの強力な翼でもって東の国に一つ飛び、やって来たのです。そして、火を守っているひと達のところにサーッと急降下をし、小さな火の燃えさしを掴み取り、それを彼の頭の羽の中に隠したのです。ところが、たいへん。ハゲタカの頭は煙を出し始め、物凄い勢いで萌え出したのです! 東の国の人々が叫びました。“見ろ! ハゲタカが火を盗んだぞ!” そして、彼らはそれを取り戻し、もとあった火のところに戻したのです。

おおっ、哀れなハゲタカ! 彼の頭は、このとき以来、毛が二度と生えてこないのです。今、ハゲタカが、赤く、そして、火ぶくれのように見えるのはそのためなんです。

会議では、今度は状況を調査するためにカラスを送ることにしました。というのは、カラスがとても賢かったからです。カラスはその当時は、純白の色をして、そして、鳥達仲間のなかでもとりわけ甘い歌声で鳴いていた鳥でした。しかし、どの火が盗んでいくのに完璧な火

なのか伺いながらあまりにも長くその火の上にいましたので、彼のはねは真っ黒に焦がされてしまったのでした。そして、彼は、沢山の煙を吸いすぎて、鳴こうとしたら、今度はガラガラ声の“カウ!、カウ!”という鳴き声しか出なくなってしまいました。

会議ははたはた困ってしまいました。“キタオツポサムがしくじり、ハゲタカも駄目だったし、カラスも失敗してしまった。こうなったらだれを送り込めばいいのだろうね?”

小さな婆さん蜘蛛がありったけの声を張り上げました。“私にやらせて。お願いだから!” 会議のメンバーは婆さん蜘蛛では到底うまくゆく可能性はないと思ったのだけど、今度は、彼女を行かせることに賛成しました。その当時、婆さん蜘蛛は、今のような格好をしていました。彼女はちょっとばかり腹が出ていて、そこから二対の足がでていて、これで、逆さにつる下がることができたのです。彼女はその素晴らしい足を使って、彼女が見つけた粘土のある流れのところまで歩き続けてゆきました。そして、その足を上手に勝って彼女は小さな粘土の入れ物をと蓋の隅のところに空気を取り入れるための小さな穴をつけて、ぴったりと合わさる蓋を作りました。そして、彼女はその入れ物を自分の背中に背負い、道中ずっと巣糸を張りながら東の国までやってきて、そして、火のところまで、忍び足でやって来ました。彼女はとても小さな体をしていましたから、東の国の人たちは彼女にちっとも注意を払いませんでした。そこで、彼女は小さな火の種を取り出し、それを入れ物の中にいれ、しっかりと蓋をしました。こうして彼女はまた、忍び足で、巣糸を伝わってもと来た道を人々のいるところまで戻って来ました。はじめ、彼らは火がどこにも見えませんでしたので、“婆さん蜘蛛もやっぱり駄目だったのか。”と言いました。

“何言ってるんだい。冗談じゃないよ。”と彼女が言いました。“私はちゃんと火を持ってきたのさ! と、彼女は自分の背中に背負っていた容器を下ろし、そして、蓋をとると、火は友達を得たかのように空気を吸って炎を上げだしたのです。そこにいたすべての鳥人間、動物人間は、今度は、誰がこれから素晴らしいぬくもりを取り出すのか話し合いを始めました。熊が言いました。”私がやってやるよ!“ しかし、かれは、それで足の先を焼けどしてしまいました。キタオツポサムと同じ様なことになってしまい、そのため、火は動物達のためのものではないということになりました。

鳥人間もハゲタカやカラスが、自分たちが怪我をし、まだそれから治っていませんでしたので、その役割をしり込みしたのです。虫たちも火は素晴らしいと思いましたが、でも、やはり彼らも火から遠ざかっているほうがいいという結論になりました。

と、その時、“もし、婆さん蜘蛛が助けてくれるなら、我々がそれを何とかしましょう。”という、小さな声がしました。動物達や、鳥達の誰もが、あまり良く知らなかったおどおどした人間がその役目をかって出たのです！

そこで、婆さん蜘蛛が炎にどうやって火を絶やさないように木をくべてゆけばよいのか、石で囲ってどうやって火が散らばり、自分たちを傷ついたり、小屋を燃やさないように、安全に取り扱うことができるのかを人人間に教えました。彼女がそこにいる間に、人人間に粘土と火を使ってどうやって土器を作るのかも教えました。そして、婆さん蜘蛛が得意としていた布の作り方、糸の紡ぎ方なども教えてあげました。

Choctaw の人々は、思い出すのです。彼らは、彼らの家を飾るのにとても素敵でデザインを使います。それは、二対の足を上にあげ、そして、もう二対を下にし、背中には火のシンボルをもった婆さん蜘蛛の絵です。ですから、彼らの子供たちも、火を運び屋！ ばあさん蜘蛛の名誉を決して忘れることがないのです。

キタオッポサムやハゲワシ、そして、カラスの姿を、そして、なんと言っても蜘蛛の形をこれほどまでに見事に説明している伝説は、とても愉快ですね。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

121 この世の始まりのところにいた老人の話

Crow

Native American Indian Lore

Old Man at the Beginning

この話は、モンタナ、ワイオミング辺りにすんでいるクロー族に伝わる話です。

この世の中が始まったころ、そこには水以外のものは何もありませんでした。まわりは真っ暗闇で、誰もその世界で水を見た人はいませんでした。そこで、クロー族の中の 1 人の老人がこの世の中にやってきて、そして、彼は、辺りを組まなく見渡し、そして、こう言ったのです。“この世界には、水以外のものないのかな?”

すると、少し離れたところで、二羽の可愛いアヒルが泳いでいるのを見つけました。アヒルたちは赤い目をしていました。老人は彼らを自分のところに来るようによびました。彼らが水の中を泳ぎながらやって来ました。

老人が彼らに言いました。“この世の中には水以外のものは何もないのかねえー?”

すると、年長のアヒルが応えました。“僕たちは、この世の中で水以外のものをこれまで見たことはありません。でも、僕たちは、この水の下になにかがあるかもしれないと思っています。それがなんとなく分るんです。”

“そこの若い方のアヒル君よ、君、潜ってみてくれ。”と老人がいうと、その若い小さなアヒルは直ぐに、底にあるものを探しに水に深く

潜ってゆきました。彼は、随分と長いこと水のなかにもぐっていらしたので、老人が、“お一つ。彼は溺れたんではないかと心配だね。”と言いました。

“とんでもありませんですよ。”と歳とったアヒルが言いました。“僕たちは、一息すれば随分と長いこと水に潜っていられるんです。彼はきっとそのうち、浮かび上がってきますよ”。と、暫くして若いアヒルがなにか口にくわえて水面に顔を出しました。それは、なにかの根っこでした。

“もし、そこに根っこがあるなら” “それなら、そこには土もあるはずだ。兄さんアヒルよ。今度はお前が潜って言って、なにか土らしきものがあるかどうか見てきてくれ。”

そして、兄さんアヒルのほうが今度はずっとずっと長い間潜ってゆきました。彼が水面に上がってくると、彼はくちばしに土の塊を持っていました。

“それぞれ、それこそ、私が探していたもんなんだよ、”と老人が言いました。彼は、根っこをとって、その土の塊のなかに植えました。そして、それに三度ほど息を吹きかけたのです。フーッと一度、二度、そして、もう一度土の塊を吹いたのです。するとどうでしょう。土の塊がだんだん大きくなってゆき、この世界に一杯になり、水をどこかに押しやってしまいました。その塊は、偉大な大陸ができるまで成長してゆきました。そして、そこには沢山の植物が芽を萐き、動物達が住むようになったのです。

水の中を泳ぎ、陸地で生活し、そして、空を飛んでいるアヒルが大地をもってきてくれたのです。そして、老人がクロー族の我々のためにこの世界を創造してくれたのです。

なるほど、水の中、陸地、そして、空を飛べるアヒルは偉大なる神の使いなのかもしれませんね。こんな風にしてアヒルを大事にするインディアンの心に共感を覚えますが・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

122 バッファローとの競争

Cheyenne

Native American Indian Lore

Race with Buffalo

この話は大平原に住むシャイアン族に伝わる話です。

その昔、ありとあらゆる動物達が平和に暮している時代がありました。誰も他の動物を食うというようなことがなかった時代です。そして、その当時は自分たちの顔を彩ったりするようなことはありませんでしたから、すべての動物は同じ色をしていたのです。

バッファローは中でも動物達の中では最も大きくて、しかも、強かったのですが、いつもお腹をすかしていました。彼は、すべての動物達のなかの酋長になりたかったのです。彼は、なんと他の動物の新鮮な肉を食べて、その動物の力を吸収しようと考えました。すべての動物を食べる肉食動物になりたかったのです。

人類は、彼らもまた自分たちこそ動物たちの酋長になるべきだと口にしていました。そして、やはり他の動物達の新鮮な肉を食べ、その力を取り込もうと考え、他の動物達を食べる肉食の動物になるのを望んでいました。

そこで、バッファローが人間に競争を挑むことになり、この競争に勝ったものがすべての動物達の酋長になることにしたのです。人間族が自分たちは確かにその挑戦を受けることにするが、でも、バッファローは四足なのに、人間は足が二本しかない、だから、自分たちのところにいるほかの動物を代わりに競争させる権利があるはずだと主張しました。バッファローは、もっともだとこれを承諾したのです。

そこで人間族は、その競争に自分たちの代表として鳥族を選びました。彼らを選んだのは、ハチドリ、ひばり、鷹、そして、マグピーでした。他の動物達、そして、鳥達もまた、この競争に参加することを求めました。というのも、誰しも、自分たちもひょっとしたらすべての動物達を支配する酋長になれるかもしれないと思ったからです。動物達は誰もがペンキで自分の顔に、自分たちの思い思いの精神的な思いに従って色塗りをしました。

スカンクは、自分の体に白の縞模様をつけ、その競争のために自分のシンボルとしたのです。アンテロープも、やはり競争のために土色の塗装をしました。アライグマは自分の目の周り、尻尾に黒い輪を描きました。コマツグミは赤い胸あてを使って茶色に自分を塗りました。

そして、競争はバッファローの谷と呼ばれる場所のブラックヒルズの端で行われることになりました。競争に参加するものはスタートラインの印になっている木の枝のところから出発し、そして、折り返しの棒の立っているところまで行き、またもとのスタートラインまで戻ってくるという競争でした。動物達の中には、鳥族がいましたが、彼らは人間達のために羽根を使って競争しようとして参加したものです。それに、すんなりと足の伸びたバッファロー、彼らはバッファローの中でもとりわけ早く走ることができたのですが、スレンダーバッファローが参加していました。

いよいよ始まりの掛け声がなされて、動物達、鳥達全部が一斉に競争をしだしました。始めは、スレンダーバッファローの前にハチドリがいて、レースを引っ張りましたが、しかし、彼のはねは、あまり大きくなかったのも、直ぐに後ろに下がってしまいました。動物達が折り返し地点の近くまで差し掛かると、こんどは、スレンダーバッファローが先頭に立ちました。走行しているうちに、スレンダーバッファローの直ぐわきにマキバドリが追いつき、折り返し地点まで暫くの間、一緒に走っていました。スレンダーバッファローが棒の回りを、雷のなるような物凄いひずめの音をたてまわると、マキバドリはたまらず、追い出されてとおくを回らなくてなりませんでした。

先頭を走っていた動物達が、まだ、折り返し地点のほうに向っているほかの競争相手とすれ違ってゆきました。マキバドリは、後ろにさ

がり、自分の脇を追い抜いてゆくタカを激励しました。タカがスレンダーバッファローに追いつきました。そして、それを追い抜くかに見えたのです。バッファローの心臓がバクバクし、足はもう疲れきっていたのです。しかし、タカの羽のほうもまたかなり疲れている様子で、結局、彼も追い抜くことはできませんでした。

こうして、スレンダーバッファローは、勝者としてゴールインをする直前まで差し迫って来ました。バッファロー族のものが、すべての動物達を食べる権威者になるかに思われました！

ところが、その時、バッファローの直ぐあとに、力強く羽ばたきをして、カササギが迫って来たのです。彼女は、スタートは決して上手ではなかったのですが、彼女の羽ばたきは、力強く、確実なものでした。とにかく心臓が強かったのです。ですから彼女の眼差しはしっかりとゴールラインを見据えていました。彼女は決して後ろを振り返るようなことはしませんでした。彼女の羽は広くそして、その羽ばたきの都度前に前にと突き進んでいったのでした。たちまち、すべての動物達が彼女のあとになってしまいました。スレンダーバッファローもそのカササギを振り返り意識していましたが、しかし、カササギは決してそのスタートラインの目印から目を離しませんでした。

羽ばたきをするごと、彼女はスレンダーバッファローから口ばし一つ離れていないところまで追いついてきました。そして、スタートラインのところには、それこそ、沢山の動物達がレースの終りを見ようと集まってきていました。アライグマ、彼は、レースが始まると直ぐに脱落したのですが、彼がスタートラインのところに戻ってきていました。このとき、彼は、スタートの目印となっている杭の間に立って、彼の小さな手をゴールを過ぎ去るものがその手に触るように差し出していました。彼は、先頭に来るものが誰であろうと、その勝者にさわって、そして、優勝者のほうによっていこうと思っていました。

スレンダーバッファローがだんだんゴールに近づいて来ました。そして、動物の中の誰かが、アライグマは踏み潰されてしまうのでは心配していました。カササギがだんだん、大地すれすれに飛んで来ました。そうすれば、彼女がゴールを過ぎ去るときにアライグマの小さな手にさーッと触ることができたからです。アライグマはじっと動かずに、その競り合っている2人をしっかりと見つめていました。カササ

ギのほう少しばかり先にでていたような気がしました。スレンダーバッファローは、走り抜けるときに自分の大きな鼻でもって、アライグマの手に触ろうと、その鼻を前に突き出していました。

カササギの羽の先がアライグマの小さな手にされました。そして、彼は彼女のほうに走りよると、その瞬間、僅かに送れてバッファローがけたたましい音をたてて通りぬけました。すると、彼は、猛烈な埃の中に見えなくなってしまったのです。動物達はみんな、息を飲み込んで埃が落ち着くのを待っていました。そして、そこには、アライグマがかれの小さな手をカササギが通ったあとのほうに掲げて立っていたのです。

こうして、人間族がこのレースに勝ったのです！

競争に敗れたバッファローは、大草原を彷徨うことになりました。そして、人々は偉大なる狩人となり、あらゆる動物達の頂点に立つようになったのです。

力があり、生真面目なバッファローですが、人間の知恵に負けてしまったという話です。カササギが人間の代わりにこのレースに出たというのは、その裏になにか言い伝えがあるような気がしました。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

123 熊たちの小屋

Kiowa

Native American Indian Lore

Bears' Lodge

この話はワイオミングからサウスダコタにかけて居住している **Kiowa** 族、そして、多くのインディアンの人々の間に伝わっている話です。

ずっと昔のある日のこと、**Kiowa** 族のある移動集団が大草原を横切り、川の辺でキャンプをしていました。その近くには沢山の熊の部族が住んでおり、彼らはその **Kiowa** の人々の匂いに気づいたのです。その熊部族のものたちは、とても腹が空いていたものですから、部族戦闘員の中のあるものが **Kiowa** の人々を生け捕りにしようと出かけていったのです。

一方、**Kiowa** のキャンプでは、七人の若い娘さんが、ベリーを摘みに、川を遡ってキャンプからはかなり離れたところに出かけていきました。これを見つけた熊たちがうなりをあげて襲い掛かったのです。娘達は、一目散に駆け出し、自分たちが大きな灰色の岩のところに辿りつくまで、その大きく広がった草原を横切り、走り抜けてゆきました。彼女たちはその岩山に登って逃げたのですが、ところが熊たちもやっぱりその岩に登っていったのです。

娘達は、熊族から何とか自分たちを守って欲しいと、岩にお祈りの歌を唄い始めました。誰も、それまで岩を崇めるようなことはしなかったのですが、でも、岩は彼女たちを守ろうと決心しました。その岩はそこに何世紀にもわたってじっとしていたのですが、それが、天にも届くほどに立ち上がりました。と、娘達は岩が立ち上がるに従い、どんどん高く高くなっていったのです。すると、今度は熊族の戦士たちが、熊の神に祈り始めました。そして、熊たちは岩がのぼっていくのとおなじようにどんどん背が伸びていったのです。

そして、熊たちは岩がますます高くそびえるほどになっていくと、その岩に何とか登ろう、登ろうとしたのです。でも、岩が彼らの腕の届く高さを越えて大きくなっていくと、彼らの引っ掻いた爪あとがその岩肌の表面に、ただ、何千本という形で残っているだけでした。その数千本という引っ掻きあとにより、岩のかけらが剥ぎ取られ、その岩の麓にある瓦礫に落ちてゆきました。岩は割れ、そして、熊がその岩の登ろうともがいているとそこに傷跡がのこったのです。

そして、とうとう、熊族は、彼女たちを追いかけてまわるのを止め、自分たちの家のほうに戻っていきました。彼らは、ユックリともとの自分たちの下の姿に戻ってゆきました。その大きな熊がだんだん小さくなり大草原に戻ってきて、彼らは、**Kiowa** 族が彼を見ると、キャンプを壊したのです。彼らは恐怖から逃れました。そして、塔のようになって立っているあの岩山のほうを振り返りながら、彼らは、それがこれらの巨大な熊族たちの小屋に違いないと思ったのです。今日、何にも人たちが、”Today,”と、あるいは、“熊族の小屋”と呼んでいるのです。

Kiowa の少女達はなにか恐ろしいことがあると、直ぐに岩の上に上ります。そして、彼女たちは自分たちの部族のものがキャンプを壊して、それを そこに残して去ってゆくを見ているのです。少女達は、みんな熊族のものに食べられてしまったと思いながら。

少女達は、このときには星に向って祈りの歌を唄います。星達も彼女たちの歌を聞いてとても幸せだったのです。そして、この下界に下りてきて、少女達の中から七人だけをつれて天に戻りました。これが、七人の姉妹といわれている星です。そして、彼女たちは毎晩、熊族の小屋のそばを通っていき、その岩の精に感謝の気持ちを込めて微笑んで過ぎさって行くのです。

北斗七星にまつわるはなし。本当にうまくできていると感心しているのは私だけでしょうか。また、なぜ、この北斗七星が熊族の星と関係をしているのかなど、本当に興味は尽きません。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

124 4 人の兄弟の話

この話は、別名 INYANHOKSILA (石の少年) という名前でもよばれています。

スー族

Native American Indian Lore

あるところに仲間の部族からはなれて、孤独に暮している親のない4人の少年がひっそりと暮していました。彼らは、確かにただの柳と枯れ草と、カバノキの木の皮、そして、レンガの土だけからできた家でしたが、それでもとても快適な小屋を建てました。自分たちの小屋が出来上がると、一番上に兄さんは、4人で力をあわせてやらなければならない仕事とは別のことに夢中になりました。彼と、二番目、三番目の兄さん達は、みんなで狩に出かけることにし、一番下の弟だけが残って家の仕事をするようになりました。食事のために料理をしたり、いつも、沢山の薪を用意していなくてはなりませんでした。

彼の兄さん達が、毎日朝早くから狩に出かけ、そして、決まって、夕方、暗くなるまで戻ってきませんでしたので、小さな やっこさんはいつも、ちょっとした小高い丘に行って、自分たちに冬になって使う乾いた小枝を長い時間かけて集めなければなりませんでした。

でも、こうして、4人の兄弟は長いこと幸せに暮していたのです。ところがある日のこと、そとで集めてきた薪を積み上げているときに、少年は、木の葉の間で、さらさらというかすかな音を聞き、あたりを見渡すと、そこの桜の木の森の中に若い娘さんが、彼のほうに向かって微笑みながら、立っているのを見つけました。

“あなたは、誰?、どこからやって来たの?” と驚いた少年が尋ねました。“私は、親のない娘です。そして、どこにも親戚がいないの。ずっと西の部落からきたんですの。そこで私はうさぎさんから、ここに

やっぱり親のいない4人の兄弟が住んでいると聞きました。そして、4人の兄弟の一番下の弟さんが、自分たち兄弟のために家を守っているんだと。だから、私は、ここに来ようと思ったの。私は、とっても貧乏だし、また、身寄りもないし、家もないの。だから、私が、あなたたちの家を守り、あなたたちの妹として受け入れてくれるかどうかお願いにきたの。”

彼女は、あまりにもみじめで、哀れに見えたので、少年は、“自分たちの兄がどんなことをいようと、このかわいそうな少女を自分の家に入れてあげよう”と内心ここに決めました。そして、彼女に向って、“こっちにおいで。Tanke (妹)。さあ、自分の家に入るがいいよ；兄さん達はお前さんが僕たちの妹ができたときと喜ぶに違いがないから。”

こうして、小屋に戻ると、少女は、忙しく働きまわり、暖かい夕飯を作り上げました。そして、兄さん達が戻ってくると、彼らは少女が自分たちの小屋の囲炉裏のところに座っているのを見てびっくり仰天。彼らが入ってくると、一番下の弟が、起き上がって外に出てゆきました。そして、直ぐに一番上に兄さんが俺のあとについて外に出てゆきました。“あの少女は一体誰なんだ、そして、どこから来たのさ?”。彼は弟に尋ねました。すると、弟はこの一部始終を話して聞かせました。これを聞いて、兄さんは、その貧乏な生じにととてもすまないと思い、小屋に戻って行って少女に、：“妹よ、お前さんも、親がいないのかい。僕たちと同じじゃないか；お前さんは、どこにも親戚がないし、家もないんだね。僕たちがお前さんに兄になろう、そして、この小屋はたいしたものじゃないけど、自分の家と思えばいいよ。今から、僕たちを兄さんと呼んでくれ、そして、お前は、僕らの妹だ。”

“うわあー、素敵、いまから私を妹と呼んでくれるんですか、私たちみんな同じお父さんとお母さんの子供のように、仲間になるわ。”と少女が言いました。そして、彼女のその言葉は真実のように、彼女は、なにをするにも彼女の兄弟と同じ様にし、そして、いつもいえを丹念に整理し、ですから、兄弟は、少女が彼らのみずぼらしい小屋に来てくれたことをとても喜んでいました。彼女は、いつもそれぞれの兄弟のベッドの頭のところに、着替えの毛皮の服と、二足のモカシンをくくりつけておきました。バッファローと、鹿と、アンテロープ、熊、狼、ワイルドキャット、ヤマネコ、それに、ビーバーの毛皮など、彼

女が沢山、なめし、それらを小屋のある隅の所にきちんと積み重ねておいてありました。

インディアン達は、大平原を横切り、旅をする間に、とても疲れると、彼らは、塗り物が疲れを癒し、足に休息を与えてくれるものと心底信じて、自分たちの足に塗り物をしたのでした。

そして、長いたびから戻ってくると、彼らが休息のために横になるその時には、彼女は、自分の持っている塗料を取り出し、それを鹿からとった脂肪分と混ぜ、そして、兄弟たちの足に、膝のところまで塗りこんであげるのです。彼女の優しい手の感触と、鹿の脂肪分の柔らかさで、それをぬって上げると彼らはたちまち深く、ぐっすりと寝込んでしまうのです。

彼女の仕事をするなかで、そうした、彼女の気配りがたちまち、兄弟の気持ちを捉え、実の兄弟以上の、孤児だった少女は、義理の兄弟として迎え入れられたのです。朝になって、兄弟たちが目を覚ますと、彼女はいつも彼らのしなやかな長い黒髪を梳かし、頭の後ろのところで丸めあげ、その周りを煌く朱色の塗料で輪を描くように塗り上げておいてあげました。

兄弟たちが狩に行き、沢山の獲物を持ち帰ってくると、その時には彼女は、兄弟たちのところに駆け寄り、餌をかぎまわっている野良犬やコヨーテたちには取られないよう、高くかざしながら、その獲物を担いできたのです。狩人のかれらは、自分の弓矢をくくりつけるための棒を持っていました。(誇りある狩人は決して、自分たちの矢を決して、直接土の上に置くようなことはしなかったのです。) 彼らは、“まあ、この一週間の終りまで、僕たちには十分な食料が手元にあるんだ。だから、私は、これから僕らの西のほうにある村に行こうと思っているんだ。だから、君らは、妹を助けてここにいるんだ。そして、自分たちでできるだけ木を集めていなさい。そうしたら、私は四日立てば戻ってくるから。そして、帰ってきたらまた狩をして、一年中足りるだけの狩を始めよう。”と、ある日突然、一番上の兄さんが話し出すまではとても幸せでした。

彼は次の日の朝、旅立ってゆき、彼が丘の長い連なりの上にあるいている間、最後まで彼の姿を見ていました。四日が過ぎ去ってゆきました。しかし、その一番上の兄さんからの連絡は何もありませんでした。

“お兄さんの身の上になにか起こったんじゃないのかしら。” 妹が言いました。“僕も、そう思っているんだ。” と二番目の兄が言いました。“兄さんを探しに行かなくては；なにか事故があり、助けを求めているんだよ。” 二番目の兄さんは、彼が向った後を辿ってゆきました。そして、ずっと長い丘の頂上のところまできて、そこに座ってずっと見渡すと、綺麗な川が曲がりくねって流れている谷が広がっていました。そして、何マイルも続いているその谷は、彼が座っていた丘とは別の丘の連なりの麓まで広がっていました。

これまでは違った風景を注意深く見ながら、彼はやはり立ち上がり、そして、坂を下ってゆくと、直ぐに丘の上から眺めた川のところまでやって来ました。その川は彼が丘の上から眺めた光景と全く違っていることに気づき、彼はびっくりしてしまいました。丘の上からは、そこは静かで、危険のない、穏やかな流れのように見えました。ところが今、彼の目の前にあるのは、垂直に削られてがけっぷちのなか、泥水で、荒れ狂い、飛沫を立てながら流れる川でした。彼は、その流の銃流に行くのか、下流に行くのがよいのか暫く考えで立ち止まっていました。そして、ちょっと見上げたら、小さな丘からユックリとかすかな煙が立ちのぼっていくのに気がつき、彼は下流に下っていくことを決心しました。彼は注意深く、その場所に近づいてゆきました。すると、そこには、その流の反対側の崖の土手に入っていくところに扉があることに気づきました。一体こんなところに住んでいるのはどんな人なんだろうと考えながら、その扉を見ていると、突然、その扉が開き、そこから、見るからに年をとった女の人が出てきて、辺りを見渡しました。そして、直ぐに若い男が居るのを目ざとく見つけ、彼に向かって、；“おお、可愛いちびさんよ。一体どこからお前さんは来たんだい、これからどこに行こうとしているんだい？” 若い男が答えました。“私はあの山の東のほうからやってきたんです。私の一番上に兄さんを探しているんだ。五日前のことだったんだが、彼は、出て行ったりきり、まだ帰ってこないんだ。”

“確かに、お前さんの兄さんはここに来たよ。そして、私と一緒に有ご飯を食べたのさ。そのあと、彼は、西に向かって旅立っていったの

さ。”と、いかにもそんなふうに見える歳寄りの魔法使いが言いました。“なあ、ちびさんよ。あそこの流のところにかかっている小さな丸太の橋を渡ってきて、私と一緒に有ご飯をお食べよ。今、丁度、料理をしたところなのさ。そして、だれか、お腹をすかした旅人がその辺りにいないかどうか、探しに出て来たところなんだよ。”若い男は、ちょっとばかり上流に向って歩いてゆくと、いかにも流れを渡るように掛けられていた小さな対になった丸太の橋を見つけました。そして彼は、それを渡りその老婆の洞穴の小屋のほうに下って行きました。“さあ、中に入っておいでな。そして、一緒に食事をしよう。お前さんはお腹を空かしているんだろ。”

男は、そこに腰掛け、そして、実に温かいもてなしの食事をしました。そして、食事が終わると彼は立ち上がり；“お婆さん、食事と温かいもてなしに感謝しています。私はお婆さんがこんなところで1人であるなんて淋しいに違いないから、ここに暫く一緒に居たいんだけど、でも、私は、どうしても私の兄さんを見つけなくてはならないから、行かなくっちゃならないんです。今度、兄さんと一緒に戻ってくるときに、ここに少しの間、いることにしようとおもんだけど。”

“分った、分った。でも、行く前に、お前さんにちょっとだけしてもらいたいことがあるんだがね。お前の兄さんも行く前にそうしてくれたのさ。そして、私を癒してくれたんだよ。でも、また、同じ様なことになったんだ。わたしゃ、背骨の左側にとてもひどい苦痛があるんだよ。肩甲骨のところから私の背骨に繋がる肋骨にかけて全体にさ。そして、その痛みから解放されるのは、その側に沿って蹴飛ばしてもらおうことなんだよ。”（彼女は魔法使いでした。そして、自分のまっとうしている毛皮の下には、長い鋭い鉄でできたやりを隠してもっていました。それを隠してしたので、最後に彼女を蹴飛ばしたときに、その足が槍に突き刺さり、彼らはたちまち気絶して、死んだも同然になってしまうのです。）

“もし、私がいかにあなたを強くうたなくてもいいんなら、喜んでそうしてあげるよ。”と、彼女を傷つけるようなことは少しも考えずに、若者はいいました。

“だめだめ。ちびさんよ。私を傷つけるなんてことを心配しなさんな；お前さんがきつく蹴飛ばしてくれればくれるほど、私はその痛みから

長く解放されるんだから。”彼女は床に横になり、そして、彼が彼女が苦痛があると言っていた左側をうまく蹴飛ばすことができるように、右側が下にして寝転がりました。

彼は最初の蹴飛ばしをしようと動いたときに、床をちらって見渡し、反対側の壁に横たわっている毛皮に包まった長いものに気づきました。彼はそれが変なものだなと思い、そこに立ち止まり、なにかを観察したのですが、しかし、丁度その時、その魔法の婆さんが、もう、痛みを耐えかねるようになめき出したのです。“ちびさん。早くしておくれよ。蹴飛ばしてくれなきゃ、わたしや、もう痛くて、痛くて死にそうなんだよ。”“彼女のほうにいても、そのあとでも、それがなにかわかるだろう。”と彼は考え、蹴飛ばし始めました。そして、蹴飛ばすたびに、彼女は喚くだろうと思いました：“もっと強く蹴っておくれよ。”彼は、その痛みの最後のところにくるまでに、七度ほど蹴らなければなりませんでした。そして、これまでというほど強く蹴りましたが、彼が最後の蹴りに来たとき、彼は、その槍を打ち、それを自分の足元まで引き出すと、彼は、死んだかのようにその場に倒れてしまいました。そして、魔法使いは彼を毛布に包んで、その部屋の反対側にいた彼の兄の横に置いたのです。

二番目の兄さんが戻ってこなかったのも、今度は三番目の兄さんが2人を探しに出かけました。彼は、二人の兄さんにしたのと同じように彼を扱おうとした魔法使いのお婆さんに会ったときに、彼は二番目の兄さんによいにはうまく対応することができませんでした。

“わっはっ!、はっ!”と彼女は、三番目の兄を捕まえたときに、高笑いをしました。“残りは、あと1人だな。よし、あと1人捕まえたら、あいつらをここに一年置いて、そのあと、彼らをみんな馬に変えてしまおう。そして、彼らの妹のところに返してやることにしよう。何しろ、わたしや、あの娘が憎いのさ。なにしろ、私が家を建て、きりもみし、その一番年取った兄と結婚しようとしたのに、彼女は私よりも先に彼らの兄妹になったんだから。だから、わたしや今、彼女に仕返しをしてやるんだ。来年にはきっと彼女は馬にまたがり、何も知らずに自分たちの兄を乗り回すのさ。”

三番目の兄も帰ってこなかったのも、妹は悲しく泣き、最後に弟にはもう探しに行かないようにとせがみました。しかし、彼は行かない

わけにはいけませんでした。彼は、結局出かけていくことにし、3人の兄がしたのと同じことをしました。

いまや、悲しき妹は気も狂わんばかりになってしまいました。日が明けても暮れても、何とか彼らのなにかうわさがないか、なにか後に残ったものかないかと祈る思いで彼女は丘の上に上り、森のなかを彷徨っていました。彼女の彷徨いは、何の役にも立ちませんでした。鷹も彼らがああ小さな川を渡っていったあと、彼の何を何もみることにはなかったのです。狼やコヨーテが彼女に、彼らはあの大平原を出て行ったあと、兄弟のことは何も知らないと言いました。そんなわけで、とうとう妹は、彼らが死んだものと諦めてしまったのです。

ある日のこと、彼らの小屋のすぐ近くを流れている小川のそばで彼女がたたずんで、水に小石を投げ込み、自分がどうしようかと悩んでいるときのことで、彼女がたまたま真っ白な純粋で、丸い形をして、とてもすべすべした小さな水晶を拾って、それを暫く眺めたあと、川の中に投げ入れました。するとその水晶が水面を打つか否かの間に、それがどんどん大きくなっていくではありませんか。彼女はそれをもう一度拾い上げ、また、前と同じ様にそれを川に投げ込みました。今度は、それは、まるで赤ん坊のような形になりました。また、彼女はそれを手にして、三度目に川に投げると、今度は、その赤ん坊に命が吹き込まれ、なんと、泣き出したのではありませんか：“イナ、イナ(お母さん、お母さん)”と。彼女はその赤ん坊を抱き上げ、家に帰り、スープを飲ませてあげました。そして、なんとその赤ん坊は、不思議にもどんどん成長して、直ぐにいい少年になりました。そして、三ヶ月後には、彼はもう立派ながっちりとした若者になったのです。ある日のこと、彼が言いました：“お母さん、どうしてここで1人ですんでいるの？ ここにある素敵な服やモカシンは一体誰のものなんですか？”と聞きました。そこで、彼女はいなくなってしまったあの兄弟のことを彼に話してあげました。“ナーンだ。それなら、僕、彼らの居るところを知っているよ。直ぐに、私のために沢山の矢を作ってください。直ぐにでも僕の叔父さんたちを探しに行くから。”彼女は、かれをなんとか行かないように説得しました。が、彼の決心は固く、こう言いました：“私のお父さんが、お母さんのために叔父さんたちを探すようにここに送ってくれたんです。だから、何も恐がるものはないんで

す。私は石のように固いく、だから、私には、●石の少年●と名前がついているんですもの。”

彼がもう行こうと決意していることが分り、お母さんは、彼のために矢で一杯になった矢筒を用意してあげました。そして、彼がいくのを見送ったのです。彼が、あの老婆の魔法使いの小屋まで来ると、彼女がそこにいたものですから、彼は、扉を開けて中に入ってゆきました。小屋は、まさに今夕餉の支度の真っ最中でした。

“ おや、まあ。なんてことだね、この可愛いちびさんよ。どうしてお前さんはこの夕餉に丁度いいところに来ただね。さあ、こちらに来てすわんなさいよ。まあ、旅を続ける前にここで食事をしていくがいいさ。” 石の少年はそこに座り、そしてこの老婆の魔法使いと一緒に食事をしました。彼女がまじまじと彼を見詰めましたが、でも彼女がスープを飲もうとしたそのときに、彼はとっさに小屋の中をグルッと見渡し、そして、ついに部屋の反対側の壁のところに四つの毛布の包みを見つけました。直ぐにそれが自分のおじさんたちのものであるとぴんときたのです。彼は食事が終わると自分の小さなパイプを取り出し、そして、それに “ kini-kinic ” を一杯つめ、この老婆がどんな風にして彼の正直もののおじさんたちを馬鹿にしたのか考えながら、タバコを吹かし始めたのです。でも、それがどうしてなのか彼には結局わからず、彼がタバコをすい終わり、もう出かけるというような振りをして立ち上がったその時、その老婆は、彼が去ろうとしているのに気づいて、こう言いました：“ちびさんよ。私の背中の中を蹴飛ばしてくれんかねね。わたしや、もう痛くて、痛くて死ぬような思いだよ。もし、お前さんが私をうまいこと、強く蹴ってくれれば、私は良くなるんだがね。” “ 分ったよ老婆さん。” と少年がいました。老婆は床に寝転び、そして、少年蹴り始めました。最初の蹴飛ばしは、かろうじて彼女に当る程度のものでした。“ もっと、思い切って蹴っておくれよ。大丈夫、私を傷つけるなんて、そんな心配はしなくていいんだから。” それを聞いて、石の少年は、二本の肋骨を折ってしまいました。彼女は、大声で喚き始め、そして、彼にやめるようにいいました。しかし彼は彼女の両側の肋骨が折れて外れてしまうまで蹴り続けました。それから彼は彼女の背中に飛び乗り、とうとうその老婆の魔法使いを殺してしまいました。

彼は外にでて、大きな火を起こし、それで彼女の体を引きずっていき、その火のなかに投げ入れてしまいました。こうして、彼のおじさんたちを馬にしてしまおうとした老婆は死んでしまいました。

次に彼は柳の木を切り、それを円になるように土に突き刺しました。そして、その上の端を一緒にして、小屋の骨組みを作りました。その上にあの老婆の服と、毛布をかぶせ、外から空気が中に入らないように覆ってしまいました。そうしたあと、彼はサルビアの小枝を集め、それで手ごろなベッドを作り、床を覆いました；また、丸い形をした石を集めてきて、それを火で真っ赤に焼きそれを骨組みの中におき、小屋から彼の叔父さんたちを運び出し、それらをそのサルビアでできた柔らかなベッドの上に横たえました。毛布の包みを運んできて、それを柱の岩の周りに毛布から出して並べ、彼は、水の入ったバケツを持ってきて、その熱くなった岩に注ぎました。と、その岩からその骨組のテント小屋一杯に物凄い蒸気が立ち込めました。ちょっとの間、彼が待っていると、なんと、彼はその中のほうからなにやら息遣いのようなものがしているのを耳にしました。こうして、彼は、また別のバケツを持ってきて、また同じ様に繰り返しました。すると、暫くして今度は、中から、なにかがそこで動いているような音が聞こえたのです。彼は、今度もまた別のバケツを持ってきて、それを同じ様に岩にかけました。すると、なかから男の声がするではありませんか。“誰かは分らんが、とにかく、ありがとう。どうか、やけどをしてまた簡単に死んでしまうような運命にはしないでくれないか。”石の少年が言いました。“みんな、命を吹き返しましたか？”“大丈夫だ。”という声がしました。“じゃ、もういいよ。でてきてください。”とその少年が言いました。そして、彼が老婆の服と毛布を取り除いてやると、もうもうと蒸気が立ち上がり、あの長く連なる山々のもっとも高い頂上の回りを取囲んだのでした。というわけで、そこには、煙たつ山脈という名前がつけられたのです。

叔父さんたちは、その少年が誰であるかを知ってとても喜びました。そして、みんな揃って、帰りを待ち焦がれている妹のところに戻ってきたのです。家にたどり着くとすぐに、兄弟たちは冬にそなえて、十分な木々を懸命に集めました。一年のいつでも彼らは狩猟をできましたが、しかし、とても沢山の雪が降り、乾いた薪の殆どは埋もれてしまい、雪の下から、木を掘り出すことはとてもできなかったのです。

ですから、彼らは気候のよい秋を利用して、雪が降り始める前までに、冬を越せるだけの十分な薪を用意したのです。雪が降ったあとに、一組の少年達が、その兄弟たちの小屋の西にある大きな丘を物凄い速さで降りてきました。石の少年は、よくそこに立って彼らを何時間もじっと見ていたのです。一番若い叔父さんが言いました：“お前さんはどうして昇って行って、彼らと一緒ににならないのかね？”すると、少年は、“彼らはたぶん、僕がこわいんだよ。でも、とにかく一度試してみたのがよいかもしれないね。”と言いました。そこで、次の日の朝、彼らが近づいてきたときに、石の少年は丘のほうに向かって走ってゆきました。すると、彼がその丘の麓の近くまでつくと、少年たちは、違った色で色塗りをし、その縁の回りに小さな鈴を幾つもついた大きなソリ、ですから、その鈴が、動くたびにとてもよい音を響かせていたのですが、そのソリに乗っている2人の子供を除いてみんな逃げていってしまいました。石の少年が丘に向かって走っていったとき、二人の少年がそのソリで降りてきて、あたかも、ヒッコリーの弓から放たれたように彼のよこをさっと通り過ぎてゆきました。

彼らは坂の下まで行くと、今度は振り返り、丘のほうに戻ってゆき始めました。それはちょっと厳しい坂でした。ですから、石の少年は、手を貸して彼らのソリを丘の上に引っ張ってあげようと思い、暫く待っていました。小さな二人の少年が彼の助けで上がってきたときに、彼は、直ぐにその2人が双子であることに気がつきました。と言うのも、その少年達は、身にまとしてスカーフの違いでしか御互いに見分けが付かないほど、それは、もう、瓜二つだったからです。1人のほうは赤いスカーフを、そして、もう1人は黒のスカーフを身につけていました。かれは彼らのソリを丘の上に引き揚げようと直ぐに手をかしてあげました。丘の天辺まで行くと、双子の少年は、彼も試しにソリにのるようと、そのソリを差し出しました。

彼は最初は断っていました、が、彼らは彼が戻ってくるまで暫くここで休んで待っているから、どうか試すようにと強く勧めました。ということで、彼はソリにのって、丘を滑り降りて行きましたが、彼だけが、ジグザグなコースを取り、あるいは、他のソリではとてもできそうもない、およそ4フィートほどの高さの土手をジャンプしたりしてゆきました。ソリは非常に丈夫にできていたのですが、しかしながら、彼はそのソリを殆ど壊すほどにしていってしまいました。この素晴らし

いジャンプを見て、そして、ジグザグに滑り降りてゆくコースを見て、双子の兄弟は、まるで狂ったように歓喜し、彼が戻ってきたら自分達も彼と一緒にソリに乗って滑ってみようと思ひに決めました。そこで、彼が滑りおりた最初のところまで戻ってきたとき、2人で、彼に、いまここで彼が見せてくれたあの素晴らしい乗り方を自分たちも一緒に乗せて楽しませてくれるように頼みました。少年は、：“そんなことをしたら君たちのソリを壊してしまうよ。わたしひとりで、もう壊れる寸前にしてしまつたよ。そして、もし僕らがみんなでそれに乗って、同じ様な滑りかたをしたら、君たちはソリなしで家に帰るようになってしまふよ。” といひて断りました。

“ 分つたよ。でも、とにかく滑りおりてゆこうよ。そして、もしソリを壊したとしても、僕らのお父さんがまた別のものを作ってくれるから。” といひことで、ついに彼は承諾をしました。こうして、いよいよスタートをする時になつて、彼は、もしソリがジャンプをしたら真つ直ぐ前を向いていふに言ひました。“絶対下をみてはいけなふよ。もし、下をみると僕らは土手の切れたところを越えて、この谷のそこにあるこぶのところ突っ込んでしまふから。”

彼らは、彼の言ふとおりにするといひて、大分、重量が増したといふことで、いよいよ今度は以前よりも早くすべりでして行きました。それが、凍つた雪の山を越えて猛烈な速さで滑っていったものですから、双子の兄弟は息も殆どつけないくらいになつてしまひました。まるで、矢のよに彼らはジャンプ台に近づいてゆきました。双子の兄弟は、ちよつと緊張してしまひました。“しつかり捉つて。真つ直ぐ前を見ていふんだ。” と石の少年がつぶやきました。後ろで操縦していふ石の少年のあとに双子の1人は、上のほうに座り、ずっと遠くの前のほうを見ていふましたが、しかし、前にすわつていたもう1人は、前かがみになり、谷のほうを覗き込んでいふました。もちろん、後ろにいた石の少年は、その双子の上にかぶさつていふました。そして、それが重かつたので、たちまちのうちに彼らの両方を殺してしまひました。かれらを、ゼリーにしてしまつたのです。

何が起つたのか見ていた他の少年達は、いそいで土手の端まで走つてゆきました。そして、下を見て、双子の兄弟が横になつて死んでおり、石の少年が、双子の少年とほんの少し離れたところで横になつて、無表情にこつこつと叩いていふのに気がつきました。3人とも死

んだと、そして、石の少年は、双子の少年を殺そうと思ってあんなふうに意識的にソリをあやつったのだと思った少年たちは、この報告をしようと村に帰ってゆきました。実は、あの双子の少年はバッファローの酋長の息子たちだったのです。ですから、直ぐに酋長とかれの探索隊が、その少年たちが話したことが事実なのかどうかを確認するために出かけてゆきました。

そして、土手のところにまでやってきて、彼らは双子の少年が死んでいるのを確認しましたが、しかし、あの石の少年は一体どこに言ったのでしょうか？ 彼らは、谷のあちこちを探して回りましたが、彼の居所は全くつかめなかったのです。死んだ双子の少年を丁重に抱き上げ、彼らを家に連れて帰りました。そして、大切な会合が開かれ、バッファロー族の習慣に従い、彼らの亡骸は、遠く離れたところに葬られることになりました。

このことがおきてから二三日後に、おじさんたちが長いたびから戻って来ました。そして、彼らは家の近くまできて、大きなバッファローの群れが自分たちの家の近くに集まっていることに気が着きました。かつて、自分たちの近くにこれほどまでにバッファローが来たことなどありませんでした。ですから、兄弟たちは、どうしてこんなに沢山のバッファローがここに来ているのか不思議に思ったのです。

家に着いてみると、妹が彼らに、彼女の息子が、あの事件のあと彼が戻ってくるまでの出来事全部を話したように、酋長の双子のこどもの身の上におきた事件について話をしました。

“分った。おそらく、わし達が見たバッファローはみんな会議をし、葬儀をするためにここに集まってきているんだ。”と年長の兄が言いました。“しかし、それにしても、わし達の甥っ子はどこにいるんだね？(石の少年)と、彼は妹に尋ねました。“彼は、それは沢山のバッファローたちがそのうちやってくるだろう、そしたら彼は、もし可能なら、彼らの目的がなんなのか探ってみようとしていた。”と言いました。“よし、分った。なら彼が戻ってくるまで待つことにしよう。”

彼のおじさんたちが戻ってくる前に、あの日の朝、石の少年が旅に出たとき、彼は、自分たちの家の近くに、なぜ、あれだけ沢山のバッファローが集まるということについて確信をしていたのです。彼は、

若いバッファローのいくつかの組に近づいてゆきましたが、しかし、彼が近づいてくるのをみると、バッファローたちは丘の上に逃げ差ってしまったのでした。こうして、彼は、若いバッファローの集団を次から次にと尋ねて歩いたのですが、そうするとたちまち、みんな逃げ去ってしまったのです。そんな状態でしたから、最後に彼らの臆病のひどさに疲れてしまい、家に帰ることにしたのです。そして、彼が自分の家から、半マイルかそこらのところまで来てみて、大きな岩に寄りかかり、1人のヒゲもじゃなバッファローがその岩で、最初は角をそして、それから、他のところをこすりながら、立っているのに気がつきました。彼に近づいてくる途中、少年は、その大きなバッファローが、とても歳寄りで、もう殆ど目が見えなくなり、そして、大きな岩で長い間こすってばかりいるので角はほとんど鋭さがなくなり、もう誰も傷つけたりすることができなくなっていることに気づきました。

“お爺さん、一体ここで何をしているんですか?” と少年が尋ねました。すると、

“わしは、ここで、今度の戦のために角を磨いでいるのさ。” とその大きなバッファローが言いました。

“いったい、それは何の戦なんですか?” とまた、少年が尋ねました。

“なんだ、お前さんは知らないのかね ” と、ほんの近くまで言っても彼が石の少年だとは気づかず、歳寄りのバッファローが言いました。“なに、酋長の双子の息子達が、石の少年にわざと割れた土手から放り出されて殺されてしまったのさ。だから、酋長が自分の部族のものにここに集まるように命令を下したのだよ。だから、みんなが集まったら、石の少年を殺しに行くのさ。彼の母親も、そして、彼の叔父達もみんな一緒に殺してしまうのさ。”

“それは、本当ですか? 一体、何時その戦ははじまるんですか?”

“今から五日のうちに始まろうがね。みんなで、あいつの叔父というところに押し寄せていって、みんなを突き殺してやるのさ。”

“そうなんですか、お爺さん。いろいろなことを教えてもらってありがとう。今度もどってきたら、そのあなたのもう丸くなった角をあまり使い過ぎないように、大事にしたほうがいいと思うよ。” とうとう、

彼は、矢筒のなかから一本の長い矢を取り出し、それを弓の弦に取り付け、弓を半分ほど引きました。年取ったバッファローはなにが起きているのか気づきもせず、半分、誰かが親切に自分の角を磨ぐのを手伝ってくれるのではないかなどと思いながら、そこにじっと立っていました。すると、石の少年が言いました：

“お爺さん、あなたは戦に行くにはもう年をとりすぎていますよ。それに、もしあなたが大きな戦の集団に混じって行ったとしても、どうせ、穴にはまってしまいか、何かに躓いて、倒れて踏み潰され、殺されてしまうかもしれませんよ。そうなるとてもみじめじゃないですか。なら、私が今からあなたにこうしてあげるよ。”と言うと、彼は、弓を鏃のところまで引っ張り、それを放ちました。彼の狙いどおり、矢は、年とったバッファローの前脚の後ろに突き刺さり、それが余りに強く引かれていたものですから、たちまちその大バッファローを突き抜けて、二百フィートも遠く離れたところにある木に突き刺さりました。

その木のところまで歩いてゆき、彼は矢を弾き抜きました。自分の歯で挟んで、その矢を正確に真っ直ぐにし、彼は、それを他の矢と一緒に矢筒に納めました。“お爺さん、あなたは石の少年や彼のおじさんたちを殺すために自分の角を磨いだりする必要はないんですよ。”とつぶやきながら。

彼は家に戻ると、叔父さんたちに、間に溝のある防護策を三つほど作り、その溝は、沢山のバッファローを捕まえて確保しておくために、広くて深いものにするように話しました。“四つ目の防護柵は、自分が作ります。”と彼が言いました。

兄弟たちは朝早く起き、そして、夜遅くまで一生懸命あたら気しました。彼らは、三つの牧場をつくり、そして、小屋のまわりには、やはり三つの溝を掘りました。それだけのものを作り上げるのに三日ほど掛かったけれど、それをやり遂げたのです。石の少年は、彼が言っていた柵をまだ完成するところまで行っていないませんでした。バッファローたちが押しかけてくるまであと二日しか残っていません。でも、その少年は自分が出来上がっていないことをそれほど気にかけている様子はありませんでした。そのかわり、彼は、お母さんに矢の軸を休まず作るようにお願いしていました。そして、彼女ができた軸を持ってくる

や否や彼はそれを鋭く尖らせ、羽をつけ、矢の先を取り付けていました。ですから、彼のおじさんたちが柵を作り、牧場が出来上がるまでに、叔父さんたち1人1人に千本以上の矢を作り上げていたのです。最後の二日間は、彼らは待っていなければなりませんでしたが、その間に叔父さんたちも加わり、さらに数千本の矢を作り上げていました。5日目の前の晩に、彼はおじさんたちに四本の支柱を立てるように言いました。そこから矢を放とうというわけです。

彼らがこうしている間に、石の少年は様子を探りに行き、そして、どんな状況か見て来ました。夜明けに彼が“さあ、最初の戦いを始めるチャンスです；彼らが来るんです。”と言いながら、急いでもどって来ました。“お前さん、まだ自分の柵が出来上がっていないんじゃないかね。”と、すかさず石の少年が言いました：“私は、ころを見計らってそれをつくりますよ；心配いりませんよ、叔父さん。”丘の斜面に、まるで森が火事になり猛烈なけむりが巻き上げるかのように、埃が舞い上がりました。突撃隊のリーダーの姿が直ぐ視界に入りました。そして、木でできた柵を見るや、彼らは大地に響き渡るような物凄いざわめきと唸りを発してやってきました。かんかんに怒ったバッファローが後ろに数千もの仲間を従えて突っ込んできました；前に突進すると、ただ、最初のみぞにはまり込むだけだったのですが。そして後ろから来たバッファローに踏み潰されて死んでしまうだけでした。兄弟たちは、矢を放つのに熟練していました。そして、小さな鏃のついた矢が心臓深く突き刺さる格好の的となって、沢山の優秀な獣がどんどん倒れていったのです。

二番目の柵が、彼らの攻撃を最初るときよりも少し長く立ちはだかりました。が、結局これもつくに破られました。そして、先導するものが、そこを突き抜けましたが、これもまた、二番目のみぞにただはまり込んでゆくだけで、一番目のところだおこったことと同じ様な運命を辿って行きました。兄弟たちは、彼らの甥を必死に見ていました。もう残りの柵は一つ残されているだけです。そして、二番目の溝は、死んだバッファローで埋まり、それが橋のようになっていたのです。牧場の開けたところに彼らの小さな小屋が見えるようになると、以前よりももっともっと激しく最後の柵を攻撃しようと、怒り狂ったバッファローたちが集まっていました。

“叔父さん、こっちですよ。”と石の少年が叫びました。叔父さんたちは彼に従って、その真ん中に進んで少年は、：“私の柵をつくるのを見ていてください。”その言葉に合わせて、彼は、自分の帯からあるところに白い石の結びつけられた矢を取り出し、今度はそれを彼の弓に結びました。そして、それを空中高く射ったのです。すると、やは、真っ直ぐ空をめがけて飛んでゆき、2、3千フィートも飛んでゆくと、突然そこで止まり、今度は向きを変え、昇って言ったときと同じ様な猛烈な勢いでそれが落ちてきたのです。そして、それが大地に突き刺さると、この小屋を取り囲み、みんながその中に入るように、そこに大きな石の壁が立ち上がったのです。それは、まさしくバッファローたちが三番目の柵を突き破り、そして、最後のみぞを埋め尽くし終わる時でした。悲しいかな、先導者達は、その石の壁に突き当たるだけでした。自分たちで傷つき、角を痛め、そして、鼻先をすりつぶしたのですが、しかし、その壁を突破することはできなかったのです。

叔父さんたちと石の少年は、暫くのあいだ、彼らに死の矢の雨を降らせ、大混乱を起こさせました。

バッファローの酋長がこれは、何とかしなければならないと自覚し、戦いを諦めました。そこには、触れ回わっているのか、あるいは、予告をしているのか、こんな歌が流れました。“さあ、引き返すんだ。引き返すんだ。石の少年と彼の叔父達が我々みんなを殺そうとしている。”

こうして、バッファローたちが引き返すと、そこには、死んだもの、傷ついたものが二千以上ものバッファローが野原に残っていました。それらは、毛皮を剥ぎ取られ、そして、石の少年と彼の叔父達の祝宴の料理に使われたのです。彼らはやがて、彼らの部族の酋長となり、彼らの一族の者達が直ぐに彼らと一緒に、石の少年のクリークの土手近くで暮らすようになったのです。

この話が伝わるスー族は、とても勇敢で、弓矢をよく使いこなし、戦いの上手な部族でした。彼らが、自分たちが石の少年の部族の末裔であることにいかに誇りをもっているか、それがよく理解できると思うのですが……。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

125 UNKTOMI (クモ) と二人の亭主をなくした姉妹、そして、赤いプラムの話

Sioux

Native American Indian Lore

大きな森からちょっと離れて所に、二人の亭主をなくした姉妹が、自分たちの小さな赤ん坊と一緒に住んでいました。ある日のこと、彼女達のテントにある一人の訪問者、かれの名前は、Unktomi(蜘蛛という意味なのですが)というのです、がやって来ました。彼は森のなかを彷徨っている間に、赤いとても素敵でプラムの木を見つけたのです。そして、かれは、“このプラムを持って行って、あの二人の亭主のいない女達をからかってやろう” とひそかに考えていました。彼女達がかれに、中に入るように誘うと、彼は、プラムで彼女達を喜ばしたのです。

それをみて、彼女たちが “hi nu, hi nu(これは驚きの叫びです)、あなたは一体どこでそれを手にいれたの?” と騒ぎました。Unktomi が起き上がり、そして、真っ赤になった尖った雲をさして、言いました。“あなたは、あの雲を見たでしょ? 丁度あの下にプラムの一部があるんですよ。一部といっても、物凄く大きいし、それに、真っ赤でとても綺麗なんで、それがあなたの見ている雲に写っているんですよ。”

“なんてことでしょう。じゃ、私たちがそこに言って、いくらかってくるまで、誰か、私たちの赤ん坊の面倒を見てくれる人がいないかしら。” と、その姉妹が言いました。“わたしは特別に先を急いでいるわけではなし、私が面倒見ますよ。もし、あなたがたが行きたいのであれば、戻ってくるまで、私の可愛い甥の面倒は私がみることにしますよ。” (Unktomi はいつでも、こうして自分のあつた人たちと故意になっていったのです。) “よろしいわ、私たちの兄弟よ。”

と年取った女のほうがいきました。“彼らの面倒を頼みますよ、できるだけ早くもどってくるからね。”

こうして2人は、集めたプラムをいれる袋を用意すると、真っ赤に染まった雲のほうに向かってでかけてゆきました。彼女たちの姿が殆ど視界から消えると、彼は、赤ん坊達を揺り籠のハンモックから抱き上げ、そして、最初の1人を切り刻み、そして、2人目も切ってしまいました。こうして、彼は、旧い毛布を取り出し、それを赤ん坊のような格好に巻いたのです。そのうえで、それらをそれぞれのハンモックの中にいれておきました。それから彼は、頭を取り出し、それを別のハンモックの中にいれておきました。切ったからだのほうは大きなヤカンのなかに投げ入れたのです。そして、これを燃え盛る炎の上に掛けました。そのあと、彼がインディアンの株を、その体の肉と **Arikara** のかぼちゃと混ぜると、たちまちスープが出来上がったのです。スープが出来上がり、未亡人の姉妹が戻ったら、彼女たちにご馳走してやるつもりでした。姉妹は、疲れ果て、そして、お腹を空かして戻ってきましたが、プラムは手にしていませんでした。2人が近づいてくる足音を聞いて、**Unktomi** は二つの木のさらに入った赤ん坊達のスープを急いで皿に盛りました。そのあと、彼は、直ぐに逃げ出せるようにドアのそばに自分の席を取ったのです。そして、2人が入り口まだ来ると、**Unktomi** が叫びました。：“姉さんよ、あたしは、少しばかりの肉をもって来ました。そして、それを株とかぼちゃとで料理をしました。それに素晴らしいスープも壺の中にありますよ。赤ん坊達はいま丁度寝たばかりです。だから、あなたたちが食べ終わるまで彼らを起こさないようにしてください。あなたたちはお腹が空いているのは分っているんですから。”2人は直ぐに食事を始めました。そして、空腹が幾分収まると、彼女たちのひとりが立ち上がり、自分たちの赤ん坊がどんな具合なのかを身に行きました。彼女の赤ん坊の顔色はいつもと少しも変わりませんでしたので、彼女はちょっとだけ赤ん坊の顔が毛布の包みから出るように抱き上げました。“私の赤ちゃん! 私の赤ちゃん!”と彼女が叫びました。と直ぐに、もう1人も彼女の赤ん坊のところに急いでゆき、いそいで抱き上げ、同じ様にしました。直ぐに、かれらは、誰がこんなことをしたのか思い付き、**Unktomi** を撃ちみめそうと燃える火のなかから棒をとりだしました。こうなることを予測していた彼は、外に飛び出すのに時間は要りませんでした。そして、大きな木の根っこのところにあった穴にもぐりこんだのです。2人の母親は

Unktomi のあとを追って穴の中に入ることができず、彼をつまみ出すのは諦めざるを得ませんでした。そして、昼も夜も彼らのいとおしい赤ん坊のことでずっと泣いていました。一方、Unktomi は別の出口から、しかも、自分とは分らないように顔には塗料を塗って、まったく別の姿をして外に出て来ました。彼は、注意深くなみだをな駕している2人の女のところに近づき、そして、彼女たちが泣いているその訳を聞いたのです。

そこで、彼女たちはこう応えました：“Unktomi がここにやってきて、プラムのことで私たちをだましたのです。私たちがいない間に彼は、私達の赤ん坊を殺し、そして、その肉でもってスープを作っていたのです。それから、彼は私たちの食事にそのスープをだし、私たちもそれを食べたのです。そのあと私たちは、彼がしたことがわかり彼を殺そうとしたんですが、彼は、穴のなかに隠れてしまい、私たちはかれをその穴から引き出すことができなかったんです。”

“分かりました。私がかれを引っ張り出してあげましょう。”と、変身したよそ者たちが言うやいなや、かれは、その言葉とともに穴の中に潜り込んでゆき、そして、まるで Unktomi と戦って傷ついたかのように彼女たちに信じ込ませるために、自分の顔を引っ掻いたのです。“私は彼を殺してきましたよ。そうして、あなたたちがかれのことを確認するために穴に入れるように、そして、彼の死んだ体になにか仕返しができるように穴を大きくしてきましたよ。”彼の言うことを信じ、少し抜けたところのある2人の女達は、穴の中に入ってゆき、まんまと Unktomi によってその穴に閉じ込められてしまったのです。Unktomi は、直ぐに沢山の気の杭を集め、それを穴の中につっ込み、それに火をつけたのです。こうして、ほんの僅かのプラムで Unktomi に彼らを誘惑させるほどお人好しの馬鹿な一族の最後の1人までの命が、ここでこんな風にして終末を迎えたのです。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

126 大洪水のはなし.

Ottawa

Native American Indian Lore

私たちの言い伝えの中で、受け継がれてきた、それはそれは目立った性格の持ち主は、まだこうだとはっきりした時代のもではなく、なぜかぼんやりとした靄のような話なんです、それは、アルゴキン語の方言で、“この世の中でもっともばかな少年という意味の **Kwi-wi-sens Nenaw-bo-zhoo** でしょう。彼が一人前の男になったとき、彼は自分たちの仲間のうちで偉大なる預言者というばかりでなく、とてつもない力の持ち主で、大から彼は、大きな松の木でさえも粉々に砕いてしまうような、そんな威力をもった戦闘用の棍棒をたくみに操ることができたのです。彼のお供の猟犬は、長く、そして、しなやかな髪をし、いつも夜空の月のように輝く目をもったまさしく成長したバッファローと同じくらい、大きな怪物とも思えるほどの黒色の狼でした。海の神がこの狼犬の魅力的な美しさを見て、すっかり彼に嫉妬をしてしまい、彼は命を落とす運命にされてしまったのです。そこで神は、鹿の姿をして彼の前にあらわれ；猟犬が彼の匂いをかいで突進してくると、神に捕らえられて、海の底、深く引きずり込まれてしまったのです。そこで神は盛大なバーベキューの会を催し、鯨や、蛇や、深海に潜むありとあらゆる怪物たちを招待したのです。こうして、彼らは預言者の犬を殺した神と一緒に多いに食べて、唄って、大騒ぎをし、楽しいときを過ごしたのでしょう。

彼の気品ある犬の運命を知った預言者の愚か者は、ずるがしこい **Waw-goosh**(キツネ)のように、彼の鋭く細い目で、狼犬が彼の命の代償にしたというごまかしを見破り、彼は海の神に復讐をしようと考えました。そこでかれは直ぐに、海の神が彼の召使にしている怪物をお供によく日光浴にくる場所に行き、彼は、“鹿の行商隊”が海岸の縁に

来るまで、背の高いイグサの中に潜んで待ち伏せしていました。そして、彼らが瞬く間に眠りにつくと、彼は持っていた自分の背丈の二倍ほどもある大きな弓を引き、毒が塗られた矢を放つと、その矢は、水の神である **Neben Manito** の心臓を突き破り、刺さったのです。すると、**Neben Manito** は海の中に転がり込み、“復讐だ!、復讐だ!” と叫びました。すると、海底の集められた怪物たちは、向こう見ずに彼らの王の殺害者のあとにどっと押し寄せてきました。預言者は、この怒り狂った生き物が、竜巻の起こる直前の草のようになった森を洗い流すほどの山のような水をかれに浴びせようとしている、この怒り狂った生き物たちから懸命に逃れたのです。その怒りに燃えた洪水から逃れようと必死になっていましたが、しかし、彼は乾いた大地を探すことができなかったのです。絶対絶命の状態になり、彼は、天国の神の助けを求めました。と、そこに巨大なカヌーが現われ、そこには、陸地のあらゆる動物たち、そして、とりたちが夫婦、番で乗っており、そのボートは美しい娘さんたちにより漕がれていたのですが、その娘さんたちが、かれをボートに引き揚げようとロープを下ろしてくれたのでした。

洪水が怒り狂いました；そして、山のようになった水が絶え間なくその預言者の後ろに襲い掛かってきたのですが、でも、彼はなんとか無事でした。彼が何日かの間、水の上に漂っているときに、彼は **Aw-milk** (ビーバー) に、潜っていてもし底まで行き着くことができたなら、そこから少しだけ土を持ってくるように頼みました。そこで、彼は水のなかに潜りこんでゆきましたが、しかし、暫くするとまるで死んだように水面に浮かび上がってきました。預言者は彼をボートの上に引き揚げ、人工呼吸し、彼を生き返らせたのです。そして、今度は、**Waw-jashk**(ニオイネズミなのですが) に、“みんなの中でお前さんほど上手に潜ることのできる動物はほかにいないんだがね。ちょっと底まで行って、何がしか土を持ってきてくれないだろうか。そうすれば、それで私はこの世の中に新しい大地を作れるんだがね；この深い湖の上では、われわれはもはやこれ以上、そう長くはいけてはいけないんだから。”

そこで、ニオイネズミは、もぐってゆきました；ところが、またしてもビーバーと同じ様に、彼もまた気を失って湖面に浮かび上がってきたのです。そして、ボートの上に引き揚げられ、そこで預言者は彼

に息を吹き込み、再びかれを行きかえらせたのです。ところが、なんと、彼の足の爪のところに、ほんの少しばかりの土の塊がついていたのです。そこで預言者は、これを小さな容器に搔きだし、**Ka-ke-gi** (わたりガラス)の首のところに結びつけ、こう言いました。“さあ、お前さんたち、飛んでゆけ。そして、湖のうえをあちこち飛んでいってくれ。そうすれば、そこに乾いた大地がやがて姿を現すだろうから。”ワタリガラスは、言われたとおりにしました。；すると、水が引きていくではありませんか；そして、世界が以前のような型になって、姿を現し始めたのです；こうして、やがて、素敵なむすめとその預言者は結婚し、その大地で仲良く暮らしたということです。

洪水の話は、ノアの箱舟にも通じるものがあるようです。よの東西を問わず、何時の時代にも大洪水があったということではないでしょうか。それにしても、嫉妬はいけませんね。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

127 こおろぎとクーガー

Tribes of Alta and Baja California

Native American Indian Lore

Alta と Baja California の沢山の部族に伝わる伝説です。

クーガーは、森のなかをよく歩き回るのですが、あるとき倒れていた丸太を飛び越えようとしたとき、なんと、その木の中から小さな声が聞こえてきたのです。

“私の小屋の屋根からどいてください!” その丸太の腐りかかった片方の端から小さなコオロギが出てきたのです。“クーガーさん、あなたは私の小屋の屋根の上にたっているんですよ、”と小さな虫が言いました。“早くどいてくれなくちゃ。さもないと 屋根を支えている柱が折れて、私の小屋がつぶれてしまうよ。”

“私に、なにかしろといっているのは一体どこの誰かね?” とクーガーが威張った口調で言いました。でも、かれは小屋から足を外そうとはしませんでした。そうして、彼は自分の頭を鼻が殆どコオロギにつくほどに下げたのです。“この森の中で、俺はあらゆる動物の大將なんだぞ!”

“大將、いや、大將なんかじゃない。”とコオロギが勇敢にも言いました。“僕にはね、君よりも強い従兄弟がいるんだぞ、彼が必ず僕の仕返しをするからな。”

“そんなこと誰が信ずるものか、このちび虫め。”とクーガーが怒鳴り散らしました。“私を信ずる、いや、信じない。あつ、ソおー。”とコオロギが言いました。

“じゃー、明日、その従兄弟やらをここにつれて来い。そして、太陽が昇ったら、どっちが強いかわけをつけようじゃないか。”とクーガーが言いました。“そして、もし、お前さんの従兄弟やらが私より強いと証明できなかつたら、そのときには、お前とお前の小屋もろとも、この足でひねりつぶしてやるからな!”と、言うなり、クーガーは振り返って森の中に飛び込んでゆきました。

次の日のこと、太陽が高く上ると、クーガーが昨日と同じ道を辿ってやって来ました。そして、小屋の上で止まるとコオロギを呼びつけました。“こら、コオロギ、出て来い! その強いというお前の従兄弟を俺に会わせろ!”

と、その時、丸太から飛び出てきた小さな蚊がその大きな猫野郎の耳の中にもぐりこんでゆきました。

“なんだ、一体これは?” クーガーが喚きました。というのも彼は、今まで蚊なんてものを見たこともなかったし、聞いたこともなかったからです。その蚊がクーガーの耳の中の柔らかい部分を刺し始めたかと

思うと、今度は、彼の血を吸い始めたのです。“ヒューッ。ヒューッ!”、あまりにも痛くてクーガーは泣き叫びました。“オーイ。頼むからわしの耳から出てくれ!” クーガーが足で耳をかき、そして、頭を振り振り、飛びまわりました。それでも、耳の中の蚊は、さしまくったのです。

コオロギが彼の小屋から出てきて、クーガーに向ってこう言いました。“私の小屋には、何もしないよな?”

クーガーは、蚊が自分の耳から出て、コオロギと一緒に丸太の小屋に入ってくれるならそうすると言い、クーガーは、自分がきた道を引き返して行きました。そして、二度のその道を辿ってくるようなことはなかったと言うことです。

森の大将と自慢するクーガーも、蚊には勝てなかったという話し。小さいからといって、あいてを馬鹿にははいけませんね。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

128 白い鹿の幽霊

Chickasaw

Native American Indian Lore

これは、オクラホマに住んでいた Chickasaw 族の人たちに伝わっていた話です

Chickasaw 族の勇敢で、若い戦士が酋長の娘さんと恋に落ち込みました。酋長は、**Blue Jay** とよばれていた若い男が気に入りませんでした。そこで、酋長はその **Blue Jay** が絶対に実現できそうもないほどの結婚の条件をつけたのです。

“わしのところに、白い鹿の毛皮をもってきたまえ、” :と酋長が言いました。**Chickasaw** 族では、そんなすべて真っ白な動物など夢の中のはなしだと考えられていました。“わしの娘の代価は一匹の白い鹿なのだ。” 酋長は笑ってこう言いました。酋長は勿論、全身が真っ白な鹿など、全く珍しい動物で、殆ど見つけ出すことなどできないと知っていたのです。白い鹿の毛皮が、そのころはウェディングドレスに使われるもっとも貴重なものでした。そして、なんといっても最高の白い鹿の毛皮は、白子の鹿から取れるものでした。

Blue Jay は、いとおしい彼女、名前は、**Bright Moon**(輝ける月)とあったのですが、その彼女のところに行き、“私は、一月したら必ず、あなたとの結婚に必要な代価を持って必ず戻ってきます。そしたら、僕たちは結婚しよう。これは約束の印です。” といって、彼の一番上等の弓と、一番鋭い矢先の矢をもって **Blue Jay** は狩に出かけたのです。

三週間が過ぎ、**Blue Jay** は、だんだんお腹が空き始め、そして、ちょっぴり淋しくなり、そこいらじゅうに茨の引っ掻き傷がついたのです。そうこうしているうちにある満月の夜に、**Blue Jay** は、まるで月の光のなかを漂っているかのような白い鹿を見たのです。彼が身を潜めているすぐ近くまでその鹿が来たときに、彼はとがった矢先の矢を射ました。矢はその鹿に命中し、その心臓近くまで突き刺さったのです。しかし、その鹿は、死んで足を跪かせるかと思いきや、なんと走って逃げ出したのです。そして、遠くに逃げてゆくどころか、今度は、**Blue Jay** めがけて突進してきたのです。その目は真っ赤に煌き、角は尖って、恐ろしいほどのものでした。

Bright Moon と約束した一ヶ月が過ぎ去りましたが、**Blue Jay** は帰ってきませんでした。そして、数ヶ月が過ぎると、その部族では、もう彼は戻ってこないと決め付けました。

しかし、**Bright Moon** は、自分に秘密があったので、他の若い男と決して結婚しようとはしませんでした。そして、月が、丁度彼女の名前

に用に輝いていたときには、彼女はキャンプの火の煙の中に白い鹿が、自分の心臓に矢を突き刺したまま駆けてゆくのをよく見かけたのです。彼女は、何時か鹿は、息が絶え、そして、あの **Blue Jay** も戻ってくると希望を持っていたからです。

今日でも、白い鹿は、**Chickasaw** の人々にとっては神聖なものと思われているし、また、白い鹿の毛皮は、ウェディングドレスとして、最高のものとされているのです。

さあ、**Blue Jay** は一体、どうしたのでしょうか。2人は結婚して幸せになったのでしょうか。**Bright Moon** が何時までも **Blue Jay** を待ち続けたという話には、こころを打たれるものがありました。・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

129 生き返った娘さん

Sioux

Native American Indian Lore

その昔、あるところに、一人娘といっしょに暮らしている老夫婦がおりました。彼女はとても綺麗で、部族の中の沢山の男たちから求愛を受けたのですが、しかし、彼女は、自分は1人のほうがいいと言い、彼女をどれほど愛しているか、というような心底彼女の気持ちに届くような話にも、彼女の答えはただ一

言あっただけです。それは、決まって“ノー”というものでした。

ある日のこと、この娘さんが病気になり、日が経つにつれだんだん病は重くなってゆきました。村の祈祷師たちが呼ばれたのですが、しかし、彼らの祈祷は全く効果がなく、そして、その日から二週間が経つと、彼女はその病気のためにとうとうなくなってしまいました。勿論、村には重苦しい追悼の次第となったのです。彼らは、彼女の体を村から数マイルもはなれたところに運び、その体を素晴らしい毛皮と毛布で包み、彼らが選んだ骨組みの上に安置しました。(これがインディアン達の中に伝わっている埋葬の行事だったのです。) 彼らは、四つに分かれた柱を大地に立て、それら頑丈な柱を横にして柱同士を結び、柳の木の枝とずんぐりしたトリネコのブラシを使ってベッドをつくりました。このやぐらは、地上から大体、5～7フィートぐらいの高さでした。そして、葬儀が終わると両親は、自分たちの保有していた馬、素晴らしい毛皮や毛布、そのほかその少女がもっていたもの、すべてを処分しました。そのあと、彼らは自分の髪の毛を剃り、自らは自分たちを守るに足るだけのみすぼらしい衣装を身につけました。

こうして一年がたち、この老夫婦の友達、そして、親戚の者達は、彼らに悲しみから気を取り直すようにしたのですがそれは無駄でした。“もう、十分に喪に服したよ。”と人々はいいました。“もう、悲しむのはやめて、今、自分たちが生きている間は、もっと楽しく時間を過ごそうではないか。もう、あなたたちは歳寄りなんだし、そう長く生きているということもないんだ。だから、自分たちの時間をもっと大事にしなくては。”年寄りの夫婦は彼らの忠告を聞きましたが、でも彼らは首を横に振り、そして、こんな風に応えたのです：“もう、私たちには、何の生きる目的もないんですよ。私たちを楽しませてくれるようなものは何もないんですよ。だって、自分たちの生きる光を失ってしまったんですから。”

こんな風にして、老夫婦は自分たちの可愛い娘を失った悲しみに浸り続けていたのです。この美しい娘さんが亡くなってから二年が経ったある日の夕方、あの娘さんが祭られていたやぐらの直ぐそばを1人の狩人とその妻が通りました。彼らは長いたびからの帰り道で、狩をしてきたためにとっても疲れていました。ですから、ユックリユックリ旅をしていたのです。そのやぐらからおよそ半マイルほど離れたとこ

ろの土手の脇から、とても綺麗な泉が湧き出ている、そこからわずかな水が少しずつ流れていました。この水のおかげで土手のまわりには広い範囲にわたって沢山の草花が根を張り、葉を青々と茂らせることができたのです。この泉のところで、狩人はキャンプを張り、馬に草を食めさせ、そして、妻に手伝わせて自分たちが旅の間重宝するように持ってきた小さなテントを張ったのです。

辺りが真っ暗になると、その狩人の連れている猟犬がとても騒がしく、唸るように吠え立てました。“ちょっと外にでて、犬が何に向って吠えているのかみてきておくれ。”と狩人が妻に言いました。彼女が入り口から外を見回し、そして、こう言いました。“あの少女が祭られているやぐらのほうからこっちに進んでくる女の人の姿が見えるんだよ。”

“ひょっとすると、それは、あの死んだ娘さんのような気がするんだがねえー。娘さんをここに入れるが、決して恐がっているような振りをするんじゃないよ。”と狩人が言いました。すると、直ぐに近づいてくる足音がして、その足音は入り口のところでピタッと止まったのです。狩人が入り口の下のほうを見てみると、そこには、小さなモカシンがあったのです。ですから、彼は直ぐにそこに誰かがいると分ったのです。“どなたでしょうか。どうぞ、中に入って一緒に食事をしませんか。”

この招きの言葉を聞いて、その人影はユックリの中に入ってきて、そして、頭巾を被り、顔は、輪郭が分るようにきっちり素敵な毛皮で覆われたまま、入り口のそばに座りました。妻はご馳走をお皿にとり、それをその訪問者の前において、こう言いました。：“どうぞ、お食べください。きっとお腹が空いているでしょうから。”その人影は微動だにせず、そして、食事をするためにその覆いをとろうともしませんでした。“ドアのほうに向って後ろ向きになるようにしよう。そうすれば、お客さんは、食事ができるだろうから。”と狩人がいいました。こうして、彼の妻は、訪問者に背中を向け、彼らがしとめてきたしかの背中中の臍(これはインディアンがよく紐に使っていたものですが)につる下げることができるようにせつせと小さな肉を刻み始めました。狩人のほうは、自分のパイプにタバコをつめ、そして、反対向きになり、静かにタバコをふかし始めました。するとなんと、その皿が妻のほうに返され、妻は、それを取り、綺麗に洗ったあと、片

付けました。人影は尚も入り口のところに物音一つせず、息の音さえ聞こえずに座っていました。そして、とうとう狩人がいいました：“お前さんは、あの骨組みのやぐらの上に二年前に置かれた娘さんかね？”すると、うなずくように2・3度首を縦に振りました。“同だね、今日はここにと泊まってゆくかね；もし、そうするなら、わしの女房がお前さん用のベッドを用意するけどね。”その人影が首を横に振りました。

“じゃ、明日もわしらのとこに来なさるんかね？”今度は首を縦に振りました。

こうして、同じ様なことが三日の間続き、その人影は、狩人のテントに來たのです。3日目の晩になり、狩人は、その人影が息をしていることに気がつきました。なんと片方の手が毛布から出ているのです。そして、その肌の色は確かに黒く、手の骨のほうに動かないように突き刺さっていたのです。これを見た狩人は、立ち上がり、そして、柱にかけてあった自分の薬袋を取ってきて、なかをあけ、そこからなにやら薬草の根っこを取り出し、今度は、それとスカンクからとった脂と、朱色の薬とを捏ねまわし、そして、その人影に向かってこう言いました：

“もし、お前さんがその手と顔にこの薬を塗らせてくれるんなら、お前さんの肌に新しい命を与え、肌が蘇って、またもとのように綺麗な姿になるかもしれないよ”すると、その人影はうなずき、そこで、狩人はその薬を彼女の腕や顔ぬってあげました。それから彼女は立ち上がり、やぐらのほうに戻って行ったのです。次の日のこと、狩人は自分の村に帰ってゆきました。その日の晩のこと、彼は、その村から、2・3マイルのところにテントを張っていましたが、夜がやってくると、また、いつものように犬が吠えているのです。そして、妻がみると、そこに、こちらにやってくる娘さんの姿がありました。

その娘さんが中に入ってきて座り、狩人はその娘さんがもう、毛皮をまとっていなかったのので、直ぐ間近にその顔を見ることができました。妻がその娘さんに食べ物を差し出すと、その娘さんは、手を伸ばし、そのさらを取りました。ですから、その手があらわになったのです。でも、直ぐに、その手が全く自然のままのものであることに気がつきました。食事が終わると、狩人が言いました。“どうだね。私の

くするが効いたかね?” 彼女がうなずきました。“じゃ、自分の体じゅうに塗るほどの薬が欲しいんじゃないかね?” また、彼女がうなずきました。“分った。なら、体中に塗るだけの薬を作ることになろう。私が外にでているから、私の妻にそれをお前さんの体中に塗らせることになろう。” 狩人の妻がこうして体中にその薬を塗り終えると、彼女は狩人に中に入るようにいい、そして、彼が中に入ってきて娘さんの横に座り、こう言いました：

“明日は、ワシ達は村に着くことになるんだが、どうだね娘さん、わし等と一緒に来るかね?” すると、彼女は首を横に振りました。“じゃー、お前さん、わし等が村に帰ったあと、明日もわし等のところにくるんかね?” 今度は彼女は首を縦に振りました。“そしたら、お前さんの両親にも会いたいというんだね?” 彼女はもう一度、首を縦に振り、立ち上がると、闇のなかにその姿を消してゆきました。

次の日の朝早く、狩人はキャンプの片付けをし、その日のうちに着くように昼には旅立ちをしました。そして、妻には、村に着いたら直ぐにあの老夫婦のところに行き何がおきたのかを説明するように言いつけました。彼女は夫に言われたとおりにしましたので、夜になると、その老夫婦は、狩人のテントにやってきました。中に入るように招かれると、そこには大変な料理が用意されていたのです。そして、食事が終わると、今度は、テントの回りにいた犬達が物凄いい声で吠え始めたのです。“ああ、彼女が来たんだな。びっくりしてはいけませんよ。直ぐにあなたたちのあのなくなった娘さんがここに来ますからね。” と狩人が言いました。かれが話し終わるか否かのその時、彼女が昔のしぐさそのままテントの中に入ってきたのです。彼女の両親は、彼女をしっかりと抱きしめ、そして、彼女が息のできないほどキスをしたのです。

彼らは彼女が自分たちと一緒に戻るように願いましたが、彼女は自分を生き返らせてくれた狩人と一緒にここに留まり、彼と結婚して、彼の二番目の妻になるんだと言いました。彼女が自分の妻となって少しの間一緒に生活をしたあと、狩人は、戦士になって戦いに行き、そのまま帰ってくることはありませんでした。彼は、戦いの場で死んでしまったのです。

彼女の夫が死んだ、その一年後、彼女はまた結婚をしました。ところが、その新しい夫もまた、彼らの馬を盗みにきた敵の戦士たちの一団によって殺されてしまったのです。三番目の夫もまた、最初の夫と同じような運命を辿りました。彼は、戦闘の場で殺されてしまったのです。

彼女は、三番目の夫の死のときも素敵で若い婦人でしたが、しかし、それ以後は、結婚することはありませんでした。というのも、男たちは、彼女はのろわれており、彼女と結婚した男は必ず敵に殺されてしまうんだといって、彼女を恐れていたからです。

彼女が、病人をよく治療し、この部族の中では一番優れた腕の医者だという評判を得ました。彼女はとても長生きをし、そして、自分に死期が近づいているのを感じると、彼女は、自分がかって横たわっていたところに運んでくれるように頼み、その新しく定められたやぐらの頂上に這っていくと、自分の顔を丁寧に毛布でくるみ、そして、深い眠りについたのです。そして、その後は、彼女は決して二度と目を覚ますようなことはありませんでした。

インディアン達の間で、長生きをしている老婆達が持っている不思議な知識、能力、そして、力は、このように神がかり的なものがあり、自分たちの守り神の役割をしているのだと、彼らは感じているのではないのでしょうか。老人たちを大事にしなければいけませんね。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

130 部族の花の由来 — TRAILING ARBUTUS

Ottawa

Native American Indian Lore

何ヶ月も、何ヶ月も前のことになりますが、ある1人の老人がとても深い森の中を流れる川のそばに一軒家に暮していました。冬の間は、あたり一面雪に覆われ、そして、氷の世界でしたので、彼は分厚い毛皮を身にまとっていました・

風は、木々の間をまるで小鳥でもいれば、それを凍らしてしまおうと、枝や灌木のなかを探すかのように吹き抜け、そして、高い丘の上、草木の生い茂った湿原、深い谷の間を悪魔の精たちと追いかけてっこをしているかのようなようでした。その老人は、辺りを歩き回ったのですが、雪が深く、自分の小屋の中の火を燃やすだけの薪のかけらすら探すことができませんでした。

最後の最後の乾いた残り火のそばに座り、彼は、Kigi Manito Waw-kwi(これは、天にいる神様なのですが)に向って、自分は死にはしないよと呼びかけました。風が唸り、そして、彼の小屋のドアが吹き飛びと、なんとそこには、素敵な娘さんが立っていたのです。彼女の頬は赤いバラのような色をしており、大きな瞳、それは、まるで月の光のなかの小鹿のように光り輝いていたのです。そして、黒く長い髪はワタリガラスの紫紺の色でした。そして、歩くように大地を踏みしめ、また、彼女の手は、柳のつぼみで覆われていて、彼女の頭には、野に咲く花の束が載っており、身に纏っている服は、甘草としだでできたものでした。はいているモカシンは素敵な白いユリのようなようでした。そして、彼女が息をすると小屋の中の雰囲気が一気に暖くなり、ほんのりと甘い香が漂ったのでした。

老人はいいました。“おお、私のいとしい娘さんよ。私は、お前さんとめぐり合えて、実に嬉しいよ。とにかく私の小屋は寒いし、物寂しいんだ；なんとも、お前さんをぬくもりから遠ざけているのさ。でも、一体、お前さんは誰なんだね、どうして、そんな不思議な格好をして私の小屋に来るハメになったの

か話してくれないかね。さあ、さあ、ここに来て、座って、お前さんの村のこと、戦で勝ったことなど話してくれんかね。そうすれば、私も、私の手柄話をしようじゃないかね。私は、Marito なんだから。”

こうして、彼は自分達が話をする時に一緒に吸おうと、2本のパイプにタバコを詰めました。タバコがその歳寄りの舌を暖めると、彼は、もう一度、話しました。“私は、Marito なんだ。私が一息吹くと、湖も、川もコチコチになってしまうのさ。” と、娘さんが答えました。“私が息をしますとね、この平原のそこいらじゅうに、花が咲き乱れるのですよ。”

すると、歳寄りがこう返事をしました。“わしが、一息、息をするのだね、この大地という大地がすべて雪に覆われてしまうのさ。” “私が髪を振ると” と、今度は娘さんが言い返しました。“あの雲からあったかい雨がふりますのよ、”

今度は、“わしが歩きまわるとだね”、と老人が言いました。“木の葉はしばみ、そして、枯葉となって落ち葉になるのさ。わしの命令一つで、動物達はみんな土のなかに隠れてしまうんだ。そして、鳥達は水を飲むことすら諦めて、どこかに飛んでいってしまうのさ。よく聞けよ。わしが、Manito なんだ”

若い娘は、負けてはいません。“私が歩き回れば、大草原の植物達は、頭をもたげ、そして、大地に生える木々は、生き生きとした緑の葉を茂らせ、鳥達は、戻ってくるのよ。私に巡り会うものはみんな楽しくなって歌を唄うの。そこいらじゅうに歌声が響き渡るの。”

彼らがこんな話をしている間に、小屋のなかが温まり、ほのかな香がし始めました。そして、老人の頭が垂れ、やがてコックリと居眠りを始めたのです。すると、太陽が戻ってきて、若い鳥達が、小屋の屋根の上に集まってきてさえずり始めました。“ああ、喉が渴いた。喉がからからだよ。”

すると、Sebin（これは、川のことですが、）が、“どうぞ、ここにきて、好きなだけ水を飲むがいいさ。”そして、その老人が寝ている間に、若い娘さんがその手を彼の頭のほうに指しだすと、老人は今度は、だんだん小さくなっていったのです。やがて、彼の口からは水が流れ出したのです；彼が大地の上のほんの僅かな小さなものにな

ってしまうと、彼の来ている着物が、今度は、しぼんだ木の葉になったのです。

そして、若い娘さんが大地に跪き、彼女のふっくらとした胸から、とてもかわいらしいピンクと白い色の花を取り出し、それらを萎れていく葉の下に包み、こういいながら、息を吹きかけたのです。“お前さんたちに私のすべての清純さと甘い息をあげましょう；お前さんたちを摘もうとする人たちはみな、必ず跪きますからね。”

こうして、その後、その若い娘さんは、森の中を通り抜け、大平原を越えてどこかに行ってしまいました；鳥たちが彼女のためにさえずり、そして、彼女がどこに行き、いま、どこに居ようが、私たちの部族の花——は、何時までも咲き乱れるようになったのです。その花こそ、trailing arbutus なのです。

老人と若い娘さん、そして、冬と春の戦いは、その結末が咲き乱れる花になるなんて、とても愉快な話ですね。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

この早春に咲くツツジ科の花は日本のイワナシ (*Epigaea asiatica*) の仲間です。そういえば、イワナシの写真は北海道で撮ったことがありません。ガイド本によると、よく訪れる Billy Goat Trail でも見られるようなのですが、私たちの住む Rockville とその北方の Frederick の間にある Sugarloaf Mountain で初めて見る事ができました。“trailing”とはこういう意味で、まさしく地面を這うように美しい花を咲かせていました。日本のイワナシよりもずっと白っぽく、うっすらとピンク色を帯びています。特徴的な楕円形の葉は常緑です。イワナシの名は、岩場に生えて果実の味が梨に似ているのに由来するそうです。果実も見たいものです。



131 死者の踊り

Lui seño

Native American Indian Lore

南カリフォルニア地方に住むルイセニョの人たちの言い伝え

一年に一度だけ、Kamak の人々は、自分たちの村を発ち、どんぐりを採集するために Palomar の山に登ってゆきました。老いも若きも、そして、病気のものたちまで、担架に乗せられていったのです。ですから、村びとたちはこの重要な時期に、みんながいっしょに過ごすことができたのです。村に残された家は、空っぽで、誰も、この間に泥棒が来ることなどなんの心配もしていませんでした。

この村が空っぽになっているときに、ある 1 人の男が Ahoya という、近くにあった別の村から Kamak に尋ねてきたのでした。彼は、そこがもぬけの殻だということに気がつきました。彼は、みんながどこに行き、だから、自分がこのたびの間に自分の友達に会うことができないということを知っていたのです。そこで、彼は、一晩だけそこに留まり、次の日の朝村を発つことにしました。彼は、誰の家のなかにも入りませんでした、というより、彼は、普通、穀物を保管しておくために使うバスケットを持ってきて、それをひっくり返して使うことにしました。その中に彼はもぐりこんで行きました。そうすれば、風で悩まされることもなく、彼は心地よい眠りにつくことができたのです。

そして、暗くなってから、随分時間経ち、夜の帳となったころ、彼は誰かが、ダンスをしようと人々を誘っている声で目を覚まされたのです。最初、彼は、それは、Kamak の人たちがどんぐりの採集から戻ってきたのだと思いました。自分が年を取っていたので、彼は、それは自分が随分前から知っている人の声だと信じ込みました、が、もう随分前になくなった人でしたから、その声は死者の霊だと思い始めました。Kamak の人々が遠くに行っている間に、死者が踊りをするために戻ってきたのです。その老人は静かに籠の下で横になって、みんなの声に、そして、旧い時代にさかのぼっていくありとあらゆるやりかたに耳を傾けていたのです。彼は、歌を唄うと岩に変身してしまう女の声聞きました。

また、唄いながら、自分の手で岩を抱き上げている男の声を聞きました。旧い時代の人たちみんなが、いま再びこの村に蘇ってきていたのです。

その老人はもう我慢しきれなくなって、立ち上がりました。彼は、何時間も耳を傾けていたあとで、自分が若い頃に知り合いだった人たちを、ずっと昔の話のなかで聞いただけなのに、そんな人の顔を捜したくなったのです。彼は、籠から抜け出し、そして、死者たちが踊っている輪のなかに飛び込んでいったのです。

ところが、その籠がひっくり返った途端、そこには、鳥達の群れがいるだけで、それもたちまちどこかに飛んでいってしまったのです。死者達が一晩中ダンスをしている間、叩いてならしていた亀の甲羅が土の上にあっただけです。それがいま、一かけらのシャボン草になったのです。

その老人は、死者たちの踊りを見てはいけなかったということです。

霊が蘇るという話は、どの民族にも伝説として伝わっている話ですが、現実の世界とそこは別の世界であるということに、とても大事な意味があると思います。欲深な我々は反省をしなくてはいけないということではないでしょうか。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

132 チェロキーの小人の話

Native American Lore

チェロキーの小人族は、山岳地帯の岩の洞穴の中に住んでいた聖霊の部族です。彼は、男も女も、おそらく、あなたの膝ほどの背丈しかありません。彼らは非常によく研ぎ澄まされて、そして、端正で、彼らは殆ど大地につくほどの長い髪をしていました。彼らは、また、非常に献身的であり、親切で、しかも、驚くほどの働き者でした。音楽をこよなく愛し、生活の中の多くの時間を、太鼓をたたいたり、歌を唄ってり、踊りを踊って過ごしていました。彼らは極めて紳士的な性格でしたが、しかし、他人に干渉されることは嫌っていました。

時々、彼らの太鼓が、山の中のとても寂しい場所から聞こえてくることがありましたが、彼らは自分たちの生活を干渉されることを嫌っていましたので、その音の源を訪ねることは決して容易なことではありませんでした。彼らはよそ者に対しては、呪いをかけるようなことをしていましたので、そのために錯乱し、道に迷ってしまうのでした。そして、かれが例え何とか自分の村に帰って来たとしても、彼はまるで、放心したように状態になっていたのです。また、あるときには、夜になるとある家に近づいてきて、そして、家の中に居た日とは、彼らが話をしているのを聞いたのですが、でも、かれらは決して外に出て行こうとはしませんでした。そして、朝になってみると、なんとトウモロコシが集められていたり、農地があたかも、男たちが一生懸命になって働いたかのように綺麗に耕されていたのです。仮に、誰かが外に行って、これをみようとでもしたら、その人には死が待っていたのです。

もし、狩人が森の中で、たとえば、ナイフとか、あるいは、小さな装飾品のようなものを見つけたときには、その人は必ずこういうでしょう。それが彼らのものであるのかもしれないので、“小人さんよ、私はこれを持ってゆきたいんだけど。”と、そして、もし彼が黙ってそれを持っていくようなことがあったら、彼らは、彼を家に追い返そうと石を投げつけるに違いありません。

小人達のあるものたちは肌が黒く、そして、あるものたちは白い肌をしており、また、ある一部の者達は、丁度チェロキー族のように金色の色をしていま

した。たまに彼らはチェロキー族の言葉を話していましたが、しかし、それは稀で、彼らは自分たち自身の“インディアンの言葉”を話していました。それは“ブローニー”と呼ばれる言葉でした。

小人達は、自然やそのほかの動物達と調和して生きていくことを教えるためにここにいるのです。小人達には、三種類の人たちがいます。その一つは、Laurel 族であり、そのほか、Rock 族、そして、Dogwood 族です。

Rock 族は、彼らはなんでも“対等”と考え、子供たちや、その類を平気で盗むようなけちな部族です。しかし、彼らは、彼らの部族が侵略されたのでこんなことをするようになったのです。

Laurel 族の人々は、仕掛けをうまく使う人々で、いたずらばかりしていました。眠っている彼らの子供が笑っているのをみることがあるでしょうが、——彼らはいたって ユーモラスであり、そして、中間達と喜びを分かち、一緒にそれを楽しむのです。

それから、三番目の Dogwood の人々は、とても気持ちの優しい人たちで、いつも回りの人たちの面倒を見ているのです。

小人の人たちにより教えられる教訓はとても明解です。Rock 族の人たちは、もし、あなたが、他の人たちにあまり役に立たなかったり、歓迎されないようなことをしたときには、それが、自分も同じようにして降りかかってくることを我々に教えてくれています。ですから、私たちはいつでも、他の人の人権や、気持ちを尊重しなければいけないのです。Laurel 族の人たちのことは、私たちは、この世の中のことをあんまり深刻に考えないほうがよいということを、そして、楽しみはいつも回りの人たちと共に味わうのがよいと教えてくれているのです。Dogwood 族の教訓はとても分りやすいものです——もし、あなたが誰かのためになにかをしようとする時には、誠心誠意、それを成し遂げなさいということです。あなたに対してなにか借りを感じさせたり、あるいは、代償を求めるようなことはしてはいけないということです。

チェロキーの人たちの信仰には、この小人族といわれる人たちにまつわるような話が沢山あります。こうした人々は、とても小さな神秘的な性格をもっていると考えられており、また、別の信仰のなかでは、違った目的のための役割を演じています。

“小人族についての沢山の物語や伝説があります。あなたは、森の中でその人たちに巡り会うことができます。彼らは、話すことができますし、たった 2ft 足らず、あるいは、場合によってももっと背が低いかもしれませんが、それだけの背丈しかないということを除けば、他のインディアン達と全くかわりはないのです。今日にしてみれば、その小人族の人たちはとても我々のためになっているに違いありませんし、また、彼らは、我々に対して特別な秘訣を演じることもできるのです。” あるとき、1 人の少年がいました。この少年は、決して自分が大きくなろうとは望みませんでした。事実、彼は、みんなにいつもそんな風に、自分は大きくなりたくないと言っていましたので、まわりの人たちは、彼のことを“永遠の少年”と呼んでいました。彼の友達が集まり、あれの周りに座って、こんなことを話していました：“よし一人前の男になり、そして、大人になったら、私は、こんな風になるんだ、そして、ここに来て、こうするんだ。” すると彼は、その話から離れて、一人で遊んでいるのです。

彼は、自分が決して大人になろうと望んでいなかったのも、そんな話を聞くことさえ嫌だったのです。とうとう彼のお父さんは、このことにうんざりしてしまいました。そして、彼はその永遠の少年に向って、もうお前のことをそんな風に二度とよばないから。いまのいまから、お前は、一人前の男になることを訓練しろ、そして、自分のことは自分で責任を取るんだ。そんな風にして一日中遊んでばかりいるんじゃない。お前は、沢山のことを学ばなくてはいけないのだ。明日から、叔父さんのところに行くんだ。そうすれば、叔父さんがお前に、お前が知らなくてはならないことを教えてくれるはずだ。その永遠の少年は、彼の父親が言ったことを聞いて、とてもこころが痛みました、がしかし、彼は、大人になるという考えを理解することができなかったのです。彼は川の辺にゆき、そして、ひとりで泣きました。その泣き方があまりにも激しかったので、彼は、仲間の動物達が自分の周りにきていることに気が付きませんでした。そして、彼らは、彼になにか話しかけようとしていたのです。かれをなんとか慰めようとしていたのです。そして、とうとう、彼は、彼らが何を言おうとしていたのか理解できたのです。“明日、ここにもう一度、もっとはやい時間に来るんだ。” なるほど、彼らは自分にさよならを言いたいんだなと彼は思いました。そして、彼は、自分の足を引きずって自分の家に帰りました。その晩、彼は、頭のなかがかんがらかって眠ることができませんでした。次の日の朝早く、彼は、約束したように友達と会うために出かけて行きました。そして、彼は、あまりにも悲しかったので、彼らにはもうこれっきりというさよならの言葉を思いつくことができませんでした。そして、ついに彼は、彼らは彼

になにかを言おうとしているに違いないと思い始めました。それは、彼に振り返えさせるということでした。

彼が振り返ってみると、彼らがそこにいたのです。それは、すべて小人族の人たちでした。そして、彼らはにこにこ笑顔で彼をみており、笑いながら、彼に抱きつこうと走り出して来ました。彼らはこう言っていたのです。“永遠の少年よ。お前さんは何も大人になんてなる必要はないんだよ。お前さんは、これからずっと我々と一緒にここに居ることができるんだよ。ここにくればいいさ、そして、我々の仲間になるんだ。お前さんは、決して大人になったりしないよ。われわれが、創造の神に、お前さんのお父さんとお母さんに、物事の考え方の一つを送るように頼んであげよう。そして、彼らにお前さんは無事であり、自分がしなけりゃならないことをしているよということを知らせてもらおう。永遠の少年は、そのことを長い間思い悩んでいました。しかし、それは、彼がしなければならぬことと決心したことでした。こうして、彼は小人族と一緒に暮すことになりました。

そして、今日でさえ、あなたが森の中にいて、なにかを見たり、何かが見えたりした時には、それは実はあなたが思っているようなものではないのです。あなたが魚釣りをしているときに、あなたが、その釣り糸の先になにかを感じ、あなたが、それがとてつもなく大きな鱈であると思うときには、それを引き上げてごらんなさい。そうすれば、そこにあるものなんと、あなたの釣り針を絡ませているただの棒切れに過ぎないんですよ。これは、実は、小人族がしていることなんですよ。彼らは、あなたをからかって遊んでいるのです。ですから、あなたはおかしくなって笑い出し、気持ちを何時までも若々しく保つことができるんです。これこそ、私たちの気持ちを何時までも若く保つための小人族の、そして、永遠の少年の魂なのです。

若さを保つ秘訣は、小人族と、そして、何時までも少年でいたいという気持ち、これなのですね。大人振るよりも、少年らしく、いつもなにかに情熱をもつことが大事だということ、反省させられる思いです。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

133 虹の戦士

Native American Lore

あるところに、Cree 族の出身の 1 人の老婆、名前を Eyes of Fire 火の目を持った人というのですが、彼女が、白人達、あるいは、Yo-ne-gis とも言うのですが、彼らが食欲のために、やがてすべての魚たちが川のなかで死んでしまい、空を飛んでいる鳥達が落ちてきて、水は真っ黒ににごり、木は緑を失ってしまい、我々が知っているように、人類は滅びていくしかないような時代が来るだろうと予言をしました。

伝説や、物語、社会的な慣習、そして、神話や古きいにしえの時代の部族の文化を伝える人が我々に繁栄をもたらすために必要とされるときがくるのです。彼らは、人類が生残るために不可欠な重要な人たちで、彼らのことを“虹の戦士たち”と呼んでいました。

すべての部族のあらゆる人たちが、公正で、平和で、自由であり、そして、偉大なる創造の神の魂を認識するそんな新しい世界を形作ること気づく、そんな日が来るでしょう。“虹の戦士たち”は、この世、もしくは“Elohi”のあらとあらゆる人々に対して、彼らのメッセージを伝え、教育をするのです。彼らは、どうやれば“偉大なる創造の神の魂”に従って生きて行けるのかを教えるのです。

こうした戦士たちは、人々にこの世の中と共に彼らの正しい道を作るのに必要な原理とルールを教えるのです。こうした原理は、古代からの部族がもっているものだったのでしょう。虹の戦士たちは人々に昔の共同生活、愛、そして、相互の理解というものがどんなものだったかを教えるのです。彼らは、この大地の四つの方角のすべてに生活する人々に対して、調和を教えるのです。

丁度、古代の部族のように、彼らは、人々に、偉大なる創造の神を、美しい山々の連なりのように限りない愛、命の海に繋がる行く手に導いてくれる愛をもってどんなふうな祈りを捧げればよいのかを教えてください。もう一度言います。彼らは、孤独であっても、あるいは、集団であっても、そのなかで喜びを感じることができるのです。彼らは、ささやかな嫉妬もなく、また、あらゆ

る人類をまさしく兄弟のように愛するのです。肌の色や、人種や宗教にこだわらず。彼らは、自分の気持ちの中に入ってくる喜びを感じ、そして、全く人間と同じ様になってくるのです。彼らの気持ちは、純真であり、ぬくもりと、理解と、ありとあらゆる人々、自然、そして、偉大なる創造の神に対する尊敬の念を回りに広めて行くのです。

彼らは、再び、自分たちの心と、気持ちと、魂と、そして、実際の行動を、純真な考えで満たしています。彼らは、生命の見本——それこそ、創造の神ですが、を求めています。そして、祈りを捧げる人の中に、真の強さと美しさ、そして、生命の孤独を見つけるでしょう。彼らの子供たちは、そうです、自由に走り回り、自然と母なる大地の恵みを楽しむ事ができるのです。

Yo-ne-gi、そして、かれらの貪欲な行いによって生み出された害毒や破壊からの恐怖から解放されると、川は再び浄化され、そして、森は豊かに、また、美しく茂り動物や鳥たちもまた元通りに元気になったのです。そして、植物や動物達の活気が戻り、こうしたすべての美しいものを保護するが、生活の手段となってくるのです。

貧困とか病気、そして、貧乏は、この大地にいるかれらの兄弟姉妹たちにより介抱されるようになります。こうした行いが、かれらの日頃の生活の中に再び実行されてゆきます。仲間の中の指導者達が昔のやり方で選ばれるでしょう—それは、単に集団の力によったりするものではなく、また、声が大きいとか、うぬぼれが強いとか、あるいは、呼ばれている名とか、他人を標榜したりすることによるのではなく、大きな声で言うことを実際に行う人たちによって選ばれるのです。そして、自分の愛とか、智恵、勇気を現実を示し、そして、自分たち仲間のためになるような仕事ができ、それを実行できるひとが指導者、あるいは、酋長として選ばれるのです。

かれらは、かれらの“品格”によって選ばれるでしょう。決して、どれだけのお金持ちであるとかによって選ばれることはないのです。思慮深い、そして、献身的な“昔の酋長達”のように、かれらは、人々を愛で理解し、自分たちの若い仲間が、回りの人たちの愛と見識により教育されていくことを知っています。

かれらは、このやんだ世界を完全の癒し、そして、健全で美しいものにするという奇跡が起こることを示すのです。こうした、“虹の戦士たち”の任務は、非常に広いものであり、且つ又、偉大なものなのです。

また、世の中には、克服されなければならない恐ろしい無知の山が沢山あります。そして、かれらは、それが偏見とか嫌悪を生むものであることを知るようになるでしょう。それらは、かれらの剛健さと、心の強さのなかで、動ずることなく、没頭するようになるでしょう。かれらは、しっかりした意思と心構えがかれらを“母なる大地”をまた昔の美しく、豊かなものに一もう一度、戻す道に導くということをよく理解するようになるでしょう。

その日はやがて来ます。それは、決して遠い未来のことではありません。われわれが生きてゆくために、文化と伝統を語り伝えてくれるあらゆる部族の人たちにどれだけ恩恵を被っているかを知る日が来るのです。儀式とか、物語、伝説、そして、神話などを語り続けている人たちがここに居るのです。われわれがもう一度、自然、母なる大地、そして、人類が調和を保っていた時代に戻るということは、この知識、つまり、かれらこそが守り続けてくれている智慧とともに生きていくことなのです。

われわれが“生き残りへの鍵”と知らなければならないことこそ、この智慧と共に生きることなのです。

部族の中にのこる古い伝統、しきたり、儀式、文化、こういったもののなかに、自然と調和し、平和に行き続ける智慧が隠されているのだというのは、どんなに技術が進歩しても、変らない現実ではないかと思います。温故知新、われわれは未来のために過去を知る必要があるのではないのでしょうか。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

134 タタンカの Hunkesi: 経験の知恵

Native American Lore

今日は、とても日よりの良い一日でしたので、私は散歩に出かけました。私の父がよく居た場所に出かけたのです。私は、私が父を尋ねこの道を通ったときのあの温かい日のことを思い出していました。その当時は、私ももっとずっと若かったのですが、しかし、父は非常に賢明な男でしたが、すでにその時にはかなりの年でした。それは、その父が、偉大なる聖霊の仲間の加わる日のそれほど前というわけではありませんでした。しかし、その日の朝、私は父が永遠の生命を持っているのだと信じました。彼は、私たちが浜に出かけていったときに集めた小さな貝殻に穴をあけるために、古めかしい棒のドリルを使って、彼の家の入り口のドアのところに座り仕事をしていたのです。私は父に尋ねました。一体、お父さんは何をしているんですかと。彼は、自分が集めた貝殻を使って自分の孫や、また、ひ孫たちにプレゼントするための贈り物として、伝統的な形をしたネックレスをつくっているのさ、と言っていました。

私は、驚きの面持ちで父を見ました。彼が使っていたそのドリルというのは、まさしく手製のもの、そのもので、木でできた一本の棒に、横棒がついており、それに、有る程度の紐と、爪がついた程度のものでした。それは、何年も何年もの大昔に、貝に孔を開けるために父の父、そして、父のおじいさんが使っていたものとおなじようなものでした。そして、また、それは、我々の部族が、白人達(彼らは、その時代よりも前から、先端の爪の代わりに火打石やもっと先の尖った石を使っていたのです。)がこの地に来る前の何世代にも渡って、貝殻や石に穴を開けるために使っていたドリルとまさしく同じ道具でした。

私は、かれが、年季が入り骨のごつごつした手で、その棒の芯の周りに紐をきっちりと巻きつけ、そして、横の棒に何度も何度も押し付けて行くのをみていました。父が横の棒を押し下げると、その都度糸が解けてゆき、そのドリルが回転するのです。そのあと、父は、この横棒を取り除き、こんどはかれの老いた指で先のとがった棒をねじっていました。すると、解けた糸がまた横棒を巻き上げ、そして、もう一度その横棒を押し下げるのです。彼は、こんな風にして爪が貝殻の前と後ろ側から孔を貝の真ん中に開けていったのです。この作業は、とりわけ老いて疲れた手では、ゆっくりと、そして、かなり辛いものでした。

私は、椅子を持ち出し、そして、父の横に座ったのです。と、そこにあったかごのなかには、これから父が孔を開けるのを待っている沢山の貝殻があったのです。そして、なんと、もうひとつの籠の中には、それぞれきちんと小さな孔の開けられた貝殻が一杯入っていたのを見つけたのです。もちろん、私は父がこれらを作るために朝早くからこの仕事に精を出しているのを知っていたのですが。そして、すこし間をおいてから、私は父にこう尋ねたのです。どうして、お父さんは、もっと近代的な効率のいい孔の開け方を使わないんですか、と。私は、父が、私の持っている、いいドリルを、あるいは、父の古びた道具箱のなかにある、古めかしいけれどクランクを手で回す穴あけ器を使うように進めたかったのです。というのは、それらのどちらでも父が今使っている古い手仕事の穴あけ器よりも効率的だったからです。でも、私の父は、自分の手作業を止めることなく、相変わらず手作りの穴あけ器の横棒を動かし続けていたのです。“この仕事はなあ、私と同じように、こうやる方がいいんだよ。”と父が言いました。

“それでも、”と、私が自分の意見を言いました。“もっと、効率的よく孔を開ける方法がいくらでもあると思うよ。”

すると、父は、仕事の手を休めて、私に、“じゃ、効率的に仕事をすれば、何がいいって言うんだい？”と、聞き返してきました。

私は、父が何を言いたいのか分かりませんでした。そこで、父に“だって、もっと早くできるんだろー。”

と、父は、私をまじまじと見つめて、“これこそ、私がなぜこの古びた穴あけ器を使う理由なんだ。われわれは、もう、何百年というもの、この類の穴あけ器を作り続けてきたんだ。そいつは、その時代時代ですらいつもその役割を果たしてきたのさ。もちろんさ。私は新しいドリルをつかってこいつらの貝に孔を開けることはできるし、昼までに、それに糸を通し終わることだってできるさ。でも、じゃあ、そのあと、わしはいったい何をすれば言いというんだね？”

“私は、いまこうして、私の孫に、そして、その孫たちのその子供たちのためにプレゼントを作っているのさ。私はこうして、このプレゼントを作っているのがプレゼントを上げることと同じように、楽しいんだよ。もしだよ、いまお前が教えてくれたような、効率のよい道具を使ってこのプレゼントを一生懸命こしらえたとしたら、私は、一生懸命、精を出してやるのが私のくれるその喜びを自分で否定することになるんじゃないか。私があわてて急いで作業をし

たら、私は、自分が作っているものと楽しむ時をもつ様な人間にはなれないじゃないか。”

私は、そうしかったのだけど、わたしは父の言っていることを理解することができませんでした。結局、私は父が、一日中話をしていたし、その古びた棒のドリルで貝殻に穴を一生懸命あけていましたので、すこしばかり、いや、もしかしたら、もうすでにぼけているのではとさえも思いました。わたしは、自分の姪や、孫娘たちが、とにかく、違いが分るはずはないと思ったのです。

そんな日から、それほど経ったわけではないのですが、私の父の魂は、偉大なる創造の神と一緒にあったのです。といっても、その日は、かれが、ネックレスを仕上げ、それを彼の孫たち、そして、そのまた娘たちにプレゼントをする前というわけではありませんでした。

彼の住んでいた家を綺麗に片付けるときになって、私は、彼が彼なりに考えてのことだったのでしょうが、私の名前が書かれた包みを見つけました。それを開けてみると、それは、手作りの革でできた刀の鞘でした。縫い目は、父のシワだらけの老いた手で縫い合わせたものでしたから、ミシンのように完璧というわけではありませんでした。そこには、ビーズで雷鳥が描かれ、鞘の内側にあるお守りの象徴は、手で鋭く磨いだ、光り輝く刃でした。柄は、鹿の角でできていました。そして、その柄の根元には私の名前が掘り込まれていたのです。それは、すこし荒々しくカットされ、それを見事に鋭く磨き上げた美しさは、まさしく、驚くべきものというものでした。

私が、そのナイフを手にする時には、私は、そのナイフと鞘の根元から先端まで、私の父の魂とエネルギーを感じ取ることができたのです。父の生き様とその魂は、こんな形の贈り物となりました。ナイフの形に沿った鞘の内側は、記録帳だったのです。私の父は、そこに彼の震える手で、こう書いたのです。

“私の息子よ。私はいま、あの世に旅立つ。古い金属のかけらと鹿の角は、浜辺の貝殻や、紐と同じ様に、この老いた男の魂を私が愛した人たちのところに結びつけるに違いない。”

私は、自分の周りに私の父の知恵を感じ取ることができました。そして、自分の無知さと、恥をよく知ることができました。こうして、私は、私の父が貝殻に穴を開けるためになぜあの古い棒のドリルを使っていたのかをいえることができました。また、なにをするにしても最も効率の良い方法が、必ずしも、もっとも素晴らしいやり方というわけではないことを知りました。たとえ、その

結果が同じ様なものに見えたとしても、あるいは、ちょっとましの様な気がしたにしても、価値の対象を作っている何かを生み出しているのは手の魂なのです。

この日、私の父がすんでいた場所を歩いているときには、私も1人の老人そのものでした。私の父が古びたドリルと貝殻と一緒に座っていた場所に立ち止まり、その場所を眺め、私は、それ以後、私が終生腰に携えている私の父が作ってくれた鞘と刀に手をやり、父と、そして、その父の知恵を思い出していたのです。

技術が、文化の発展に貢献すると信じて、知恵を絞っている私には、とても反省させられる話でした。文化の伝統は、こんな風にして継承されるのかと改めて感激しました。物言わず、先人の知恵を伝承する、これこそ人間の叡智の真髄と思いますが、

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

135 狩人と Dakwa

Cherokee

ずっと、ずっと、そのまた、ずっと昔に、Dakwa という名でよばれている偉大なる魚、その魚はTocoクリークの河口近くのテネシー川に住んでいたのですが、が居ました。この魚はとても大きかったので、人間を飲み込むことなどとても簡単にできたのです。ある日のことですが、何人かの狩人たちがそのテネシー

川に沿ってカヌーで旅をしている時でしたが、Dakwa が突然、カヌーの下で起き上がり、彼らを空中高く放り出したのでした。人間達が落ちてくると、その魚は、一口でその中の1人を飲み込んでしまい、そのまま川の底に潜っていつてしまいました。

実は、この男というのが、部族の中でも最も勇敢な狩人の1人だったのですが、自分がどこにいるか分ると直ぐに、彼は、そのDakwaをやっつけ、その胃袋のなかから逃げ出す方法を考え始めたのです。その狩人は、少しのかすり傷と打ち身をした程度で、たいした傷を負っていませんでした。が、大きな魚の胃袋の中は熱くて、そして、息苦しく、自分はやがて窒息してしまうのではと恐れていました。

真っ暗ななかを手探りしてみると、そこに、そのDakwaが飲み込んだカラス貝の貝殻があるのに気づきました。しつてのとおり、この貝はとても先がとがっていたのです。そこで、その中の一つをナイフのように使って、その狩人は、魚の胃袋の壁を切り開いていったのです。すると、Dakwaは、自分の胃の中が引っかかれていますので、じっとしていられなくなり、空気を吸うために川面に浮かび上がって来たのです。男は、魚が苦しくて川をあっちにこっちに激しく泳ぎまわり、その尾びれで水を打って泡が立つほどに、胃の壁を傷つけ続けていたのです。そして、とうとう狩人は、そのDakwaの横腹を切り開くと、底からその男が溺れるほどに水が入りこんできたのです。でも大きな魚は、今度はすっかり疲れてしまいおとなしくなってしまったのです。狩人が開けた孔から外をみると、そこにDakwaが、川の土手の近くの狭い流の中で休んで居るのが分りました。

その男は、手を伸ばしてその魚の腹にあいた穴から、静かにDakwaには気づかれないように這い上がって来ました。こうして、水のなかを歩いて土手まで来ると、彼は、自分の部落のほうに帰っていったのです。ところが、村では、彼があのだきな魚に飲み込まれたのですから、死んだとばかり思って嘆き悲しんでいたのです。ところがその彼が戻ってきましたので、村人達は、彼を英雄と

崇め、彼の名誉を讃えたのです。その勇敢な狩人は自分の運命から抜け出したのですが、しかし、Dakwa の胃液が彼の頭の髪の毛をことごとく煮えつくしてしまいましたので、結局、その男は、それ以来ずっとはげ頭になってしまったということです。

この話は、結局、はげ頭の人、勇敢なんだという愉快な話のようですが、
さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

136 タバコの起源について

Crow 族と Hidatsa 族の伝説

Native American Lore

それは、ずっと昔のことですが、その頃、インディアン達は、バッファローと同じ様に精西部の平原を移動して生活していました。一つの家族は、散り散りになったり、また、天候の異変などにより元に戻ったりしていました。彼らは別々の部族というわけではなかったのです。

そんなインディアンの中に、それはもう絶世の美人というような1人の女が居りました。その彼女は双子の子供を生んだのですが、彼女はその子供たちの父親が誰であるのか知りませんでした。その美人の女は、子供たちを寝かせるために、心休まるような優しい歌を唄って上げました。そして、その歌を聴いた人はみんな、彼女のことを不憫に思ったのでした。というわけで、とうとう大地は、最初の息子を引き取ることにし、星たちが、二番目の息子を自分たちの子供として引き取ることになりました。それから以後、人々は彼らを大地の息子と星の少年と呼ぶようになったのです。

その兄弟が若者になると、なんと彼らは彼らの中間達とはちょっとばかり違う、勇敢な青年になったのです。大地の息子はどこでもバッファローの後ろに立ち止まり、そして、彼の家の柳の木の直ぐ下で、とても綺麗な石を探し、そして、食物がゆつくりと成長していくのを注意深く観察するようにたたずんでいるようになったのです。一方、星の少年は、この子もまた、狩をする時には、あまり気が進んでいるようではありませんでしたが、むしろ、家の中に居て、バッファローのずっと後ろの方からそれを見ているようになったのです。彼は、昼間の間は寝ていて、ですから、夜になると、彼は、彼の星の家族の動きを観察することができたのです。

そして、ある日のことですが、星の少年は、彷徨っているうちにそのあたりで一番高い山の麓に来たのです。その山にはそれまで誰も登ったことがありませんでした。にも拘わらず、その星の少年は、なんのこだわりもなくその山にユックリと登り始めたのです。空の近くではどこでもその星の少年がふらふらしているのです。そして、光り輝く銀色の男が彼の前に現れたのです。

その男は星でした。彼は星の少年に、自分はお前のお父さんだよ。でも、自分はあの大地のずっと向こうを一生、旅をして時間を費やすのさと言いました。そして、その息子の生きている間には、もう二度とこの山の近くに来ることはないだろうと言いました。

“そこで、私がお前を愛し、大事に思っている証拠に、私はお前に偉大な力と、夕陽の色を贈ることにしよう。そして、お前さんが不思議に思ってもいつもこの木を手放さずに持っているんだ。それを春になって温かくなったら、お前が行くところにはどこでもそれを植えてやるんだ。根っこの土にはよく肥料をやり、そして、それが大きくなったら刈り取ってやるのだ。” この三つの言葉を授かり、それを握って星の少年は、自分の銀色の胸のなかに差し込んだのです。そして、彼が、それを外に出してみると、なんとそこには、タバコの木で一杯だったのです。

彼は、星の少年に、タバコはかれらの家族のなかのだけれども、力強くし、そして自由にすると話しました。そのタバコと、そのもつ力にあやかするためには、人々はその星の少年の家族にならなければならなかったのです。星の少年は、注意深くきいていました。しかし、彼は、とても驚いて言葉にすることができませんでしたので、ただ、感激してうなずいているだけでした。そして、そのあと彼の父は彼から離れて星の世界に戻って行ってしまいました。

星の少年が山から下りてくると、そこには彼の兄さんの大地の息子が居たのです。そして、星の少年は、彼に自分の仲間になり、タバコを一緒に持つように勧めたのです。

すると、大地の息子は、笑いながらこう言いました。“弟よ、お前さんはいろいろなことを知るために山に登ることなんかないんだ。お前が山に行っている間に、私は、大地の父に会ったんだよ。そして、父は私に私の秘密を教えてくれたんだ。お前の家族は確かに強靱なさすらい人になるかもしれないが、でも、私はもっと平和な農民の家族になろうと思うんだよ。そして、自分たちはタバコ以外のいろんな作物を育てるけれど、おまえは、タバコ以外のものを育てることはできないんだ。”

“僕も、タバコ以外のものを育てたいとは思わないね。”と星の少年が言いました。“私はバッファローを追いかけて、そして、ワシのように強くなり、風のように自由に動き回るんだ。”

大地の息子が言いました。“私だって、岩のように強くなるさ。弟よ。”と彼はいい、“そして、日の出のようにいつも確かなときを過ごすのさ。しかし、我々の家族がどれだけ違った形になろうが、僕たちは決して争ったりするつもりはないさ。お前さんの父さんはお前にタバコをプレゼントし、私の父は、私に祈祷のパイプの使い方を教えてくれたんだ。僕たちがタバコを一緒に吸う時には、我々の父である私のパイプと一緒にになったお前の作物は我々に平和と夕陽の五色の色をプレゼントしてくれるだろう。”

こうして、大地の息子は岩と彼の家にある柳で作った素晴らしいパイプを差し出し他のです。一方、星の少年は、星の中心から収穫されたタバコをそれに詰め、2人は仲良く一緒にタバコを吸ったのです。

星の少年が去るときになると、彼の家族になることを望んだむらの何人かは彼と一緒に去って行きました。彼らがタバコの秘密を知る以前でさえも、その星の少年についていった人々は、名前を持っていたのですが、その彼らは自分たちのことをCrow族と呼んでいたのです。

一方、農業をすることを学ぶために大地の息子と共にそこに残った人々は、彼らの家が柳の木でできていたところから、これにちなんで、Hidatsa と呼ばれていました。

こうして、人々は別々の部族に分かれていったのですが、しかし、タバコとパイプのおかげで、彼らは敵同士とならずにすんだと言うわけです。

Crow 族も、Hidatsa 族も、サウス・ダコタからノース・ダコタにかけてすんでいた部族で、Crow 族は、狩猟民族、そして、Hidatsa 族はミズーリ川の河岸に住んでいた農耕民族でした。Crow 族はとても勇敢で、Sioux 族と対抗し、一大勢力を張っていましたが、Hidatsa 族と争ったということはなかったようです。その底に、彼らの間にこんな話があったとは、まことにもって不思議であり、感激しました。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

137 ペットのロバの話

Sioux

Native American Lore

あるところに1人の酋長の娘がいたのですが、彼女は、それは多くの人達と親しくしていらしたので、誰もが、彼女は偉大な家族の1人であることを知っていました。

彼女は成長すると結婚をして、やがて双子の子供を授かりました。これは彼女の父のむらにとっては大変喜ばしいことだったのです。その村に住んでいる女という女がみんなでその赤ん坊を見に来ました。ですから、彼女はとても幸せだったのです。

そして、その赤ん坊たちが大きくなると、彼らのお婆さんが彼らのために二つの鞍袋を作り、一匹のロバを連れて来しました。

“なあ、孫たちよ、”とその老いた婦人がいいました。“さあ、それに乗って、沢山の友達がいる子供になるんだよ。ここにロバは、とても我慢強くて、足がしっかりしているんだ。そして、それぞれの鞍袋に1人ずつ赤ん坊を入れて運んでくれるんだよ。”

そして、それは、その酋長の娘と彼女の夫が狩の旅に出かける準備ができた日のことでした。その父親は、彼の子供たちのことをとても誇りに思っていたのですが、その彼が、彼の持っている一番素敵な子馬を連れてきて、そして、鞍袋をその子馬の背中につけたのです。

“さあ、息子達は、ロバなんかに乗らずにこの子馬に乗るんだ。ロバには水瓶と夜間でも運ばせれば良いのさ。”と、彼は言いました。

ですから、彼の妻は、ロバには家財道具をくくりつけたのです。テピーの柱を二つの大きな束にして、ロバの背中の両方に跨るように結び付けました。そして、それに交差するように、今度は、ソリを縛りつけ、その中に水瓶とヤカンを入れ、さらに、革のテントをロバの背中に乗せたのでした。

しかし、そのロバが後ずさりし、悲鳴を上げ、蹴り出したのはそれから直ぐにあとのことでした。彼は、テントの柱を壊し、水瓶とヤカンを蹴飛ばし、革のテントを引き裂いてしまいました。ロバを鞭打たれると、なおさら、暴れ出したのです。

とうとう、彼らはお婆さんにこのことを打ち明けました。と、彼女はにっこりと笑って、“ロバは子供他のものだって、私は言わなかったかい?” 彼女は、

今度は、涙を流しながら、“ロバは知っているんだよ。赤ん坊達が、酋長の子供だってことを。お前さん、考えてもみな。ロバは、水瓶やヤカンなんかでは、自尊心が傷つくと思わんかね?” そして、彼女は、子供たちを取り出してきて、ロバの背中にのせてやりました。と、同でしょう。ロバは直ぐにおとなしくなったのでした。

狩に行く連中は村を去り、旅に出ました。しかし、高い木の生い茂った森のそばを通り過ぎた次の日のこと、敵の部族の集団が、彼らの馬を鞭打ちながら、戦争の雄叫びを喚きながら襲ってきたのです。男たちは弓矢をもち、やりを手にして戦ったのです。長い戦いのあと、敵は、逃げて行きました。しかし、狩に出かけていた一団が村に戻ってきた時一あのロバと2人の赤ん坊は、さて、一体どうなっていたのでしょうか? 誰もそのことについては知りませんでした。長い間、村人達は彼らを探し回りました。しかし、それは無駄だったのです。そして、とうとう、父親が悲嘆にくれて村に戻ってきたのですが、母親にはとても素晴らしいことがあったのです。というのも、彼らがおばあさんの居るテントにやってくると、なんと、そこには鞍袋入った二人の赤ん坊と一緒に利口なロバがいたのでした。

ロバは、のろまの代名詞のように言われていますが、さてさて、なかなか、利口な動物だというこの話、格好のいいことばかりが人生ではないよということを見せてくれているような気がします。インディアンたち、しかも、騎馬が得意なスー族のなかにもそんな教えがあるとは、とても痛快です。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

138 忘れられたトウモロコシの穂

Sioux

Native American Lore

ある Arikara 族の女が、あるとき、冬に備えてトウモロコシを畑で収穫していました。彼女は、トウモロコシの実をむきながら、それを彼女の皮袋に入れてつぎから次へと入れて生きました。そして、殆どの収穫が終り、彼女が家に帰ろうとすると、そこにかすかな、まるで、小さな子供がつぶやくようなか細い呼び声が聞こえたのです。

“どうか、私をここに残しておかないでください。私を残してどこにも行かないでください。”

女はびっくりしました。“どこかに子供でもいるのかな?”と彼女は独り言を言いました。“だれか、このトウモロコシ畑の中に置き去りにされた子供でもいるのかしら?”

彼女はトウモロコシの入れ、口をしっかりと閉じた袋をそこに置き、声の聞こえるほうを探しにいったのですが、しかし、そこには誰もいませんでした。

そして、彼女が帰ろうとすると、また、子供の声が聞こえてくるのです。

“どうか、私をここに残しておかないでください。私を残してどこにも行かないでください。”

こんどは、彼女はじっくりと探して回りました。そして、やっとのこと、その畑の片隅ので、トウモロコシの葉に隠れている一粒のトウモロコシの実を見つけたのです。この鳴き声を出していたのは、実はこのトウモロコシの実だったのです。そして、この話がされてから、すべてのインディアンの女は、とても注意深くトウモロコシの実を集めて回るようになりました。こうして、栄養豊かな自然の食物の恵みは最後の最後まで、決して粗末にしたり、あるいは、無駄をしたりしないようになり、偉大なる謎が解き明かされたのです。

この話は、各地のインディアンに伝わる伝説です。とうもろこしが彼らにとってどれだけ重要なものなのか。そして、自然の恵みは大切にしなければならないことが彼らにはよく分っていたのです。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

139 世捨て人、それとも、トウモロコシの恵み

Sioux

Native American Lore

自分の部族の村から随分と離れた、深い森に1人の世捨て人が住んでいました。彼のテントは、バッファローの毛皮でできていました。そして、彼の身にまとっている着物は鹿の毛皮で作ったものでした。この老いた世捨て人の生活は、普通の人たちの生活している場所からはずっと離れたところだったのです。

彼は、森の中の様々な植物の特徴を研究し、薬になるような貴重な木の根を集めながら、森の中を一日中歩きまわっていたのです。それが、あるとき、1人の戦士がその老いた世捨て人の所にやってきて、自分の部族のために、その老人の薬をもらって行きました。というのも、この老人の薬というのが、他のどんなものよりも良く効くものだということをみんなが知っていたからです。

一日中森のなかを歩きまわったあと、この世捨て人は夜遅くになって、ぐったりと疲れ果てて、自分の家に戻ってきて、直ぐに横になってしまいました。そして、かれが自分の足のところで、何かむずむずするのを感じたのは、ちょっとばかりの眠りついた時でした。そして、目を覚ますと、彼は、なにか黒いものが動いているのに気が付き、鏃のついた矢を手にして、そのほうに腕を伸ばしたのです。

老人は考えました。“これは、聖霊に違いない、ここには、私以外には誰もいないのだから！”

すると、どうでしょう。”と、言うではありませんか。“ああ、いいとも、私はその招待を受けるさ。”と老人が言いました。そして、かれは起き上がると、毛皮を身に纏い、その声について行きました。

家の外のところで立ち止まり、回りを見渡しましたが、底には、あの暗い影のあとは何も見つけることができませんでした。

． “お前さんが誰であろうと、また、何であろうと、すこし待っておくれよ。私にはお前さんの家がどこにあるのか分らないじゃないか。” と老人がいました。ところがそれには何の答えもありませんでした。そればかりが、彼は、誰かが森の方に歩いていくような足音さえ、何も聞くことができませんでした。そこで、老人は、また自分のテントの中にもどり、直ぐに眠りについてしまいました。ところが、次の日の晩にも同じ様なことがおこったのです。そして、その世捨て人は、また、その何者かのあとをつけようとしたのですが、また、前と同じ様においていかれただけでした。

老人は、誰かが、彼をからかっているに違いないと思い、とても腹を立てたのです。そして、自分の夜の憩いの一時を邪魔しているに違いない、その正体を暴いてやろうと決めました。

次の日の晩になり、彼は、自分のテントに矢が通りぬけるほどの大きな穴を開けておき、ドアのそばに立って、見張っていたのです。そして、黒いものがやってくると直ぐに、ドアの外にでて、こう言いました。

“爺さんよ、私は、ついて行くよ・・・、”、でも彼は、矢を射ようと思って居ましたので、言葉をきろうとしませんでした。そして、彼は、その矢が、まるで小石の袋に突き刺さったかのような音をたてて、何かに命中したその音を聞いたのです。彼は、その夜は、彼の矢が何に命中したのかを確認するために、外にでませんでした。そして、次の日の朝早く、外にでて、あの黒い影がたっていたあたりを見回したのです。すると、そこには、トウモロコシの実の小さな塊がありました。そして、なんと、その塊から、道に沿って、一筋のトウモロコシの線ができていたのです。彼は、それを辿って森の中、奥深く進んで行きました。そして、彼がとても小さな丘のところに来ると、その筋は終わっていたのです。そこにはとても大きな輪になっていて、そこには、草が綺麗に刈り取られていたのです。

“トウモロコシの筋は、この輪の端で止まっている。” と、その老人はいい、“ですから、これは、私を招待してくれた人の家に違いないのだ。” と思いました。彼は、持っていた骨でできたナイフと手斧を取り出し、その輪の中心に穴を掘って行きました。そして、自分の腕ほども掘り下げたときに、そこに乾燥した肉の袋があるのに気がつきました。そして、そのあと、かれはインディアンの根株の袋、そして、乾燥したさくらんぼの袋、トウモロコシの袋、沢山の袋の最後には、隅のほうにほんの一カップほどのトウモロコシが僅かに残っているだけの空の袋を見つけました。そうです。その袋には、彼の矢が突き刺

さってできた、穴が開いていたのです。袋のその穴から、トウモロコシが道に沿ってこぼれ落ち、この老人をこの貴重な隠し場所に導く目印をつけてくれたのです。

この時以来、この世捨て人は、部族の者たちに、旅にでるときにはどのようにして自分たちの食料を確保すればよいのかを教え、その責任を負わされたのです。彼は、みんなにどんな風にして穴を掘ったらよいのか、そして、その中に、どんな風に食料をいれ、土をかぶせておけばよいのかを説明し続けました。このやり方に従って、インディアン達は、いつも夏に食料を保存し、そして、秋が来ると彼らは、自分たちの食料の貯蓄してある場所に戻って行き、そこで、自分たちが必要とする時には、いつでも新鮮な食べものを手にすることができるようになったのです。

こうして、その老人は、この老いた世捨て人が見つけ出す前までは誰も知ってさえいなかったトウモロコシの、その発見者として感謝されたのでした。

トウモロコシを大事にするインディアンには、その発見をこのように神聖なものとし、食料としていかに大切にしているかがよく分ります。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

140 ヒマラヤスギの伝説

Native American Lore

Cherokee

昔、昔の、そのまた昔、チェロキーの部族がこの地球上に新しい部族として出現したときには、彼らは、もし、この世に権利などというものが存在しなければ、人々の生活というものは、もっとずっと良くなると考えていました。そして、彼らは、いつも明るく、ですから、決して暗闇にはならない Ouga（つまり、創造の神）を崇めていました。

その創造の神は、彼らの声を聞き、夜を消してしまいました。ですから、世の中は直ぐに昼間だけになったのです。森は、木々が生い茂りました。そのため、道を歩くことばかりでなく、その道を見つけ出すことさえ難しくなってしまったのです。人々は、十もろこしや、そのほかの作物の間に伸びてくる雑草を抜かなければならず、一日中畑仕事に精を出していました。それからというもの、暑くて、暑くて耐えられないような日々がずっと続いたのです。やがて、これでは眠りにつくこともできなくなると思い始め、いらいらしてきて、彼らの間に争いごとがおこりはじめました。

かれらが、自分たちの過ちに気がつくにはそれほど時間がかかりませんでした。そして、その創造の神に、“お願いします。一日中、昼間だけにしてほしいなどと望んだのは、私たちが間違っていました。自分たちは、いま反省をして、一日中、夜にして欲しいと思っています。”と言いました。しかし、その創造の神は、この新しい願いを一時保留にしました。そして、たぶん、この人たちは、例え、すべてものものが、両方の間で、つまり、昼と夜、生と死、正と悪、豊富な食料の時代と飢餓の時、と言うのが良いかもしれないが、その間で作られていたとしても、この人たちの言うことが正しいのかも知れない。創造の神は人々を愛していました。ですから、彼らが望むように、すべての時を夜にしたのです。

昼がなくなり、この地球上は夜だけになりました。するとまもなく、作もつの成長が止まり、この世は、とても寒い季節となったのです。ひとびとは、暖

をとるための薪集めに終始するようになりました。狩の動物達の肉にもありつけず、そして、作物も成長が止まってしまい、やがて直ぐに人々は、寒さと、病気に悩まされ、飢餓状態になったのです。そして、沢山の人たちがなくなってしまいました。

生残った人々は、もう一度集まって、創造の神にお願いしようと考えました。“どうか、私たちを助けてください。神様。”と、泣いて訴えたのです。“ああ、私たちはなんと恐ろしい間違いをしていたのでしょうか。あなたは、確かに、昼と夜をはじめからそうであったように、完璧に作り出しました。でも、私たちは、あなたに許しを請いたいのです。どうか、また、以前のように昼と夜とを私たちのために創造してください。”

創造の神は、網一度、この人々の要請を聞き入れました。そして、人々がお願いしたように、昼と夜が、まるで、それがはじめからあったように始まったのです。それぞれの日は、明るいとときと暗い時に分けられました。気候はずっと快適になり、作物は再び育つようになったのです。獲物の数がとても沢山になり、いつも狩はうまく行きました。食料が豊富になると、病気はずっと減りました。人々の間には、御互いに思いやりの気持ちが芽生え、そして、尊敬しあうようになったのです。時代はとてもいい時代になりました。人々は、自分たちに生命を与えてくれたこと、そして、沢山の食料を恵んでくれたことを創造の神に感謝しました。そして、創造の神はそうした人々の感謝の気持ちを受け入れ、人々の間に笑顔があることを知り、とても喜びました。しかし、夜の長い時代に沢山の人々が死んでしまいましたので、創造の神は、彼らが夜のために死んだのだと悔いていました。そこで、創造の神は、彼らの魂を新しく創造した樹のなかに安置しました。そして、この樹は a-tsi-na tlu-gv lah-see-na loo-guhl、つまりヒマラヤスギの木と名づけられたのです。

ですから、あなたがそのヒマラヤスギの甘い香をかいだり、あるいは、森の中にその木がたっているのを見たときには、もし、あなたが Tsalagi [Cherokee] であるなら、あなたは、自分たちの祖先に会っているのだと思ってください。

ヒマラヤスギの木には、Cherokee の人たちを守るとても強力な聖霊があるのだと言い伝えられています。沢山の人々が、自分の首にまいたお守りの袋のなかに、ヒマラヤスギの木の小さなかけらを入れて、持っています。そればかりか、家の入り口にも、同じ様にして悪魔の霊が中に入らないようにお守りとして掲げられているのです。伝統的な太鼓は、ヒマラヤスギの木から作られています。著者はこのことを信じているのでしょうか？ って。 勿論です。わたし

だって、このヒマラヤスギの木のかげらを私のお守り袋の中に入れ、いつも、それを肌身離さずもっていますよ。創造の神は、寂しさから人々を作ったりしたのではありません。創造の神は、人間に対する寛大な心と愛を示したかったのです。神から授かった恩恵と恵みをすなおに受け入れ、そして、いつもそれらに対して感謝の気持ちを持つようにしたいものです。

ヒマラヤスギは、アメリカ大陸のいたるところに生い茂っている親しみのある木ですが、それを、Cherokee の部族の人たちがこんなふうに信じていたことをしり、改めて、彼らの純真な気持ちに頭が下がる思いです。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

141 狼ダンス

Native American Lore

私は、自分の孫に私の経験を話してあげたいと考え、彼を本当に静かな、森の中に連れていったのです。彼は、そこで、私の膝の上に座り、私が話す、自然の中の生き物に与えられたいろいろな能力についての話を聞いていたのです。私が、木々がどんな風にして、私たちに食料を、家を、喜びを、そして、宗教の教えを与えてくれているのかという話をしている間、身の一つも動かすことがなかったのです。孫は、彼が我々を守ってくれている狼とどんなふうに拘わっているかと言う話しをすると、とても恐がっていました。そして、私が神聖

なる狼の歌を彼に聞かせてあげるといって、今度は、とてもよろこんだのでした。私は歌のなかで、狼に、私が狼の儀式をしている間、私たちの所に来て、私の孫と狼とのつながりが一生のものになるように、訴えたのです。私はおおいに歌いました。

みんなのこころの中にしっかりと刻まれるようにとの願いが歌声の中に響くようにと唄いました。

私の言葉の中に、私が自分たちの祖先から引き継いだ力がこもるようにと唄いました。

私の合わせた両手の中には、トウヒの種が一これこそ、創造に繋がるものなのですが、その種があると唄いました。

私の目は、愛で輝いているよと、唄いました。

そして、その歌は木から木へと、太陽の光線に乗って、伝わり広がっていったのです。

私の歌が終わると、その一瞬は、まるで世の中のすべてのものが、狼はどんな返事をするのか、それを聞くように耳をすましているようでした。私たちは、長いこと待ちました。しかし、そこには、何の響きも帰ってくることはありませんでした。そこで、私はもう一度歌を唄ったのです。謙虚な態度で、でも、できるだけどうか狼がくるようにとの気持ちをこめて。私の喉がひりひりして、そして、声が枯れるまで唄いました。

ふと、その時、私は、なぜ一匹の狼も私の神聖なうたを聞いていないのかわかったのです。それは、私の心のなかに、悲しみに満ちたものが何一つなかったからなのです。私は、もはや私の孫に、過去の、そして、私たちの経験のなかにある信仰というものを伝えることができなかったのです。

そして、最後に、ただ、“ああ、時代が変わってしまったのだ!” と、つぶやくのがやっとでした。すると、“もう、家に帰ってもいい?” と、孫が、まるで、TVの自分の好きな番組を見るのに間に合うかどうかを確かめるかのように時計を覗きながら、聞き返してきました。そのあと、私は、彼が見えなくなるまで見送り、静かに涙を流していたのです。ああ、時代が変わってしまったのだ!

Burrard 海峡に住んでいる Salish 部族の Dan George 酋長の話。

時代の移り変わりとともに、インディアンの部族に伝わる文化、伝統がどんどん消えてしまう、その寂しさが伝わってくるような気がします。人間は、涙を忘れるとすべてを失ってしまうということではないでしょうか。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

142 角のある蛇と英雄

Cherokee

Native American Lore

それは、それは昔のことですが、そのころまるで太陽の光のようにぎらぎらと輝いているとても大きな蛇たちがいました。そして、頭には二本の角があり、人々をひきつける不思議な力を持っていたのです。こうした蛇たちに出会うということは、いつも何か悪いことがおこる前触れでした。だれもが、その蛇のほうにまっすぐに近づいていくどころか、そこから懸命に逃げ出そうとしたのです、が、結局、その蛇に呑み込まれてしまいました。

とても能力のある祈祷師、さもなくば、狩人だけが、その二本の角がある蛇を退治することができたのです。蛇に勝つには特別な祈祷の力と強さが必要だったのです。狩人はその蛇の肌の七番目の筋のところに彼の矢を射らなければなりませんでした。

あるとき、Shawnee インディアンの若者が、Cherokees 族によって捕らえられてしまいました。そして、かれは、もし彼が角のある蛇を見つけ、殺すことができるなら自由してやると宣告されました。そこで、その若者は来る日も、来る日も洞穴のなかや、森の茂っている山々を狩して歩き回りました。そして、やっとのこと彼は、テネシーの山奥のなかで、一匹の蛇と出会いました。

その Shawnee の若者は、松ぼっくりを燃やして大きな火の輪を作りました。そして、その二本の角のある蛇のほうに歩いて行ったのです。すると、その狩人を見て、その蛇は俄かに頭を上げたのです。Shawnee の若者が叫びました。“自由か、それとも、死だ！ ”

そこで、彼は注意深く狙いを定め、矢をその角のある蛇の七番目の筋の所に射たのです。そして、急いで振り返り、火の輪の真ん中に飛びこんだのです。というのは、その火の中は蛇からは安全の場所だとわかっていたからです。

蛇の体から毒気が噴出して流れて来ました、が、それはまさに火のところで止まっていたのです。こうして、Shawnee の若者の勇敢さが認められ、Cherokees 族のみんなが、彼に約束したように自由を与えることに同意をしました。

それから四日がたち、何人かの Cherokees 族の男たちが、あの若者が角のある蛇を殺した場所に行ってみました。そして、彼らは蛇の皮と骨のかけらを集め、それを結んで、宗教に使う道具にしました。彼らはそれを大事にして、自分たちの子供や、孫の代に伝えたのです。というのも、その道具が彼らの部族に幸運をもたらしてくれると信じていたからです。

そして、その同じ場所には、黒い水の小さな溜まりができていました。この水の中に Cherokees 族の女達は、彼女たちが籠を作るときに使う小枝を浸したのです。彼女たちは、他の色に混じって彼女たちの籠を黒く染めるにはどうすればよいのかこうして知ったのです。

インディアンの工芸品のなかには、黒で見事にいろ塗りをしたものが珍しくありません。ひょっとしたら、その黒い染色の方法がこんな風にして先祖から伝わっていたのかと思うと、人間の知恵というものはたいしたものだと感心いたしますが・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

143 氷男の贈り物

Cherokee

Native American Lore

Great Smoky の山々に秋深い、ある日のこと、森の乾いた木々が火事になりました。そして、人々がこの火を消し止めることができず、火は大きなポプラの木にもえひろがってしまいました。木は、それこそ、すべて灰になってしまいうほど強く燃え、そして、根のほうまで炎が燃えて行き、大地にできた洞穴まで燃やしたのです。森の火は一向に衰えず、その洞穴はどんどん大きくなっていきましたので、人々はとても恐ろしくなり、この世の中のすべてが燃え尽きてしまうのではという恐怖に襲われました。人々は、何度も何度も火を消そうと努力したのですが、しかし、火の勢いは衰えようとせず、もう、どうしてよいのか分からなくなってしまいました。

そして、ついに、酋長が、こう言ったのです。“この火を何とかできるのは、ここからずっと北のところに氷の家に住んでいる氷男しかいない、と。そこで酋長は、北のずっと彼方に住んでいる氷男のところに2人の使いを出そうと、長老たちを集めて会議をすることにしました。

そして、長い旅の果てに、その使いの男たちは氷男を探しだすことができたのです。彼は、二つに編んだ髪が地面に届くほど長い髪をした、とても年寄った男でした。使いの者たちが、なぜ、彼の助けを求めてここまでやって来たのか、そのわけを話したのです。

“おーっ。そうだったのですか。”と、その氷男がうなずきました。“分った。私なら、その火を消す手助けができますよ。”とって、彼は、編んだ自分の髪の毛を解き始めたのです。そして、その髪の毛を全部解きほぐすと、彼は、それを片ほうの手で、束にして掴み、もう一方の手の平に打ちつけたのです。と、なんと、その使いの者達は、自分たちの顔に冷たい風を感じたのです。そして、もう一度、その男が彼の髪を手のひらに撃つと、今度は、なんと、かすかに雨が降り出したのです。三度目の、髪を手のひらに打ち付けると、雹が

大地の上を転がりはじめ、そして、四度目になると、彼の髪の毛の端から、噴出しているかのように、物凄い雪が降り始めたのです。

“さあ、村に帰るがいいさ。” 氷男が言いしました。“そして、私も、二・三日、そこに留まることにしよう。” 使いのものたちは、なおも物凄い勢いで燃え続ける火のまわりに集まり、がっくりとしている村人達のところに急いで駆けつけました。

それから、二・三日がたち、彼らは恐ろしい面持ちで火を眺めているあいだに、北のほうから、強い風が吹いて来たのです。彼らは、あの氷男がやってきたのだとわかりました。しかし、それだけの風では、火は衰えるどころか、却って勢いを増してしまったのです。そのあと、ちょっとした雨が降ってきましたが、しかし、その雫程度では、沸騰した蒸気で、火が却っていよいよ高い温度になっていくように思われただけでした。そして、雨が、勢いのある雹になってふって来ましたが、それでも、火の勢いはまだ衰えるような様子はありませんでした。赤く燃えた炭から真っ白な煙の雲を作っただけでした。

人々が非難をするために、自分たちの家の中に逃げ込みむと、今度は、燃え盛る沢山の岩の間にまで雪の塊を吹き込むような、物凄い雪交じりの竜巻がおこり、アット言う間に、燃えさかる火だねが消えてしまうように、白い雪の絨毯で包み込んでしまいました。すると、もう、深い洞穴の中でさえ、煙の一筋もなくなってしまいました。

そして、最後の嵐が吹き終わり、人々が森に戻ってくると、そこには、小さな池が残っていました。こうして、今日でも、Great Smokies の部族の人々は、その湖の水のしたで、いまなお、炭がたてているパチパチという音を聞くことができると、言い伝えているのです。

テネシーからノースカロライナの州境にある国立公園が Great Smoky Mountains です。このあたりには、かつては Cherokees の人たちが住んでいたのですが、ここに、鉄鉱石や、石炭の鉱脈が発見されると彼らは、オクラホマに強制疎開させられ、その歴史は悲しい物語があります。その Smoky の山々にこんな伝説が残っているのは、すこし、悲しい思いがしました。ここをドライブし、その土地を見ましたから、余計、彼らの伝説の意味が分るような気がしましたが・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

144 小さな戦士と女祈祷師

Sioux

Native American Lore

インディアンの小さな部落が冬のキャンプ地を引き上げ移動するために、自分たちのテントを湖の見える丘の上に輪にして片付けていました。そのちょっと下ったところにはお墓がありました。そして、そのお墓を隠すような格好で、桜の木が生えていました。しかし、地面がいくらか沈み込んでしまうと、そのお墓は、ちょっとしたくぼみができ、余計にはっきりするようになってしまいました。

狩に行った1人の村人が、その桜の木の林のところをぬけて、近道をしたのです。そして、かれが、その邪魔になっている木の枝を押し除けると、そこにお墓のくぼみがあるのを見つけました。しかし、彼は、それは、ただ雨水が土を流し出した穴くらいにしか思いませんでした。しかし、その上に足を踏み入れようとするや否や、彼はびっくり仰天し、躓き、倒れてしまいました。これは不思議だと思い、彼は、後ずさりをしてもう一度試してみることにしました；しかし、やっぱり今度もひっくり返ってしまったのです。かれは、村に帰り、自分が経験したこの不思議なことを長老に話しました。村人達は、ずっと以前に、ここに、魔術を使う祈祷師の女を埋葬したことを思い出しました。彼をひっくり返したのは、紛れもなくその彼女の魔法だと思い込みました。

その村人の不思議な体験が村中に広まり、沢山の人がそのお墓を見てみようと思いました。そんな中に、死んだ祈祷師の女のこととても恐くて、おどおどしていた6人の小さな少年達がありました。でも、彼らは自分たちを勇敢な戦士と名づけている小さな遊び仲間だったのです。とても、いたずら好きのやんちゃたちで、彼らは髪の毛といえば、いつもぼさぼさ、そして、ものを投げつけたり、一時たりともおとなしくしているような子供たちではありませんでした。

“戦士の人に、僕たちと一緒に行くように頼んでみようじゃないか。”と彼らはいいい；彼に会いに行こうとところに誓いました。

“よし、分った。”と、戦士がいい、“お前達と一緒に行くことにしよう。けど、その前に私はやらなければならないことがある。だから、お前達はあっちの道をあの丘のほうに行くんだ。そして、私は、この道を急いで行くことにしよう。そのあと、あのお墓の近くで落ち合うんだ。”

こうして、6人の小さな子供たちは、言われたようにして、お墓の近くまでやって来ました。そこで、彼らは立ち止まると、

“お墓は一体、どこにあるんだろう？”とあたりを探しました。

一方、戦士の方は、いたずらっけ一杯に、この小さな友達をからかってやろうと考えていました。彼らが見えなくなると、急いで湖の辺まで走ってゆき、手一杯に泥を掴むと、今度は、それを自分に顔に塗りたくり、髪にべとべとにこすりつけ、手には、骨から腐り落ちた肉がついた、今しがた生き返った死体のように泥を固めてつけました。そして、お墓の中に隠れて横になり、そこで少年達を待っていました。

そこに少年達がやってくると、彼は、以前よりももっとおどおどしていました。というのも、あの戦士の姿がみえなかったからです；しかし、彼らは、そのお墓を見ないで村に帰るのは、少し、戸惑いました。なぜなら、お墓を見ずに帰ったりしたら、歳寄りたちが、自分たちのことを意気地なしを呼ぶのでは、恐れたからです。

ですから、彼らは、お墓のあるほうに少しずつ近づいてゆきました。そして、彼らのうちの1人が、恐々とした声で叫びました。

“どうか、お婆さん、僕たち、あなたのお墓を荒そうなんて思っていないんです。ただ、ちょっとだけどんな風に横に寝ているのか見たいだけなんです。腹を立てないでください。”

すると、まるで歳寄りの女のような、かすかな震えた声がして、こんな風に言いました：“Han, han takoja, hechetuya, hechetuya!、分った、分った、よし、よし。”

もう、少年達は、老婆が生き返ったと思い、度肝を抜かれました。

“うわ一つ。おばあさん、”、と、少年達は、息も途切れ途切れに、“どうか、許してください。勘弁してください。帰りますから。”

そして、戦士が顔を持ち上げ、桜の木の枝に手を伸ばしました。ジクジクとした泥が落ちている彼の体を見ると、それはまるで、まさしくいま墓の中から生き返った死人のように見えたのです。少年達は、溜まらず悲鳴をあげました。一人はなにが起こったのかよくわかりませんでした。が、少年たちは、村のある丘まで跳んで逃げてゆき、お母さん達の居るテントまで来ると、たちまち、泣き出して姉妹ました。

Dakota のキャンプでは、テントはみんな中心に向って輪を作っていましたので、少年達は、彼らがびっくりし手テントに駆け込んだときには、どのテントからもよく見えたのです。子供たちの恐れおののいて喚いているのを聞いて、キャンプの中の女達がみんな、何が起こったのかとテントの入り口のところまで出てきたのです。と、そこに、子供たちにまちがって恐怖に陥れた、小さな戦士が彼らのあとを追ってやって来ました。髪の毛は泥でべとべとになり、自分のなりには気を使わず、喚いたのです。

“僕だよ、僕だよ!”

女達は甲高い声を上げ、そして、村には、恐怖が伝わりました。戦士は、自分のお母さんのテントに、彼のいたずらで恐がらせてやろうと、飛び込んで行きました。すると、中にいた母親は、水がめとヤカンを放り投げて、そのテントから他の者達と一緒に飛び出して行きました。それから、彼が湖まで行き、その泥を洗い落とすまでは、村人は誰も 1 人では、その哀れな小さな戦士の近くには寄ってこなかったということです。

いたずらと、時として、度を過ぎると却って自分に仕返しが来ると言う話し、何事も程ほどがいいですね。でも、楽しい話でした。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

145 行方不明になった妻

Sioux

Native American Lore

ある、ダコタの少女が1人の男と結婚しました。その男は、彼女を幸せにすると約束したのですが、しかし、彼はその約束をまもらなかったのです。彼は、理由もなく、そして、しくじりをすると、彼女を時々ぶつようなことをしていました。この彼の残酷さに耐えられなくなり、その彼女は逃げ出したのです。そこで、村中の人たちが彼女を探しに出かけたのですが、逃げた女の形跡を何も見つけることはできませんでした。

一方、逃げ出した女のほうは、その日は一日、そして、次の日夜もさ迷い歩きました。そして、次の日に彼女はある1人の男に出会いました。その男は彼女に一体お前は誰かねと尋ねたのです。彼女は、そのことについては何も知りませんでしたが、しかし、彼は、実は1人の男ではなく、狼の群れの頭だったのです。

“さあ、私と一緒においで。”と彼は言い、彼女を大きな村につれて行きました。彼女は、そこに、——灰色や黒の森の狼やコヨーテが、それはもう沢山の狼がいたものですからびっくり。それは、あたかもそこがまるで狼の世界であるかのように思われました。

狼の頭は、その若い女を大きなテントのところまで連れて雪、そして、彼女に中に入るように促しました。彼女に何を食べたいのか尋ねました。

“バッファローの肉が欲しいの。”と彼女が応えました。

すると、彼は、二匹のコヨーテを呼び、彼らにその若い女が望んでいるものを持ってくるように命じました。そして、コヨーテは飛び出してゆき、直ぐに、いましとめたばかりのバッファローの子供の肩の肉を持って戻ってきたのです。

“どうやってそれを料理するのかね?” と、狼の頭が聞きました。

“煮るのですわ。” と、若い女は応えたのです。

すると、コヨーテが呼ばれ、直ぐに道具箱に入ったナイフを取りに行きました。そして、若い女は、そのナイフでバッファローの肉を薄く切り開き、それを食べたのです。

こうして、彼女は一年のあいだ、ここで生活し、そのあいだ、狼たちは彼女にとっても親切にしました。そして、あるときに、狼の頭が彼女に向かってこう言いました。

“お前さんの部族のものはバッファローの狩に出かける準備をしているようだ。明日の広ごろ、彼らがここにくるはずだ。そしたら、お前さんは必ずでていって、彼らに会うがいい。さもなければ、彼らは、我々を襲撃し、そして、我々を殺すことになるだろう。”

そして、次の日のお昼ごろになると、その若い女は、近くの丘の上の天辺に上ってゆきました。すると、彼女のほうに向かって、何人かの若い男に馬にのってやってきたのです。彼女は立ち止まり、そして、自分の手をあげ合図をしましたので、彼らは、彼女に気がつきました。が、彼らは、彼女のずっと近くに来るまで、彼女が一体誰なのか分りませんでした。

“もう、一年にもなるが、我々の部族から1人の若い女が行方不明になったのだが、ひょっとして、もしや、あなたは、その彼女ではないのでしょうか、あなたは一体どこに居たのですか” と、彼らは聞いたのです。

“私は、狼たちの村で、彼らと一緒に生活していたのです。どうか、彼らに危害を加えないでください。” と、彼女が返事をしました。

“分った。村に戻って、このことをみんなに話そう。” と彼らはいいい、“明日の昼に、網一度、あなたに会うことにしよう。” と、その場を去って行きました。

若い女は、狼達の待っている村に戻り、そして、次の日に、また近くの丘のところに、ただ、昨日とは違った丘だったのですが、そこに行きました。と、直ぐにそこで、彼女は草原のずっと向こうの方から一列になってやってくる一

団を見つけたのです。そして、その先頭には戦士たちが、そして、そのあとには、女達とテントが連なっていました。

その若い女の父親と母親は、彼女に再会し、これ以上の幸せはないと喜びました。しかし、彼らが彼女の近くに來たとき、若い女は氣を失いそうになってしまいました。というのは、彼女は、もはや、人間の匂いがなかったのです。彼女は我に帰って、こう言いました。

“私のお父さんも、そして、獵師たちみんな、あなたたちは、バッファローの狩に行くべきです。明日、必ず、もう一度、獲物の舌と上等な肉のかけらを持って、ここに来てください。

これが彼らが約束したことです。村の男たちみんな、彼らの馬に跨り、そして、大きな狩に出かけました。次の日になり、彼らは自分たちの馬に一杯のバッファローの肉を乗せて、村に戻って來ました。若い女は、彼らに指示して、二つの丘の間にその肉を柱のように積み上げたのです。その肉の量がそれはそれは沢山でしたので、二つの丘は、その肉の柱で、まるで、橋を渡したような形になりました。その肉の柱の真ん中で、若い女は赤い旗のついた柱を立てました。彼女は、そうしてから、まるで狼がするように、大きな声で、吠え始めたのです。

それは、一瞬、この世が狼たちで埋め尽くされたような雰囲気でした。彼らは、その肉の柱に群がり、そして、アッという間に最後の一かけらまで食べつくしてしまいました。

こうして、その若い女は、彼女のもとの部族のところに帰ることができたのです。

彼女の夫は、彼女が戻ってきて、彼ともう一度、一緒に暮すように望みました。彼女は長いこと、これを拒んでいたのですが、しかし、最後には、夫の願いを受け入れ、また、元のように一緒に生活することになり、幸せに暮したということです。

インディアンの女が、狼に救われ、そして、その狼にこんな風にして恩返しをしてから、また、もとの人間の社會に戻るといふ話。そこには、狼達と共存していくインディアンの姿が見えるような気がしましたが、・・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

146 チョウセンアザミとビーバー

Sioux

Native American Lore

湖の辺に、太陽の光で緑の葉を瑞々しく輝かしているチョウセンアザミが生えていました。それをとても自慢に思っていたので、この世をとても満足に思っていたのです。ところで、この湖の水際には、ビーバーの住処がありました。夕方になり、太陽が沈むと、ビーバーが岸に上がってきて、土手の回りをうろついていました。こうして、ある日の晩のこと、このビーバーがチョウセンアザミの生えている近くにやって来たのです。

“やあ、ご機嫌さん、”と彼は挨拶をし、“あなたは、随分と自分のことを自慢しているようだけど、一体あなたは誰なんです?” “私はチョウセンアザミさ、”と返事をする、と、“そしてね、私には、とってもハンサムな従兄弟がいるけど。ところで、あなたこそ、誰なんです?”

“ビーバーの仲間ですよ、沢山の家族が居るんです。そして、私は水の中にすんでいるんですがね。私は、石のように一日中同じ場所にいるなんてとてもできないんです。

“でも、一日中、同じ場所に生えているからって、”と、チョウセンアザミが、言い返しました。“少なくとも、私は、汚い水のなかで泳いだり、泥の中に巣なんかつくらないよ。”

“なんだ、あなたは私のこの綺麗な毛皮に嫉妬を妬いているのかね?”とビーバーがわざとらしく言いました。“確かに、私は泥の中に自分の巣を作っているさ。でも、ほら、私のこの綺麗な毛並みをみてごらんよ。それに比べれば、あなたは半分土の中に埋まっているし、人間がきて、それを掘り返したら、あなたなんか、直ぐにしおれてしまうだろう。”

“なにさ。その綺麗な毛皮だって、いつもじゃこの匂いがしてさ。”と、今度はチョウセンアザミがやじりました。

“確かに、そうさ。”とビーバーがいい、“でもさ、人間は、みんな私をよく思っているよ。彼らは、私の尻尾についている素敵な臍をとるために毟をしかけ、そして、綺麗な若い女達は、私の尻尾から白い歯で、その臍を噛み切り、それで糸を作っているんだよ。”

“なんだ、だからどうだって言うの。”と、チョウセンアザミが笑いました。
“私なんか、化粧をし鳥の羽で着飾った素敵な若い戦士が来て、私を掘り出すのよ。そして、彼らの格好のいい手でもって土を払い落とし、簡単に綺麗にして私を食べるのさ。”

チョウセンアザミとビーバーの自慢比べ。なかなか楽しい会話ですね。
チョウセンアザミはアメリカではとても親しまれている花のようです。Lewis と Clark の探検で、Jefferson 大統領は Lewis との暗号文に、チョウセンアザミという文字を使い、この文字が最初についた文章だけを、真の通信文にしていたことです。そう思って、このスペルをみると、確かに、九つの文字がすべて違うスペルですね。そんなところから、この単語を選んだ Jefferson はやっぱり凄いと思いました。が・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

147 ペットのナベ鶴

Sioux

Native American Lore



それは、それはずっと昔の話ですが、あるところに自分たちの部族とみんなと一緒に暮らすことに無頓着な男が居りました。でも、かれは、深い森の中に、1人静かに暮らす場所をもっており、そこで、自分の妻と5人の子供たちと仲良く暮していました。子供たちのなかで一番年長の子、この子は男の子でしたが、この子が十二歳になると、随分と腕のたつ、狩人になり、直ぐに森の中を小さな獲物を探して歩き回るようになりました。

そんなある日のことですが、彼が森を彷徨っているうちに、あるナベ鶴の巣を見つけました。なんと、その巣には、一匹の若いナベ鶴がするだけでした。これは間違いなく、キツネか、イタチがそのナベ鶴の残りの兄弟を食べたに違いありません。というわけで、少年は自分自身に向かってこんなことを言いました。“よし、この哀れなちいさなナベ鶴を家にもって帰り、彼を僕たちのペットにして育てよう。もし、私がここを離れたなら、お腹をすかしたキツネが、こいつを食べてしまうに違いないのだ。” こうして、彼は、この若いナベ鶴を家に持って帰り、そして、丁度、五歳になる妹と同じくらいの背丈になるまで育ててあげました。

人間達の中で育ったナベ鶴は、すぐに、家族のみんなが話すことを理解できるほどに成長しました。人間の言葉を話すことはできませんでしたが、子供たちと一緒に遊べることができました。その家族の父親は、前にも話したように、とても上手な狩人でした。彼はいつも狩に出かけると、手に持ちきれないほどの鹿や、アンテロープ、バッファロー、そして、ビーバーの肉を持って帰ってきたのです。しかし、時代が変わってしまいました。動物達は、自分たちを全滅させてしまうような、“Kutesan”（百発百中）のような矢が届かない、どこか安全な場所に移動してしまったのです。そこで、狩人たちは、大地が彼らを飲み込んでしまったように突然消えたその獲物にでくわすことを願って、ある朝、早く狩に出かけたのです。彼らは、丸1日、獲物を探し回りました。でも、結果は惨めなものでした。なんの収穫もなかったのです。そして、彼らは、夜、遅くになった、村にへとへとになって戻ってきたのです。もう、疲れて、死ぬ寸前の状態でした。そして、一杯の桜の皮のお茶（彼らが持っているものといえば、こんなものしかありませんでした）を一揆に飲み干し、かれは直ぐに無意識になり、そして、夢の世界の眠りについてしまったのです。子供たちも、それからは父の狩に参加したのですが、哀れな女は、どうやって彼らは自分たちの可愛い子供たちを上から救ってあげられるのか途方にくれて考え込んでしまいました。と突然の夜の帳のなかで、ナベ鶴の鳴き声が聞こえたのです。と、ペットのナベ鶴が飛び起き、そとにでて、その呼び声に鳴いて応えたのです。最初の暗闇の中で鳴き声をあげたナベ鶴は、そのペットになっ

て居るナベ鶴の父親の鳥でした。そして、キツネさんから、彼の子供やその友達がどれほど飢えているのかを聞いて、彼は、その部族の狩の場所まで飛んできたのです。その日は、狩がとてもうまく行きましたので、ナベ鶴は沢山の食料を難なく手にすることができたのです。こうして、このナベ鶴が狩人たちのテントまでその肉を運んできたのです。テントの上を飛び回りながら、その肉を大地に突然落として行きました。そして、それを直ぐにペットのナベ鶴が拾い上げて、女の所まで持っていったのです。

そこで、彼女は家族のみんなが朝目を覚ましたときにびっくりさせようと思い、明かりとりにするいい薪を集め、それを乾いた残り火の上に積み重ね、そうして火をおこして、その肉の脂を焼き始めると、その脂がとろけでして、とても素敵なお馳走になったのです。彼女は料理に忙しかったのですが、でも、森の方から何か不思議な音が聞こえてこないかと耳を澄ましていたのです。というのは、よく他の部族の敵が回りをうろついていたからなのです。フライパンを手にもっていると、とろけ出した肉の脂が、そのなかでどんどん増えていき、沢山の温かいと汁になって来ました。すると、その沢山できた脂に、なんと、彼女がいつも使っている手鏡のように、テントのドアの姿が映っており、それをはっきりと見ることはできたのです。

こうして、彼女が料理を殆どし終わるころに、誰かがまるで近づいてくるような足音を耳にしたのです。途端に彼女の心臓が激しく脈打ち、胸がドキドキとしてきましたが、しかし、彼女は、自分自身に悲鳴を立てたりしないように言い聞かせ、じっと静かにそこに座って見守っていました。この賢い女は、間違いなく敵が来たような、こうした時にどうすれば一番良いのか良く知っていたのです。こうして、足音なのか、それとも、何かのざわめきなのか、その音はなおも近づいてきて、とうとう、彼女が、フライパンの中に写ったそのテントのドアを開けようとしている手を確認できるまでになったのです。そして、寝ている父親と、子供たちを、そして、火のそばに座っている彼女を、まるでその人数を数えるかのように、指差しているのです。

この、敵さんは、火のところに冷静にじっとすわっているこの女が、彼の動きをしっかりと観察しているとはちっとも思いませんでした。その手がユックリと扉を引き、そして、足をドアの中にユックリと踏み込んでくると、静かな夜の暗闇のなかに、プレーリー狼の恐怖の唸り声が響いたのです。（実は、これは、プレーリー狼の唸り声をまねたもので、自分たちの戦士に、偵察に出された見張り役が、敵を見つけたという合図だったのです。）

そして、彼女は直ぐに、自分の夫と子供たちを起こしました。深い眠りについてたのに急にぶっくらぼうに荒々しく起こされたので、夫は、どうして彼女がそんなにひどく起こしたのか詰め寄りました。女が、彼女が見たもの、そして、耳にしたものを説明したのです。そして、直ぐ、そのナベ鶴の肩に、古い毛布に掛け、ピンでとめ、それから、古びたバッファローの頭巾を帽子のように頭にのせてやりました。薪を残り火の上に沢山くべて、彼女は彼に家族が戻ってくるまで、小屋のそとで、その周りを走り回っているように言い聞かせました。自分たちは、その脂と一緒に料理をするような木の根を探し出すことができるかどうか、見に行くような格好をするように言いました。こうして、彼女は急いで毛布を自分の腰に巻きつけ、そのなかに赤ん坊をくるみ、それから、三歳になる子を抱き上げると、その子を背中におぶったのです。一方、父親のほうも、急いで、次の2人の子供を抱き上げました。そして、一番上の子供は、自分で何とかするように言ったのです。

テントを出ると、彼らは、彼らの家の西に方角にある高い丘のところで落ち合うことにして、それぞれ別の方角に走り出しました。テントの中の炎が光り輝いて、彼ら見えにくくし、そして、哀れなナベ鶴は、テントの回りを走り回っていたのです。その姿は、まるで、毛布を纏い帽子をかぶっている子供そのものでした。

そうしていると、突然、猛烈な鉄砲の音がし、恐ろしい、Crow族のインディアンの戦争の雄たけびが聞こえました。テントに人気がないのを見つけると、彼らはあたりを荒らしまわり、そして、あの深い森の暗闇のなかに吸い込まれるような見えなくなってゆきました。

次の日の朝、この家族は、彼らの可愛がっていたナベ鶴がどうなったのかを心配で家に戻って来ました。すると、そこには、彼の愛する人たちのために犠牲になり、八つ裂きにされた哀れな鳥の姿が横たわっていたのです。

クロー族に襲われたスー族をナベ鶴が犠牲になり助けた話は、彼らの部族の中に伝わる基調な話のように思います。そのあと、結局、スー族はクロー族に復讐をし、彼らを全滅させるのです。その戦いの場がサウス・ダコタの西のはずれにあります。

部族と部族の戦いは、彼らにはまことに辛らつなものであったに違いありません。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

148 ストローベリーの言われ

Cherokee

Native American Lore

最初の間人(s ga ya)が創造され、そして、その仲間ができた頃、彼らはとても仲良く苦らしい板のようですが、そのうちに争いごとなどするようになり、とうとう、彼の妻(ge ya)が夫のもとを離れ、ずっと東の方にある太陽の国(Nundagunyi)に旅立ってしまいました。

男は、悲嘆にくれ、1人淋しくあとを追いかけたのですが、しかし、女のほうは、どんどん先に進んでしまい、創造の神が、彼のことを哀れに思い、彼に、自分の妻のことに腹を立てているのかと尋ねるまで、決して後ろを振り返るようなことでませんでした。すると、彼は、決して腹などたてていないと返事をしましたので、創造の神は、さらに、彼に、彼女に彼のもとに帰ってきて欲しいのかと尋ねると、彼は、夢中になって、その通りだと言いました。

そこで、創造の神は、その女の道の行く先にそって、実がはじけるように熟れた房のついたハックルベリーの束を置いたのですが、ところが、女の方は、そんなものには目もくれませんでした。そこで、その先にはブラックベリーの塊をおいたのですが、やはり、彼女はそれも無視をしていたのです。他の果物の木、一つ、二つ、三つ、そして、よく熟れた赤いサーブスベリーの木を、彼女の気を引くためにその道筋に置いたのですが、でも、彼女は、立ち止ろうともせず、どんどん先に進んで行きました。が、突然、彼女は、あるところで立ち止まったのです。それは、それまで知られて居なかった大きな良く熟れたストローベリーの实を見た時でした。

彼女は、それを試しに食べるために少しだけ実を集めようと身をかがめ、そして、彼女がその実を摘もうとして、顔を西の方角に向けたのです。その瞬間、彼女は、自分の夫があとをつけてくるのが目に入り、それあとは、彼女はそれ

以上もう、先に進むことができなくなったのです。彼女は、そこに座りこみましたが、彼女が待つ時間が長くなればなるほど、彼女の夫に対する気持ちが強くなっていたのです。そして、最後に彼女は、素敵なイチゴの束を集めると、それを持って、夫にあげようと元の道に戻っていったのです。彼は、彼女を心優しく迎え、そして、彼らは、2人連れ添って家に戻って行きました。

インディアンにとって、ストローベリーは、只単に貴重な食料というだけでなく、強い夫婦の絆の象徴なのですね。我々の忘れた大事なものを教えられたような気がします……。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

149 神秘的な丘

Sioux

Native American Lore

あるとき、若い男が狩に出かけ、ひょっとしたことある険しい丘のところにやって来ました。その丘の東側は、とても険しく落ち込んだ土手になっていました。彼はこの土手の上に立ち、そして、その麓のところに目を見やりました。すると、なんとそこには小さな穴が開いているではありませんか。中を詳しく調べようと近くに寄ってみると、そこは馬やバッファローが入っていくのに十分なだけの広さになっていたのです。そして、入り口の両側の壁には、様々な動物の絵

が書かれていたのです。

彼が、その穴の中に入って行くと、その床にはあちこちに腕輪、パイプ、そして、まるでなにか創造の神に捧げものでもしているかのように沢山の飾り物が散らばっていたのです。彼は、最初の部屋を通り抜け、次の部屋に入ると、そこはちょっとばかり暗くなっていたので、自分の顔の前にある手さえもはっきり見ることができなかったのです。そして、少し恐くなった彼は、自分の見たことを村にかえって話をしようと、その場を急いで立ち退きました。

この話を聞いて、酋長は自分の部下の中でももっとも信頼のおける戦士を四人選び、彼らに、この若い男が話していることが本当かどうか確かめることにしました。そして、この5人が、丘までやってくると、その若い男は、中に入るのを拒むのでした。というのは、あの入り口のところに書かれていた絵がその時には変わっていたからなのです。

そこで、四人が中に入ったのですが、最初の部屋のところにあるのは、確かにあの男の言うとおりの様子でしたが、さらに、奥に進んでみますと、やはりそこは暗く彼らは何も見ることができませんでした。しかし、彼らは、さらに進んでゆくと、壁に沿って自分たちが進んでいるのだとわかりました。そして、ついに、中に入るには無理やりいかなければならないくらいの狭い横道を見つけたのです。かれらは、自分たちがいくつかの壁の回りにいることに気づき、そして、そこに別の入り口を見つけたのです。そこをちょっとばかり下がって行くと、今度は、彼らは、四つんばいになって進まなければならなかったのですが、こうして何とか次の部屋まで来ることができました。

最後の部屋の入り口の所までくると、彼らは、奥の方からなにか非常にまろやかな甘い匂いがしてくるのに気が着きました。手探りの状態で四つんばいになり進んでゆくと、彼らは床に、下のほうに繋がっている穴を発見したのです。あの甘い匂いはその穴から立ち上ってきていたのです。彼らは、直ぐに話し合いをし、もうこれ以上前に進むのはやめ、自分たちの見たことを村に帰り報告することにしました。と、最初の部屋の入り口のところで、若者達の1人が、こう言いました：“僕たちが見た事が真実だということを示すためにここにある腕輪を少し持っていこうかと思うんだが。”、“駄目、駄目。”と他の3人が言いました。“これは、なにか偉大な創造の神が宿っているものなんだ。お前さんが、自分の物でもないものを持って行くときとお前さんの上になにか

不幸がおきるんだ。” “なんてことを！ 君たち、まるで老婆のようなことを言うんじゃないか” と、彼は言うなり、綺麗な腕輪を1つ拾い上げ、それを自分の左の手首にまきつけました。

彼らは部落に戻ってくるなり、直ぐに自分たちが見たことをみんなに報告しました。若い男は、自分たちが話していることが本当のことだということを証明するために、その腕輪を見せたのです。

このことがあってから直ぐあとに、これらの四人の男たちは、狼を捕まえるための罠を仕掛けに出かけて行きました。彼らは、とても大きな丸太の片端を持ち上げ、そこに、つかい棒をおこうとしました。そして、少しばかり大きな肉の塊がその丸太から5フィートほど離れた、柱と小枝によって隠された場所に置かれました。支えとなっている棒が置かれた場所は、狼が入るには十分なほどの広さがある穴が開けられていました。その肉の臭いをかぎつけ、柱と小枝の間をすり抜けてその肉にありつくのが困難な狼は、穴の中に入って言って、その肉を口にしようとして体をくねらせて行こうとすると、そのつかえ棒を押し倒し、支えの外れた丸太が落ちてきて、その重みで狼を素早く捕まえる仕組みになっていました。

その腕輪をつけた若い男は、つかい棒をたおして、丸太が倒れてきたときに、その丸太の下に、狼への仕掛けの餌を置いているときでした。ですから、倒れてきた丸太が、その腕飾りをつけている彼の手首に覆いかぶさってきたのです。そして、彼は、身動きがとれなくなり、大きな声で助けを求めたのです。その彼の呼び声を聞いた、彼の友達が彼を助けにやって来ました。そして、その丸太を持ち上げると、なんと、そこには、その若い男の壊れた腕輪があったのです。“そら、ごらん。” と彼らは口々に言いました。“あの、不思議な丘の洞穴から腕輪なんて持ってくるからこんな罰にあたったんだよ。”

そんなことがあってから暫くたって、若い男はその丘のところに行き、なんとその壁には、手に棒をもち、その棒には、もう一つの棒にわたるくらいとても沢山の肉が刺さり、その肉が余りにも重いので二つの割れてしまっていたのですが、そんな姿をした女の絵を見たのです。

彼は、村に戻ってきて、自分が見たものをみんなに報告しました。その絵の回りの当たり一面に、彼はバッファローのひずめの跡を見つけたのでした。

さて、次の日には、その部落の近くにバッファローの大群が押し寄せて来ました。そして、沢山のバッファローが殺されたのです。その肉を捌き、乾燥させるのに女達はとても忙しく働きました。村には、これまでになく沢山の肉の収穫があったのです。女が肉を長いテントの柱に突き刺すと、柱に二つに折れてしまい、彼女は、仕方なく、別の柱に肉をつる下げなくてはならなかったのです。それは、まるで、若い男があ不思議な丘で見たのと全く同じような情景でした。

こんなことがおこってから、それあとずっと、インディアン達は、毎週この丘を訪ねるようになりました。そして、そこで彼らは、自分たちのしようとしていることを、どうすればうまく行くのか、その手がかりを得ようとしたのです。

この丘は、いつの時代も、その部族の予言者として崇められて来ました。

インディアン達も、己の力の限界をしっていたから、何か神聖なものに頼ろうと、こんな伝説を生み出したのではないのでしょうか。超越したなにかの前で、謙虚になることが、我々に幸せを施してくれる、そんなことを教えてもらったような気がしましたが、・・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

150 Unktomi と鏃(やじり)

Sioux

Native American Lore

それは、ずっと昔のことですが、あるところにいつも一緒にいるとても中の良い 2 人の若者が住んでいました。1 人は非常に思慮深い男で、もう 1 人のほうはなんでも衝動的に行動をする人間でしたが、彼は決して行動を起こす前に考えることをやめるような事はしませんでした。

ある日のこと、この 2 人の仲良しは、自分が愛したことのある経験を、御互いに話をしながら、歩いていました。彼らは高い丘に登り、そして、その頂上につくと、なんと、そこで、まるで小さな石か、水晶のようなものが、何かぶつかりあっているような、カチカチという音を聞いたのです。

そして、あたりを見渡してみると、そこに大きな蜘蛛が、非常に沢山の火打石の鏃の中心に座っているのに気が着きました。その蜘蛛は、矢の先に火打石のかけらを忙しそうにせっせと取り付けていたのです。彼らはその蜘蛛を見ていたのですが、しかし、蜘蛛はじっとしていて少しも動こうとしませんでした。そればかりか、殆ど鏃の先に取り付け終わろうとして居る火打石のかけらを叩き続けていました。

“こいつを叩き潰してみようか” とあまり考えない男の方が言いました。“いや、待て。” ともう 1 人が返事をしました。“蜘蛛は、何も叩いたりはしていないよ。事実、なにかものをつくっているんだ。彼は、僕たちが矢の先に付ける火打石の鏃のようなものをね。”

“なんだ、君は怖いんだね。” と、最初の男が言いました。“彼は、お前さんを打ったりはしないさ。彼を叩くから僕を見ているんだ。” そう、言いながら、彼は、鏃を 1 つ取り上げ、そして、それを“Unktomi” めがけて投げつけました。すると、これが、その蜘蛛の横に当たりました。Unktomi は、横倒しになり、それ

から起き上がると、今度は、立ち上がり彼らを睨みつけましたので、その若者は笑いながら、こう言いました：

“よし、お前さんのお爺さんのようにしようじゃないか、“Unktomi”は、我々の仲間を好きじゃないみたいだね。” 彼らは、Unktomi を叩いた男が、突然、ひどく咳き込みましたので、丘を下りはじめました。彼の咳はますますひどくなり、そして、とうとう彼の口から小さな血の塊を吐いたのです。ところが、その血がだんだん膨らんできて、そして、とても沢山になり、口から流れ出したのです。とうとう、血が相当な量になり、そして、どんどん出て来ましたので、その男はもう息をすることすらできなくなったのです。最後に彼はそこに倒れて死んでしまいました。

その思慮深い男は、彼の友達がもうこれまでだというのを見て、急いで村に帰り、そして、おこった出来事の一部始終、話をしました。親戚のものや、友達が沢山丘に急いで駆けつけ、そこに、確かにあの衝動的に行動する若者が死んで、冷たくなり横たわっているのを確認しました。彼らは、会議を開き、そして、Unktomi の部族の酋長を迎えに行ったのです。彼は、そこで起きたことを聞くと、会議の場で、彼は、守ることができるだけで、自分の部族の Unktomi に何もすることはできない、と言いました。

彼はこういうのでした：“おお、我が友よ、あなたの部族が矢の先を短くしていますので、それを見て、私は、私の部族の者たち大勢のものに、火打石のやじりを作らせております。私の部族の男達がこうして、外から邪魔が入らないように一生懸命になっています、そして、あなたのところの若い男達が、われわれのところの男達の邪魔をするばかりでなく、それを作るのがとても困難なやじりの一つを取り出して、それで彼をひどく打ち、痛めつけたりしているんです。私のところの男は、座ることもできなければ、また、このいじめにどうしようもすることができなくて、小さな鎌でかれを打ち Unktomi のところから追い出したのです。

“このことが、かれを死に至らしめた大出血を起こしたのです。ですから、今、私の友よ、もし、あなたが友好のパイプにタバコをつめ、そして、それを私のところに渡してくれるなら、あたしは、あなたと仲良くし、私の部族は、いつもあなたの部族のために火打石のやじりを沢山差し上げることにします。” こういいながら、Unktomi Tanka は、彼の友好のシンボルのタバコを吸うのをやめ、そして、彼の部族のところに帰っていったのです。

それ以後、ずっと、インディアンたちが草原のなかでカチカチという音を聞くときには、彼らは外にでて、その音のする辺りをあちこち歩きまわるようになったのです。Unktomi が鏝をつく手いるのだ：彼らの邪魔をしてはならん、といいながら。

こうして、Unktomi Tank（偉大な蜘蛛）はこの部族の崇拝を受けるようになり、それからは、鏝を作る仕事を邪魔されることがなくなったのです。

. Unktomi は蜘蛛の部族、草原で蜘蛛をみつけても、決して彼らに意地悪をしてはいけないというのが、インディアンの教えです。それをこんな風にして言い伝えているのは、とても説得力のある話のように思います。われわれが忘れてしまった、純真な気持ちが、そこにまだ残っているような気がしましたが、・・・

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか